続：
見浦牧場の空から

中国山地の雪深い山間部で黒毛和牛の一貫生産に体当たりで取り組んできた見浦牧場の元経営者とその家族が、和牛のこと、牧場のこと、農業のこと、自然とともに生きるということ、少しじっくりお話します。

見浦　哲弥　著

目次

５度飯(2016/10/19) 4
稲作講座(2016/10/29) 5
嬉しい話（Ｉ工業奮戦す）(2016/2/18) 6
お客さんと話す(2015/9/10) 9
ひろしま(2016/9/22) 11
見浦弥七(2016/1/11) 13
年年歳歳花相似たり(2017/2/6) 19
牧場の親父の社会構造論(2017/3/11) 20
ウォーキング(2017/3/11) 23
小板の日米戦争(2015/1/17) 24
あーしわかった(2017/7/15) 28
お祭りと饅頭焼き(2017/5/24) 29
最高の季節(2016/9/1) 31
弥畝山風力発電所(2016/9/20) 32
青年と話す(2012/10/25) 34
心遣い～食肉加工場の建設～(2013/12/22) 36
猛暑(2015/8/26) 39
蒸気機関車(2015/9/15) 41
寿命(2015/10/8) 43
詐欺台帳(2016/1/4) 45
貴方は知っているか、集落那須(2016/1/28) 47
補聴器(2017/1/4) 49
老化(2017/2/15) 50
久方ぶり(2017/2/22) 52
ブラウンルート(2016/4/28) 53
１８豪雪(2018/3/26) 54
佐田先生(2017/7/15) 56
高齢者講習(2017/11/10) 58
マイストーブ(2018/1/9) 61
意地に候(2018/3/9) 63
前に深入、後ろに苅尾(2018/1/22) 64
足跡(2018/3/11) 65
母の記憶(2018/3/24) 66
日々新たなり(2018/3/20) 69
腕時計(2018/2/15) 70
私と秘境Ｙ部落(2016/2/6) 71
熱中症で倒れる(2018/8/12) 73
遠い道(2018/8/18) 74
私の本(2017年1月) 76
雨が降らない(2018/8/25) 77
原爆の広島駅(2018年7月) 78

夢(2018/8/13) 79
飛行機雲(2018/10/8) 80
Sさん(2018/6/30) 81
岡本豆腐の復活(2018/8/27) 83
私の自動車遍歴(2018/11/15) 84
励まし(2019/2/7) 86
島津和弘様(2013/2/15) 87
小便物語(2018/12/30) 89
今年も燕がやってきて(2019/6/18) 90
夢(2018/11/17) 91
稲刈り(2018/10/26) 92
文章が書けなくなりました(2016/10/1) 93
転倒(2019/6/22) 94

５度飯(2016/10/19)

春が来て田植え時になると大畠（見浦の屋号）は５度飯になる。朝５時になると五月女さんの頭が（上殿のおばさん、大畠の女中頭みたいな人で親父様でも頭が上がらなかった）「哲弥さん起きんさいよ」と起こしに来る。泊まり込みの五月女さんの起床時間だ。そして、お茶漬けをかきこんで田植えの苗取りのために田圃へ出る。春とはいえ５月はまだ寒い。日によっては苗代は薄氷が張っていて、５年生の男の子には厳しい気象である。尻込みしても跡取りの男の子はこのぐらいは我慢しろと容赦はなかったね。
それにしても５度飯は都会の３度の食事が当然だった子供には異様だった。勿論、貧しい田舎のことである。漬物と自家製の味噌汁、５度の内、１度か２度、野菜の煮物があればご馳走の世界、魚や肉は盆と正月、食べられるだけ有り難いと思えの世界だった。でも腹が減らなくてね。

ある時、集落の会合で喧嘩があった。山国の例とて集まりの最後はドブロク（密造酒）で酒盛り。どうして、そんな話になったのかは覚えがないが、３度飯が常識の時代に５度目飯とは時代錯誤だと大論争になった。終いには殴り合いでね。会合はメチャメチャ、まだ少年だった私の目には異様だったんだ。

そこで親父さんに聞いたんだ。「なんで５度飯なん？」ところが親父さんの答えは予想外だった。「田植の手伝いに来る人は、家では朝飯を食べないで来るんだ。そして夕飯も家では食べないんだ」。小板にも水呑百姓と呼ばれる貧しい家庭がありました。その人達に配慮して５度、飯を出していたのです。そう言えば５度飯を主張した人はどん底を経験した人、時代遅れと攻撃した人は物持ちの若者でした。

それは人のプライドを傷つけないで人に配慮することの大切を学んだ第一歩だったんだ。

社会が豊かになり制度も充実して、その日の食事にこと欠く話は聞かなくなったが、社会弱者は何時でも存在する。そして相手のプライドを傷つけないで配慮する援助は何時の場合でも大切なんだ。

時代は進んで社会のシステムも生活も進化したようにみえるが、声高に正邪を論じる人が多くなった。そして５度飯のような見えない思いやりは日本人から消えた様に見える。それは社会が生き続けるための潤滑剤だったのに。

2016.10.19　見浦哲弥

稲作講座(2016/10/29)

物置がわりにしていた廃バスが朽ちて雨漏りが激しくなった。何とか整理をと気にはしていたものの、忙しさに取り紛れて放置してあったが、何の気の迷いか?整理を始めたんだ。
詰め込まれた様々な品物の中には古い雑誌も決算書も子供たちの教科書や通学服など、出るは出るは、どの品物も記憶があるものばかり。その子供たちも長女が６０何歳、末っ子の和弥で５０に近い。ずいぶん長い時間が過ぎたものだ。

その中に混じって私の稲作の専門書が現れた。半ば朽ちてはいるが、かろうじて表題は読める。６０年もの遠い時間の彼方から記憶を呼び戻した本は朝倉書店の”稲作講座３巻”著者は戸苅義次・松尾田考領、両先生、分厚い本でね。確か価格４８０円。当時は小板の日当は４００円。３巻ともなると崖から飛び降りるほどの勇気がいったものだ。でも、この本のお陰で小板では稲つくり１番になったのだが、本の丸写しでは成功しなかったろう。もう一つ”１３度”に書いた小板独特の条件を見つけて付加したことが成功に繋がった。世の中、丸写しだけでは成功しないと教えられた一事でもある。

勿論読書だけで成功するわけはない。泊がけで通った西条の試験場での学習も大きな力になった。勉強は進学しなければ出来ないのではなくて、強い意志さえあれば、あらゆるところに教場はある。没落の家運の中でも学びの場を見つけだすことが出来たのだ。

勉強するということは人生の大きな条件の一つでもある。その結果が電気事業主任技術者検定に合格したのだ。環境に恵まれなくても、それを口実に後ろ向きにならなければ道は開ける。運が悪くて目指す道が閉ざされても再び新しい世界が現れる。俺は運が悪いと諦めるのでなく、一度きりの命、どこまでやれるか試してみるかと挑戦することで、新しい道が向こうからやってくる。人生とは不思議なものである。

その過程の私の道標の一つがこの”稲作講座”、私の大切な人生の道標の一つが遠い時間の彼方を蘇らせてくれた。朽ちた表紙が若かった私の生き様を語りかけて。

2016.10.29　見浦　哲弥

嬉しい話（Ｉ工業奮戦す）(2016/2/18)

久しぶりに広島のＩ工業の社長が訪ねてきた。開口一番「見浦さん、経営が安定した」と嬉しそうに報告されたのです。
彼は６０代、家族経営の小さな精密研磨の町工場の社長が、田舎の小さな牧場の爺様に会社の現状を報告する、何か変だと思いませんか。今日はその話です。

もう、何年になりますか、ひょんなことから、彼との付き合いが始まりました。
小板に別荘が増え始めて２０年余り、小さな集落の小板に、もう４０数軒にもなりますか。彼は遅れてやってきた別荘人、小板橋の近くにヒューズ社のキャンピングカーを据え付けて別荘人になった。
当時、私はその近くの今田さんの畑を借りて牧草を作っていました。この話は、その草刈の作業の休憩時に交わした世間話から始まったのです。

彼が別荘を持とうと思い付いたのは、仕事がようやく安定して利益が出始め、長い苦労のご褒美にささやかな贅沢をと思い立ったからだといいます。
そこで、かねてから付き合いのあった大野モータースの社長に相談したのが事の始まりで、彼の勧めで小板に別荘を持つことになり、キャンピングカーを据えて、小さな贅沢を楽しもうと思ったのが間違いの元だったと話し始めたのです。

長い間辛酸をなめて、ようやく摑んだ幸せにほっとしたのは 7 ヶ月間だけだったと、突如始まった赤字経営で、金策に四苦八苦するようになって、別荘なんて買わなきゃ良かったと後悔してるんだ、こんな話でしたね。

そんな時に、親しくもない私に内輪話を聞かせる、これは月並みな返事はできないなと思ったのですよ。そこで、腰を入れて聞き始めたのです。

彼の親会社は自動車部品のギヤを作るメーカー、そのギヤの最終研磨をするのが彼の工場、但し技術は最高で 3/1000 の精度があるんだと自慢していましたっけ。
ワーゲンの部品の加工依頼も来る、世界的にも認められているんだとね。
ところが時代は何が何でもコストの低減、人件費の安い中国に工場も仕事も移転する流れが起きたんだと、そ
して俺のような孫受け工場にも加工賃の切り下げ要請が続いたんだ、その挙句、仕事まで中国に持ってゆかれてな、偉いことになってしまった、こんな話でしたね。

ところが聞いている内に何か違うなと思ったのですよ。私の牧場は和牛肉の生産をしています。ところが仲間の農家は如何に高く売れるかと、そのことだけに血道をあげています。
その為には、ありとあらゆる手段をとるのです。現在の和牛肉の評価は肉の中に如何に多くの脂肪が入るか、その脂肪がいかに小さく均質に入るかで決まるのです。味でなく見た目の美しさでね。それがサシと呼ばれる評価法です。和牛の場合、A1 から A5 の 5 段階評価、A5 になると A1 の 3 倍以上の値段がするのですから、気持ちは判りますが、その為に牛の健康をぎりぎりまで追い込んで目的を果たす。

例えばビタミンＡは脂肪の分解ホルモンの役割をします。サシは脂肪を筋肉の中に小さく均質

に霜が降りたようにいれる、これが霜降り肉の語源です。ビタミンＡはその小さな霜降りの脂肪を分解してしまう、だから人為的にビタミンＡの欠乏症をおこさせるのです。和牛は肝臓の脂肪の中にビタミンＡを蓄える力が大きいといいます。６ヶ月くらいは全くビタミンＡを給与しなくても耐えるですが、それを越えると起立不能、視力低下、ひどい時は盲目になります。おまけに筋肉の細胞膜が弱くなり細胞液が流れやすくなります。その結果ドリップという肉汁が出やすい牛肉になります。それをいかに抑えて見事な霜降りＡ５肉を生産するか、それが腕の見せ所、それが高級肉だと評価され高値で売れてゆく、食品が味や食味に関係なく見た目だけで売れてゆく、それは間違いだと思うのです。

食べ物は安全で、美味しくて、リーズナブルな値段でなくてはいけない。恩師中島先生の教えを忠実に守ろうと努力してきたのですが、社会は見た目重視に変わった。でも諦めずに消費者の意識改革に微力を投じてゆく、これが見浦牧場の目標の一つなのです。

ところが社長の話を聞いていると消費者は全く登場しない。親会社の営業の仕入れ担当の事ばかり。少しばかり不自然でしたね。農業も工業も最終的には消費者が品質的に価格的に妥当と感じたら買ってくれる、そうやって経済が動いてゆく。仕入れ担当が動かしているのではないのに、仕入れ係が全て正しいと信じることが生き残ることに繋がるとは、私には理解できませんでした。
そこで聞いたのです。貴方の仕事が最終の製品の何処にどう繋がるのか、調べたことがありますかと。「そんなことは知らない」という返事を聞いて、こういったのです。

私達が作っている製品は最終的に消費者が評価する。いいものはいい、悪いものは悪いと、値段と品質とを吟味して購入してくれる。私達生産者はその消費者の意見をいかに汲み取るか、そして、いかに対応するかが事業の成否を決まると私は理解している。貴方とは仕事は違ってはいるが、長い目で見ると消費者の意見をいかに反映するかが基本ではないのか。中間の業者は生産者の代弁者に過ぎない。どうして貴方の仕事が最終の消費者のどの部分にどのように使われているかを知ろうとは思わないのか。たとえ下請けの孫受けであっても、その仕事は最終的に消費者が評価するのでは？、間接的だけどね、と。

それを黙って聞いていた彼は三ヵ月後に再び訪ねてきました。「どうしたい」と聞く私に「３ヶ月ほどセールスに各会社を歩いたよ」と答えました。消費者への対応は各会社の企業秘密の一つ、真正面から聞いても答えてくれるわけがない。それならどうするか、新規注文の開拓にと各会社をまわる分には警戒されないだろう。
一代で会社を興す奴は考えることも行動力も常人とは違う。「私のところは、こんな加工が出来ますがお宅の会社で仕事はないでしょうか」と、売込みをかけたそうな。本当の目的は他にあるのだから仕事がもらえれば棚ぼた、断られても話が聞ける、ヒントがもらえれば拾い物とセールスに歩いたんだと。

その最大の収穫は発注元の求めている精度は３/１０００でなくて５/１０００でも良かったということ。それなら合理化の余地はある、一括削磨でも対応はできそうと考えたんだという。「そこでな、システムを考え直してな、何個かを一度に研磨するようにしたんだ。システムは出来たがセッテイングが自動では精度が出ない。試行錯誤をしてね。ふと気がついたんだな、俺は熟練工の手を持ってるんだ、使わない手はないとね。熟練の腕と新しいシステムで加工したらうまくいってな。親会社の言い値でも利益が出てな。親会社からこの値でどうして利益が

出るのか教えてくれときたんだ。どうしようか迷ったけれど、俺の腕は真似ができないはずと教えてやったんだ」と。

そこで質問をしてやった。「また調子に乗って１社だけの仕事をしてるんじゃないだろうな」と。「誰がそんなことをするかい。そしたら親会社が文句を言ったがな。他社の製品の間に仕切りを入れろといっただけ」と明るい顔でのたまった。

そんな親父さんを見て、サラリーマンの息子が、親父の技術がこのまま消えるのは勿体ない、元気なうちに自分の物にすると帰ってきた。そして俺の技術の上にコンピュータをのせてな、新しい加工法を開発していると、天国の顔をしていた。

明るくなった奥さんとの二人連れ「見浦さんは、まだようならんか」と自信を取り戻した顔のご夫婦を眺めていると他人の事ながら嬉しくなってね。私の小さなアドバイスでも少しは役に立ったかと。

しかし、見浦牧場は依然悪戦苦闘が続いている。昔の軍歌ではないが"何処まで続くぬかるみぞ”である、それでも私達は頑張るのだ。

2016.2.18 見浦哲弥

お客さんと話す(2015/9/10)

2015.9.10　雨、お店にお客さんが来る。横浜の人で山登りが趣味だとか、東日本は折から悪天候で西日本ならできるかと走ったが、こちらも雨、することもないので目に付いた牧場の売店で肉でも買って帰るかと立ち寄ったとか。

折角だから牧場でも見学させてもらうかと声をかけられた。丁度、私が通りかかって案内を引き受ける。都会の人は自分の専門外には智識が広くない。しかし、田舎の住民と違って好奇心は旺盛である。この人たちの関心を引くのには、地域の特性と一般に知られていない情報の提供が効果的である。そこで牧場が見える牛舎に案内、一望１０ヘクタールの草地と約１００頭の黒牛は、中国山地では珍しい風景になって、見る人の興味をそそるらしい。そこで見浦牧場の一風変わった情報の提供をしたんだ。

先ず牛が年間を通じて放牧されていること、そして海抜が８００メートル近くで、積雪が２メートルばかりあること、厳寒期は零下１０度以下が続くことも珍しくないこと、など。そして見浦牧場で生まれた牛のみで牛群が出来ていること、５０数年外部から牛を導入しないで、選抜淘汰を繰り返したこと、高級牛のサシを追及する牛作りのでなくて、利益追求の大型化でなく、モットーは、安全で、美味しくて、リーズナブルな価格の実現を追及してきたなどを話して差し上げた。

自然の中での牛の集団飼育は、彼らが生きるために学び、その智識を次世代に伝えてゆく。頭脳は人間だけの特性でないんだと、人間の驕りを打ち砕くような彼等の本能等々、都会人はそんな話を興味を持って下さる。

見浦牧場の１－２キロ圏内には、ツキノワ熊の営巣地が２箇所はあるらしく、何度も牧場内に出現する。最初に襲われたのは３０年余りも昔になるか、日暮れに子牛が２頭群れから離れて行動し１頭が殺された。母牛が夜中に我が子が群れにいないことに気付いて騒ぎ始め、翌朝、牧場内で叩きつけられて死んでいるのを発見したんだ。暴れん坊の熊君も、２頭同時に殺すことは出来なくて片方は助かったのだが、殺された子牛は衝撃で頭皮がはがれていた。しかし、それからの牛達の反応には教えられるものがあったんだ。

まず、集団で行動するようになった。子牛と親牛は離れることはあっても子牛同士で集団を組む。よく見ると中心になる牛がいてその牛が動くにつれて集団が移動してゆく。牛にも強弱があっていじめっ子や優しい牛と様々だが、中心になるのは優しい強い牛なんだ。教えられたね、ボスは優しさがなくてはいけないと。家畜の牛でもそうなら、人間はそれ以上でなくてはいけないんだとね。おもねることは要らないが、思いやりがとやさしさが必要なんだと。
最近の世の中は人は性善と信じて非武装、非暴力なら自分は何もしないでも安全だと信じている。ところが見浦牧場には牛は何もしないのに腹を減らした熊君がやってきて襲う。そして弱い牛達は集団を組み身構えることで対応している、決して攻撃することはないが。人間も動物だと私は思っている。攻撃してはいけないが、身を守る手段は持たなくてはと思うんだとね。

そんな話をお客さんは黙って聞いていた。反論されなかったのは私が老人だったからだろうか。軍国日本の戦前、戦後を体験した生き残りの人間として、動物が語りかけている行動の中に私達の真実があるそんな気がしているのだ。

お客さんは反論はせずに聞いて、来て良かったと帰られた。小板という小さな集落のはずれに起きた、ささやかな話である。

2015.9.10 見浦哲弥

ひろしま(2016/9/22)

2016.5.27　広島の平和公園にアメリカの大統領オバマさんがやってきて記念碑に献花して下さった。間一髪１２時間の違いで命を永らえた私にとって感無量のものがある。

日本が暴走した２，２６事件から我が家の近辺で起きた日本暴走の結果、内外の多くの人命が失われた。その張本人の陸軍の急進派の御大は靖国神社神社にいるというから日本人も狂っている。天下の秀才と言われた東条が２０００年も続いたという日本を破壊して、他の指導者がそれぞれ自決して自分を裁いたのにピストル自殺の真似事ですまし、責任をヒロヒト天皇に擦り付けようとした、その彼を靖国へ祀るというのだから狂っている。陸軍きっての秀才と言われた彼の生き様は頭でっかちだけでは集団を指導し生き延びさせることは不可能だということかもしれない。自然の中で暮らしている牛群を見ていると利口な牛即リーダーでは牛がうまく育たなかったね。強さと利口と優しさと決断とのバランスの取れた牛がリーダーだと安心して見ていられたがね。

あれから７０年､幼いながら戦前の広島を知っているし、（毎年夏休みには親父さんの勤務地の福井から小板に帰省していた。昔は２日がかりの大旅行、必ず広島に一泊した）戦時中の広島も陸軍の幼年学校受験の為、広島で宿泊した。原爆直前の広島に建物疎開の作業で県庁の講堂に泊まって１０日ほど働いた。広島の原爆前日の夜広島を離れて辛うじて生き残った、あの一日の記憶は未だ新しい。そして原爆投下の３日後、一時帰宅を許されて帰宅の途中、乗換の可部駅で被災者を見た。駅前の広場や構内の貨車の中に並べられた数多くの瀕死の被災者や、死体を見た。「水、水」と微かに訴える声は未だに耳に残る。数年後小板にお婿さんに来た友人は動員で広島で被災者の死体処理で働いた体験を話してくれた。感情が麻痺して何も感じなかった、そして恐怖を実感するまでには長い時間が必要だったと。

牛田に住んでいた岡本の伯母さんは６日の朝、挨拶をしながら家の前を通り過ぎた人たちが１５分もしないのに焼けただれた皮膚をぶら下げて幽鬼のような姿で「水、水」と訴えながら帰ってきた姿を忘れることが出来ないと話してくれた。それは地獄だったと。７０年は草も生えないと言われた広島だが私が働いた１年半後､道端には雑草が生え､八丁堀から本道通りには、まばらながらバラックのお店が並んだ。現在、パン屋のアンデルセンのお店になった銀行の廃墟は無残な姿を晒していたが、広島は生きていた。もっともバラックの裏は水道の鉛管が幽鬼のように無数に立ち並び、傷んだ蛇口から水が無駄に流れてはいたが。

お店の坊っちゃんの子守で歩いた道端の本川小学校の地下室にはドス黒い水が溜まっていた。近所の伯母さんが「まだ何人も沈んでいるのよ」と話してくれた言葉は頭から離れない。
早朝、荷物を積んだ馬車が本道りを通る。その馬糞を素早く掃除するのも小僧さんの役目だった。でも日本人は凄い、復興し始めた広島は見る見る変化していった。夜学の途中の広島駅の変化は今でも思い浮かべることができる。でも裏道りは寂しくて怖かったね。
その広島が見事に復興した。廃墟の中にあつた原爆ドームは華やかなビル群に囲まれて感心を持つ人以外、注目をひかない。あの惨劇を思い出すのが８月６日の原爆記念日のときだけ、体験した人以外、あの惨劇は想像出来ないのだろう。

そして私の文章の中でも語られることが少なくなった。でも忘れてはいない。拙い私の文章の

中の、あちこちに散見する戦争や原爆への思いを嗅ぎ取ってほしい、そんな気持ちでキーを叩いている。

2016.9.22 見浦哲弥

見浦弥七(2016/1/11)

彼は私の父である。従って貴方にとっては曽祖父ということになる。先祖というものは若い時は興味がないもので、私も祖父のことにはあまり知らない。まして曽祖父ともなれば、断片的な知識しかない。しかし、その遺伝子は私の生涯に大きな影響を与えたのだから、知らないということは残念なことである。それにようやく気がついた。そこで貴方が私の轍を踏まないために記憶にある父のことを書き残すことにした。貴方の記億の断片にでもなれば幸いである。

彼は明治２０年に生まれた。父は弥三郎、一人っ子だった由で大切にされたという。見浦家は彼で８代目、血統が続いた点では小板では最古。ところが伝えられる歴史では２代ごとに栄枯盛衰を繰り返したという家柄、弥三郎は家運を盛り返した人で、弥七の時代は見浦家の頂点の時代、これが彼の才能を開花させた。

貴方は明治政府が初等教育の義務制を施行したことを知っているだろう。国の政策だから小板にも小学校がつくられ義務教育が始まった。明治の初めのことである。小板の小学校跡にある廃校舎は三代目、但し義務制は下等小学校と呼ばれた４年生まで、それからは加計にあった上等小学校に進学したんだ。但しこれは義務教育でなくて授業料が要ったらしい、それも４年制でね。勿論、中学校も高等学校も大学も存在したのだが山奥のどん百姓の小倅が行けるわけもなく、上等小学校で我慢した由。ところが寄宿舎がないので下宿、それでも卒業までは資金が続かなかったとかで２年で中途退学、従って正規の教育は６年しか受けていない。

ところが彼の祖父亀吉はは頭の切れた人で国道建設（１９１号線）のおり、県のお役人と渡り合って小板の集落をかすめて通す計画を集落を縦断させることに変更させたという、これが旧国道、当時は従前の権利が侵害されると新しい交通に反対する連中が多くて、鉄道が町から離れたところに通ったり、道路が集落を外れたところに建設されたりして後年に問題を残したところが多かったのに、彼は道路から離れた集落はやがて消滅すると、小板の真ん中を縦断させた。お陰で田圃を２分された農家が激昂して殺してやるといきまいたとか。弱小集落の小板が生き残ったのは彼の先見性のお陰だと思っている。ところが、そんな頭が切れる彼が文盲で字が読めない。息子の弥三郎は字が読めるのだが、一言居士（いちげんこじ）で親父のやり方が気に入らない。県庁や役場から文書が来ても「何とか何とかトー」と要点を言うのみ、文意のみでニュアンスも糸瓜（へちま）のない読み方、爺様、大いにむくれたのだが読めるのは弥三郎だけでは喧嘩にもならない。そこで弥七に勉強させて知識をつければ弥三郎に頭を下げずに済むと気がついた。亀吉爺様、家長の権威を発揮してこれからは知識の時代、弥七には勉強をさせると宣言、以来、どんな繁忙期も親父が「勉強をする」と言ったら仕事に出なくて済んだとか、私とは偉い違いである。もっとも頭の良さは、これから話すように抜群で天と地ほどの違いはあったのだが。

昔は満２０歳になると兵役が義務で徴兵検査と称して体格検査がある。甲、乙、丙、と区分されて甲、乙に区分された青年は２年間の兵役につく。兵役にも職種があって、兵科というのだが軍隊が進歩するにつれて兵科も増えて、親父さんの兵科は工兵、今様に言えば軍隊の土建屋。ところで話はもどるが彼は明治２０年生まれ、従って徴兵されたのは明治４０年という事になる。貴方も歴史で習ったと思うが日本がロシアと戦った日露戦争というのがある。極東に大きな国土を持つロシアが冬季も使える不凍港を求めてシベリアからの南下政策で当時の中国、朝

鮮にまで勢力を伸ばし始め、日本の権益と衝突して戦争になった。GNP が６倍の大国と日本が国家の存亡をかけて戦った戦争である。当時、大連の近くにある旅順港はすでにロシアに租借され東洋におけるロシア極東艦隊の軍港として整備されていた。それを守る堅固な旅順港要塞、この攻略に乃木将軍指揮の陸軍が膨大の戦傷者をだしたのだ。当時の日本軍は指揮官が先頭に立って戦う戦法だった。従って将校の戦死者が続出、それを補充するために苦慮したんだ。将校は兵隊と違って養成に時間がかかる。そこで兵隊の中から優秀な人間を選抜して短期間で将校に仕上げる制度をつくりあげて対応したんだ。これを１年志願兵制度という。明治３７，８年に起きた日露戦争から２年も経過した明治４０年頃は将校の補充も完了していて、士官学校などの養成機関の卒業生などの正規の補充で事足りていたと聞く。ところが優秀な人材を発掘するという、この制度は日本が第２次世界大戦で敗戦になるまで存在したんだ。需要に応じて合格者を増減しながらね。

親父さんはこれに挑戦した。結果はその年、全国で３人の合格者のうちに滑り込んだ。何しろ徴兵されて２年の兵役がすむと階級が一つ進んで１等兵になって帰るのが普通。それからは赤紙と呼ばれた徴兵令状で軍務について階級があがる。ちなみに小板では伍長が最高位だった。当時の若者は小学校の高等科を卒業すると青年団なるものに入団、定期的に軍事訓練を受ける。そのときに在郷軍人と称して昔の軍人が階級章のついた軍服を着て指導にくる。普段は茶店の親父さんが軍服を着ると伍長さん、途端に発言に重みが増す、そんな田舎に２年で将校になって帰ってきたから大変だ。いっぺんに町内の有名人になった。
ちなみに彼の最後の兵役の位は工兵中尉、家の中にサーベル（西洋式の長剣）もあったし軍服もあった。今でも倉を探せば彼が学んだ軍隊の教科書があるはず、手榴弾の製造から爆薬の取り扱い、陣地の建設など興味を引く記述がある。

もともと勉強好きの彼が１年志願の合格で自信をつけた。そして教員の資格認定試験に挑戦したんだ。そして合格したのが中等教員数学科、これが彼に広い世界を見させたらしい。それからは暇があれば数学の勉強、後年、彼が口癖だった言葉は「数学は貧乏人の学問、紙と鉛筆があれば新しい世界をのぞける」と。
勿論、勉強の面白さに取り付かれた彼は小板を脱出、広島の第一中学校に（現在の国泰寺高校）奉職、小板の西岡の娘さんと結婚して牛田に住みついたとか。
当時の大家さんだった岡本のオバサンが言っていた。勉強に気がのると一週間も１０日も一言も口を聞かなかったとか。最初の奥さんとは広島で死別。熊本の県立第一中学校に転勤した。しかし、その間の消息は知らない。そして福井の第一中学校（現在の藤島高校）に転勤、私が物心がついた頃は教頭先生だった。ある年福井で陸軍の大演習があり、福井城址にあった第一中学校の校舎が臨時の大本営（天皇宿舎）になって、接待係となって天皇（昭和天皇）陛下のお世話をしたと聞く。彼の口癖は昭和天皇は純真で気さくな青年だったと。後年、第２次大戦に参戦、内外の人々に多大の被害を与えた張本人という巷間の説に賛成の私を叱って、「軽々に人を判断をしてはいけない、彼はそのような人間ではないと教えられた。そして「私は３０００人の青年を育てた教育者としての経験からも彼が戦争を指導したということはありえない、私の知る昭和天皇は正義感の強い純真な青年だった」と、この話が私の世界観に大きな影響を与えたんだ。
昭和１４年、彼は県立三国高等女学校の校長に就任した。昭和１６年、様々な出来事の末の圧力で退職するまでの２年間、私は三国で多感な少年の時期を過ごした。従ってこの頃からの父の記憶は伝聞ではない。

三国の２年間で父には大きな事件が二つ起きた。その一つは生徒の女学生と他校の中学生との雑魚寝事件、当時の女学校には不純異性交遊は即退学と校則にあったそうで、それが発覚した。勿論、父は即、退学を申し渡したのだが、生徒の親が地域の有力者で内分にと圧力をかけてきたとか、こんなことが明るみに出たらお嫁に行けなくなる、何とかならないかと。父は校則は校則、たとえ有力者の子女でも特別ではないと突っぱねた。

翌年、三国の汐見というところにあった住居の周りに、目の鋭い刑事と警官がうろつくようになった。後年、父はそのときのことを話してくれたのだ。
昭和１５年、アメリカとの国際関係が緊張を始めていた頃、学校に話を聞いてくれと大本教の教祖が訪ねてきたとか、父は外ではと校長室に入れて話を聞いたとか、ところが大本教は戦争反対を主張していた、時の政府、特に過激な軍部の注意団体だったのだ。その教祖を校長室に上げて話を聞いたのだから、尾行が本部に報告したのは言うまでもない。父としては正式に訪ねてきた訪問者に門前払いを食らわす非礼は出来ないと校長室で話を聞いた、当然の行為だったのだが、社会は父の常識の範囲を超えて暴走を始めていたんだ。翌日から尾行と、汐見の家の監視がついた。翌年の学期末、父は教職を辞した。５４歳、定年にはまだ時間があった退職の裏にはそんな事情があったのだ。有力者の反感をかっていた父には抵抗するすべはなかったとか。
退職が決まった翌日の新聞には三国高等女学校長、見浦弥七氏勇退と大きな記事、あの勇退の大きな見出しは記憶にある。

退職が決まってからの父は原稿書きに没頭したんだ。生涯の勉強課題だった数学の本の、題名は”非ユークリッド幾何学問題集”確かこんな題名だったと記憶している。もう物資が不足し始めていて用紙が手に入らない。ガリ版刷りで外装だけは印刷所の好意で製本してもらった。配達された本の山が玄関に積まれた光景は瞼に残っている。それを友人や学校関係に配って数学者見浦弥七が表舞台から姿を消したんだ。引越しの手伝いにこられた先生に、「父ちゃんが本を出したんだ」と自慢したら「私も貰った」と返事をされて誇らしかった。その年か母が難しい本を出して「これは数学の学会の本、ここに父ちゃんの論文が載っている」と話してくれた、「これで２度目なのよ」と。
この時のことは長く記憶にあって後に聞いたら、一度だけ話をしてくれた。「俺は専門の非ユークリッド幾何学でアインシュタインの相対性原理の証明をしようとしたが、どうしても出来なくて、それが残念だった。当時の日本には彼の理論を理解できる学者が４人いたんだが、俺はそのうちに入れなかった」と。

父が小板を離れたのは１７歳の頃、それから兵役が終わって一時期小板で生活した時があったが、間もなく結婚、そして広島の第一中学校に奉職し、牛田に居を構えた、出来の良すぎる一人息子のわがままを弥三郎爺様は止めるすべがなかったとか、時おり知人を頼んで様子を探らせたり、生活費を送ったり、陰では随分気を使ったと聞いている。
ともあれそんな按配で親父さんの農業は見よう見まねで経験がない。日本のように地勢や気候が千差万別のところでは耳学問や見よう見まねでは、成果は上がらない。弥三郎爺様、見るに見かねて口に出して意見をしたとか、折悪しく親父さんの退官を聞きつけた神戸の某私学から数学教官として迎えたいと校長さんが、広島からバスで５時間の小板まで訪ねてきた直後、「わしのやり方に文句があるのなら、また学校にもどる」と宣言されて、弥三郎爺様何も言わなくなった。翌年、母（淑）が亡くなって、半年後、弥三郎爺様が死んだ。そして素人百姓の父と小６を頭に５人の子供の大畠の悪戦苦闘が始まったんだ。

大畠に”上殿のオバサン”なる古くから手伝いに来るお婆さんがいた。田植えの季節になると何人かの婦人を連れて現れる、早乙女さんである。そして見浦の田植えが済むと蓑造りの材料になるコウラなる草の採集に来る。大畠には彼女のためのコウラ池（コウラをつけて腐らせるため池）があった。腐って繊維だけになったコウラを綺麗に洗って干して自宅に持ち帰って、冬の間にそのコウラで蓑を編む。北陸の藁で作った蓑と違って、上殿のコウラ蓑は軽くて耐久力と保温に優れて高級品、そんな関係で彼女には父も頭が上がらない、長い間のそんな関係で見浦家の内情は何から何までご存知、私たちが生まれるときも福井まで駆けつけて家の中の切り回しをしてくれた。母が亡くなったときも最後の看病の采配を振るってくれて、まさに身内の大叔母さん、それが父のにわか百姓を見てこれでは見浦家は滅びると感じたらしい。とはいっても子供は小学６年生が頭、他の子供はまだ幼い、そんなことは言っても背に腹は変えられぬと私の特訓が始まったんだ。今でも忘れないのが田植え、泊り込みの五月女さんは夜明け前に苗取りに田圃にでる、したがって起床は５時、朝飯を食って支度をして田圃に出ると、東の空が僅かに白みかける、寒い朝は苗代に薄氷が張っていて、最初の一足は身がすくむ、そんな田植えの季節が始まるとオバサンが「哲弥さん、起きんさいよー」と呼びに来る、父が起きるのは３０分後、弟妹が起きるのはさらに遅い、幼い子供の食事を済ませて、親父さんがオドロを（小枝を集めた薪、木小屋という小屋に前年集めて乾かしてある）担いで来て畦道で盛大に焚き火をしてくれる、それが待ちどうしくてね、そこで冷え切った身体を温めて再び苗取り、この頃に地元の五月女さん達がやってくる、９時過ぎに朝飯、一日５回の食事、５度飯という制度、なぜ５度飯なのか訊ねたことがある、答えは貧乏な家庭では朝食を取らずにくる、手伝い先の３度の食事が全てなんだ、漬物と辛い味噌汁のおかずなんだが腹いっぱい食べられることが田植えの手伝いの要件なんだと、年配の五月女さんの間での田仕事は子供ながら社会勉強だった。

閑話休題、そんなわけで上殿のオバサンの教育は尋常でなかった、牛のロープ作りも、夜なべの粉挽きもオトコシ（住み込みの男衆）と同じ扱い、後年兄弟が「兄貴、よく知っているね」と感心してくれたが、それも彼女の教育のおかげなんだ。
当時、見浦家には雌牛、雄牛が一頭ずつ、たてがみが白と茶色の馬が２頭、の計４頭いたんだ。雄牛とは言え体が小さくても気が荒くてね、力はあるんだが言うことを聞かない。お爺さんが見浦で生まれたんだからと飼い殺し状態の牛だったが雄牛だから言うことをきかない。腹を立てると角を下げて向かってくる、住み込みの林蔵さんも雇い人の又一さんも怖がって、結局は小学生の私が使うことに、ムチで叩いたことのない私には仕事を止めようとゴネルことはあっても追っかけれることはなかった。ところが短気な親父さんは、歩かんのならこうするとムチで叩くもんだから、牛君言うことをきかない、仕事ははかどらない。結局、田圃で牛使いは私と言うことなった。動員で家を空けた１年、親父さんは、どうやって仕事をこなしたんだろうね。

とはいえ、私心のない親父さんには集落の揉め事が持ち込まれる。相続の争いから、浮気の始末まで、ただでさえ見浦の仕事が山積しているのに解決に走り回る。自分達が食料が足らないというのに、ジャガイモが少しばかり多く出来たからと疎開した家族に届けさせられたこともある。父が亡くなった後、そこの奥さんから「貴方のお父さんには大変お世話になって」と涙ぐんでお礼を言われた。でも人に迷惑をかけることだけは極端に嫌ったね。そんなわけで見浦家に伝統に従って衰亡の坂道を転げ落ちて、どん底から這い上がるという歴史の繰り返しが起きた。でも、どんな時でも、揺るぎのない信念で生き抜いた親父は私の誇りなんだ。

彼の人生の師が誰かは知らない。見浦家では勉強以外には特別はなかったと、借金の言い訳に新庄（今の北広島町）へ行かされた話は何度も聞いた「旦那さん今年はこれだけしか出来なんだけー、後は来年でこらえてつかーさい」の口上で。その悔しさが弱者への配慮になり、勉学へのバネになった。でも不器用な人だったな。

長々と父弥七の話を書いた。彼の全貌を伝えることは出来ないが一面だけでも理解してもらえたら望外の満足である。彼に較べれば私はとるに足らない人間だが全力をあげて生きたことだけは認めて欲しい。そして彼の遺伝子が私を経て貴方にも伝わっていることを忘れないで欲しい。

人生は長いようで短い。認められようと、認められまいと、全力で生きる。それが自然を神とし、父を師として生きた私からの伝言である。

2016.1.11 見浦哲弥

年年歳歳花相似たり(2017/2/6)

和弥のお嫁さんの亮子くんは見浦牧場の大黒柱である。その彼女が後５年で５０歳になると宣った。日々仕事に追われる毎日で自分の年を数えるのも忘れがちだが、歳月の扉は確実に時間を積み上げる。息子の和弥の所に半ば押しかけで来てくれた彼女、３人の健康な孫を見浦家に贈ってくれた、我が家の恩人である。

跡取りと思っていた長男がコンピューターの道を選んで九州で就職、会社の同僚と結婚、やりたい仕事が出来ないからと東京へ、そして４０代でそのソフト会社の最年少重役に、彼は彼なりに自分の人生を追いかけた。

そこで後を継いでくれたのが一番下の和弥、ところが時は農村崩壊の始まり、妹が飛んできた「あんた気が狂うたんじゃ無いの、あの子は町でも食べて行ける頭を持っとる、こんな所に残したら嫁さんもおらんで」と。それでも親父さんが「見浦家が潰れる」と訴えた一言は重かった。そして彼は見浦家を継ぎ、亮子君は広島市から追いかけてきてくれた。そして３人の男の子を産んでくれた。それぞれ特徴のある子供たちを。長男は中学２年、私が動員で小板を離れた年になって、大人びてきた。

時は全国的な農村崩壊のとき、国内の食料自給率は３０％あまり、１億人に及ぶ人口の食料の大部分を輸入に頼る危険は知識人でなくても感じているが、大変だの声は聞こえるが他人事のよう、戦後の食糧不足のときのような真剣味は感じられない。

農業の復興は人作りなくては不可能だと私は思う。農業の教育は高校から大学まで整備されてはいるが、知識の詰め込みだけで人作りには程遠い。長男の晴弥が九大の農学部に在学中に九大の実習牧場に行った折の報告が頭をよぎる。彼に九大は国立の有名大学、農学部なら研修農場がある筈、見浦牧場で未解決の問題のこれこれを調べてくれと依頼したんだ。ところが彼が報告して曰く、「実習に行ったら、場長が“ここは農業を教えるところではない、農業とはこんなものだということを伝えるところだ”と言った」とか、「親父さん、役に立つ話はなかったよ」と、そこで思い切ったんだ。習えるところが無いのなら自分で実証し教えるしかないと。学問のない１農民が挑戦するには、あまりにも巨大な壁だったが後へは引けない。お陰で家族を厳しい道に連れ込んでしまったのだが、やっとこさ、ここまでたどり着いて文章にしている。役には立たないかもしれないが、これは私の意地である。

幸い私の家族は、それぞれ気性は異なるものの、皆前向きの性格、有り難いことだ。彼等のこれからの人生を見ることが出来ないのが残念だが、生きてよかったと思える家族たちである。

年年歳歳花相似たり、歳歳年々人同じからず、長い年月この言葉を噛み締めながら生きてきた。大切な私の心構えの言葉である。

さあ今日も１日全力を尽くそう。同じ日は二度とは訪れない。明日は明日、今日は今日、前を向いて全力で生きようと、自分に言い聞かせている。

2017.2.6 見浦哲弥

牧場の親父の社会構造論(2017/3/11)

もう５０年余りも牛を飼っています。しかも放牧形式の集団飼育で、この方式の飼育形態は日本では数少ないのではと思っています。
近辺でも見浦牧場のような小さな牧場から中山、松永のような大牧場まで大小様々な牧場が存在しています。
私が生きたこの中国山地でも大小様々な形態の牧場が設立され消えて行きました。辛うじて生き残った牧場の一つ、見浦牧場が生きている日本社会の仕組みを、牛を飼う生活を通じて考えて見たいと思うのです。
最初の２頭から現在の１８０頭まで増えてゆく過程の中で、彼等が群れを作る仕組みや、集団のルール、ツキノワグマから身を守る護身術、等々、生きるための変化を作り上げて行きました。そんな彼等を見ていると人間も教えられるところが多々あるのです。今日はその話を聞いてください。

牛は集団で暮らす動物で厳然たる順列がありますが、その一生をよく見ると、生後１２ヶ月くらいの所に境があります。それまでは、はっきりした順列が無いのです。勿論、餌を食べる時は力の強い子牛から食べ始めるのですが、横合いから小さな子牛が割り込んできても頭で押し出すくらいで、追っかけていじめることはありません。ところが１２ヶ月を過ぎると押し出すだけでなく後を追いかけて順列を守れといじめるのです。
牛の世界は厳しい順列の世界、その能力と力で決まる順列を守ることで集団の中での生活が許される､そんな厳しい掟で集団が維持されている｡注意深く観察すると他にも数々の掟があり、それを守ることで集団で暮らすことが許される、牛はそんな掟を守る集団なのです。

ここ小板はツキノワグマの生息地､近隣の山林が人工林に変わって､自然の食料が減りました。一方、登山客やトレッキングなど観光客が増加し、弁当のなどの残り物の味を覚えて集落の近隣で生活する個体が増えました。彼等は生きるための知恵を持っています。知能も体力も野生動物の中でも図抜けて高い。他の文章で報告した様に見浦牧場でも被害が出ているのです。

もともとこの地帯のツキノワグマは性質が温和と言われています。
天候が良くて、山にドングリや柴栗が豊富で食べ物が充分あれば、牧場の周りで気配は感じても、牛の餌を狙って畜舎や倉庫を荒らすことはありません。
ところが自然は時々悪天候も贈り物とする。山が不作で食べ物がなくなると彼等の頭がフル回転をする。生きるためにね。人間の周囲に現れて、農作物を狙い、果樹園を荒らす。そして畜舎に侵入して牛の餌を横取りをする。それでも足りない時は倉庫を壊して餌をあさる。

十数年ごとに、極端な悪天候がやってくる。輸入や備蓄の取り崩しなど、人間は生きるための手段を持っているが、それを持たない熊君は最後の手段として牛を襲うのです。

襲撃されて死亡した牛は、これまでに７頭あまり、食われたのは２頭ですが、追い回されて暴走して死亡、恐怖のショック死など死因は様々ですが、この５０年間にかなりの被害がありました。

ところが牛も知能が高い動物、熊に対する恐怖は集団の中に知識として蓄積されて弱いながらも対抗する方法を編み出しているのです。

まず、１―２頭で行動することがなくなりました。近くで熊の気配を感じたら集団が大きくなり、一箇所に留まる時間が短くなります。たとえ美味しい草があっても絶えず移動します。そんな集団の行動を見ていると、熊がどの方向にいるのか、近くなのか、気配だけなのかが判るのです。
もっとも乳離れをしたばかりの子熊だけの時は集まってからかっていましたから、危険に際して彼等なりの判断を持っているようで、さすが高等動物と変な感動をしたものです。

朝夕、牛を見ながら生活していると、人間と同じように個体によって少しずつ性質が違います。優しい牛、気の荒い牛、仲間をいじめる牛、いたずら牛、など様々です。
ところが注意深く見ると、いじめる牛の集団は小さくて、いいリーダーで優しい牛の集団は大きくなるのです。

思い出すと見浦牧場の最初は１―２頭飼いの農家が生産した子牛を買って初めたのです。放牧しても夕方になると人間が集めて畜舎に連れて帰らなくてはなりませんでした。そして１０数頭に増えた頃も夕方の牛集めは仕事の一つ、しかも何頭かは別行動、広くもない牧場を探して歩くことが日課でした。
ところが何時の頃からか、この作業がなくなりました。別行動の牛が出ても数頭以上の集団を組みます。熊の被害が出始めた頃からですね。

彼等は自然の摂理に従って行動しているのです。１頭でいる時に襲われたら１００％殺される。ところが集団が大きいほど、殺される確率も確実に小さくなる。そして集団の大きさを、リーダーの優秀さと優しさが決めている。この法則に気付いた時は驚きましたね。動物の本能は人間の教科書より素晴らしいと。

戦後の日本経済の高度成長で道路が良くなりました。生活も豊かになりました。市場経済の恩恵を受けて一般の人達も、それなりの恩恵を受けました。そして、すべての事柄をお金に換算して利害を判断する悪しき考えが常識化しました。田舎から思いやりや、助け合いの精神が消えて、「なんぼ呉れるんなら助ける、儲けにならないなら、わしゃ知らん」などとぬかす奴まで現れて、殺伐な雰囲気が流れることもある、そんな時代になりました。

私が「ヒューマンリング」に書いた当たり前の人助けが美談となりました。文章「同行崩壊す」を読んだ人が感心して、これでないと田舎は成り立たないと言ってくれました。当然のことが忘れ去ろうとしていると。

イギリスの産業革命をもたらした原始資本主義は極端な格差を生み出して、底辺の人達は基本的人権まで否定されました。この問題を理論的に論破したマルクスの資本論は議会制社会主義と一党独裁の共産主義の政治体制を生み出しました。しかし、７０年余りの共産主義の政治体制は崩壊し、人間はひとつの枠、ひとつの考えに押し込むことは不可能だと答えが出ました。
そして時代はアメリカの修正資本主義、全世界がこのシステムに飲み込まれました。しかし、メイフラワー号でアメリカに移住したイギリスの清教徒のグループは資本主義の欠点を聖書の教えでカバーしようとしました。それが世界に修正資本主義を広める要因となりました。
が、日本人はキリスト教と資本主義の微妙なバランスで成り立っているアメリカの方式を宗教抜きで導入しました。いや日本の宗教家がことの本質を理解しないまま、政治に結びついたり、在来の殻にこもったりして新しい役割を担うことを放棄してしまった、私にはそう感じるので

す。

敗戦から７０年、都市には高層ビルが林立し、新幹線の高速運行は当たり前に、高速道路と自家用車は当然の必需品になりました。そんな豊かな日本なのに、何かが欠け、何かが間違っている、それが私の文章が思いもかけない人達に読まれ、感銘？を与えている原因では、そう思っているのです。

私は昭和２９年に日本社会党に入党しました。「格差のない平等な社会」のモットーは、動員で強者が弱者を搾取する現実を少年の目で確認した私には魅力でした。が、この組織の中にも様々な格差があり、差別がありました。
広島であった若手党員の研修会で当時の江田書記長が会の終了後、取り巻きだけを連れて街に繰り出して行った時、理想と現実のギャップを感じたものです。

ある時、県本部に前田先生（山県郡の活動家の大先輩）のお供で立ち寄った時、呉の市会議員の立候補者と立ち話をする機会がありました。「どうして社会党ですか」と、お聞きすると「選挙で票が集まるから」と当然のように答えられた。思想信条が同じだからという言葉を期待していた私にはショックでした。左の人間でも目前の利益が優先するのだと。

しかし、前田先生は私心のない人でした。正しいと信じたら利害は思考の外でした。そのせいで加計町の３大名家の一つと評された前田家が崩壊したのですから、その生き方は私に影響を与えました。弱者に助けを求められたら全力を尽くせと、前田先生、私の親父さんなど、私は何人かの素晴らしい人生の師を持つたのですが、貧乏からは逃れることは出来ませんでした。でも、理屈だけの人間にならなくて済みました。

理論は大切です。しかし所詮は人間の考えたこと、絶対はありません。それを自然の摂理で補正しながら参考にして生きる、その一つが無学な農夫の社会構造論なのです。

たった、それだけのことなのに「見浦さんの方へ、足を向けて寝られん」と感謝された時は心臓が引っくり返るほど驚きました。平凡な人間にはショックが大きすぎた。
当然のことを、ほんの僅か、お手伝いしただけで、その言葉をもらえたのには、私の社会構造論が役立っているのかもしれません。

2017.3.11 見浦哲弥

ウォーキング(2017/3/11)

毎年 10 月になると深入山ウォーキングなるイベントが催される。目下、その準備の人達で山道が賑やかである。深入山のグリーンシャワーなる広場が起点で、旧国道 191 号線を歩いて、小板で新国道に合流して深入山を１周する、延長７キロ位か。途中に私が松原校に通学するときに泣かされた、標高 890 メートルの水越峠がある。

そして今日は開催日、９時頃から道路に人影が。日頃人影の少ない旧国道にウォーキングとはいえ賑やかになるのは心楽しいものである。それに若者の途絶えた道にカラフルなウェアが続くのは、往来の激しかった昔をしばし偲ばせる。

それにしても時代の変化の大きさに驚かされる。道路が整備され、公共交通が不必要なほどマイカーが普及して、歩くことがスポーツになり始めている。戦時中の動員で北広島町新庄にあった宿舎まで徒歩４０キロあまり、休憩時間を含めて１０時間かかった。勿論、歩き難い砂利道は子供にとって遠い異次元の世界と感じたものだ。

我が家の孫くん３人のうち下の二人が１０キロコースにチャレンジした。ところが４キロでダウン、家に走り込んでゲーム三昧、日本の将来を思うと背筋が寒くなる。少子化で子供を甘やかしすぎると思うのは老人のひがみか。

考えてみれば旧国道が賑わうのは”しわいマラソン”と”深入山ウォーキング”だけ。戦中、戦後の、悪路に国運と生活を委ねた賑わいは、繰り返したくはないが、懐かしい。

我が家から旧道の峠まで約２キロ、（峠から谷に沿って下る急坂（オシロイ谷）があって徒歩の時は、このコースを歩いた）松原の高等科に通った２年間、お世話になった道である。自然が一杯でね、ムササビを見たのも、ドンビキと呼ぶ巨大なヒキガエルを見たのもこの道だ。もっとも人権もへったくれもない戦時中のこと、勤労奉仕と称して遅くまで作業をさせられて、明かりもなくて夜空を見上げて頭上の隙間に導かれて帰った道でもある。自動車が普及を初めて、オシロイ谷の近道の人通りが途絶えてから４０年近く、細い山道はヤブの中に埋もれて知る人以外は道の存在も忘れ去られた。

深入山ウォーキングは旧国道の車道を通って深入山を一周する。秋日和ならば絶好のハイキングコースだが、この道にまつわる物語を語る人はいないし、誰も知らない、ただ歩くだけ。１００年あまりのこの道の歴史は、日本の近代史の一部と重なっているというのに。

時代が進んで便利になったのは有りがたいかぎりだが、歩くことが少なくなって要介護の老人が増えた感じがする。新聞の老々介護に疲れての心中やら殺人と言った記事を見ることが多くなった。他人事ではない、懸命に生き日本の復興に力を注いできた人生、その功労の報酬に人に迷惑をかけないで、ひっそりと旅立つのが理想である。私は小５から働き続けてきたのだから、せめてそのぐらいの我儘は聞いてほしいものだと思っている。

今年も無事、深入山ウォーキングは終了した。ただ歩くだけでなく、私の提言の一部でも聞いて欲しいと思っている。

2016.10.2　見浦哲弥

小板の日米戦争(2015/1/17)

日本が歴史上で始めて外国に敗れた日米戦争から６０年あまり経ち、戦争の体験者も次々と世を去って行きました。私は軍隊には行かなかったものの、国民総動員令で１４歳で食糧増産や建物疎開に連れて行かれて戦争を経験しました。その仲間達も世を去り、生き残りは少なくなりました。

この小板でも、あの戦争中に戦死したもの、戦病死した人、シベリヤ抑留で辛うじて生き残った者、敗戦の年に緊急動員されて外国に行かないで敗戦となり命拾いをした幸運な人など様々でした。
折々に聞かせてもらった戦争の話も、私の人生と共に消えて行くのかと思うと少々残念で文章にしておこうかと書きました。

集落の上(かみ)から、まずＹさん、彼は戦車兵、満州（北中国）のロシアとの国境部隊に派遣されていた。小便も凍る寒さの話しや、１００キロも走ると戦車のキャタピラーを交換しなければならない話など、私には興味があった。
鋼板で出来た日本の戦車は、厚い鋳鉄製の防弾板で囲まれたアメリカやロシヤの戦車には、全く歯が立たなかったことは、後日の読書で知った。
彼は幸運にも終戦直前に内地に配属替えとなりシベリヤ行きは免れた。

隣がＫさん、海軍に志願して、水兵から下士官、そして敗戦時は士官だった。たたき上げの潜水艦乗り、電気関係の機関員で電検３種の資格保持者。
私の父の崇拝者で休暇に福井の家に泊まりに来ていたのを覚えている。水兵帽の水兵さんが、いつか短剣を下げて白の夏服の下士官に変わったときは、子供心に格好がええと感心したのを覚えている。
日米開戦の時は大型のイ号潜水艦の乗組員で、シンガポール軍港沖でイギリス東洋艦隊の見張りに従事、新鋭戦艦プリンスオブウェールズと、戦艦レパルスの出港を補足、追尾して海軍航空隊に連絡、マレー沖で雷撃機の集中攻撃で撃沈、チャーチル首相を落胆させた、日本海軍の華やかな戦いの話しを聞かせて貰った記憶がある。
でも、戦争の中期からは戦っては敗れるの連続、レーダーの開発がうまくゆかず、出港直前まで東芝の技術者が調整に来てな、それでもうまく行かなくてな、仲間の潜水艦乗りは殆ど死んだと、そして「俺は戦争は嫌いだ」とはっきり宣言していた。

そのお隣がＫＦさん、彼は敗戦の年に徴兵検査、すぐさま徴兵されて九州に配属、１ヶ月か２ヶ月で終戦、戦争の厳しさを経験しなかった。おかげで軍国主義否定の私とは基本的に意見が対立、陸軍は悪くないとのたまう、小板で数少ない幸運な人間だった。

次はＳさん、彼は１９年に動員された、腕のいい石工さんで真面目な人間だった。小板の上田屋の娘さんと結婚、戸河内の寺領から小板に移り住んだ。見浦の田圃５０アールを小作していた、小学校３年を頭に５人の幼子を残して兵隊に。
奥さんが懸命に働いたが仕事が遅れて、雪が降っても稲こぎが出来ない。稲を干す稲ハゼが雪の中に残った。見るに見かねた父の命令で稲の脱穀を手伝った覚えがある。
動員先は陸軍船舶部、輸送船に乗って船を守る？部隊、（当時は輸送船でも小型の大砲か機関砲を積んでいた）敵の軍艦や潜水艦、航空機に発見されれば即沈没だが気休め的装備の操作係。

秋に一時休暇で親父さん挨拶に来られた折り、「命拾いをしました、サイパン島に軍需物資を運びましてね、陸揚げが済んで島を離れた翌日、島はアメリカの艦隊に包囲されましてね、もう何時間か遅れたら命を落とすところでした」と話されたのを覚えている。その後サイパン島の軍隊は全滅、民間人も多数死亡したのは周知のとおりである。
その後は輸送船の消耗が激しくて乗り組む船がなくなり、無事に復員された。

そして、Ｆ君、芸北町にあった大佐川電気利用組合の電工さん。
彼のことは、陸軍で満州のロシアとの国境の警備隊だったことしか知らない。が、彼は小板でただ一人のシベリヤ抑留の体験者、ご存じだろうが満州で逃げ遅れて捕虜になった軍人がシベリヤに連行されて強制労働をさせられた話、彼は不運にもその一員となった。何年働かされたのかは私の記憶にはないが、一、二度地獄のようなシベリヤ体験を聞いた覚えがある。
極寒の地で劣悪な居住環境、不足の食料、独ソ戦で荒廃したロシアでは一般の国民も苦しい生活だったと言うから当然かもしれないが、膨大な死者（５万人とも６万人ともいわれる）を出した。その話しを彼は「仰山死んだでー、ところがの大方が町の人での、田舎の人間は中々死なんのんよ」と、日本国内の貧しい農村で育った人間は、町の人より耐久力があったと言う話しだ。しかし、粗食でも血糖値を高く維持して命を支える貧農の体は、豊かになった戦後の食事で糖尿病の多発を引き起こし、寿命を縮める一因になったのだから皮肉である。
彼の話で忘れられないのは、日本での職業を何度も調べられたと言うこと。大工、左官、電工、その他、エトセトラ・・・当時のロシアで不足していた技能の持ち主だったら、即、収容所から出されてロシア女と結婚させられ職場につかされる、腹いっぱい飯が食えてな、地獄から天国への道があったんだ、でもな、それは生涯日本に帰れない道、歯を食いしばって頑張ったんだと。
当時、ロシアは独ソ戦争で２０００万人ともいわれる若者を失い、荒廃した国土を再建する為、猫の手も借りたい事情だったと、勉強になりました。

晴さんの長兄のＫＲさん、彼は吉田町の青年学校の先生だった。私に動員がかかる前年、彼の家族が次々と広島の陸軍病院に見舞いに行くのを見た記憶がある。間もなく病死と聞いた、陸軍に徴兵された彼が過酷な新兵教育に耐えられなかったと。何しろ５歳も６歳も年下の私達の動員の現場でも殴る蹴るの暴行は日常茶飯事だったからね。人間の値打ちは一銭五厘（徴兵通知の葉書の値段）と言われた時代 、死因は肋膜炎だと聞いた。優しい大人しい青年だった記憶がある。

隣はＴさん、彼は海軍の志願兵、要領のいい奴で悪運強く生き残った。燃料の尽きた軍艦が樹木で偽装されて、瀬戸内海の島陰に砲台代わりに係留されていたなど、敗戦間際の海軍の話をよく聞かされた。夏で偽装の木が枯れ始めると「木を取り替えないと丸見えですよ」とアメリカ軍機にビラを撒かれて馬鹿にされたと。

ＫＨさん、彼はＫＦさんと同年兵、敗戦の年に緊急徴兵された。配属されたところが陸軍の通信隊、伝書鳩の世話をするのが仕事、善人の塊だった彼は軍隊では苦労は少なかったらしい。
ところが親父さんも徴兵されて、予備役の衛生兵だった、御年４７歳、平均寿命が５０歳に満たない時代、正直よぼよぼの兵隊さんだ、それまで召集しなければいけないほど追いつめられたんだ。そんな戦争を天皇まで脅かして始めた将軍は現在靖国神社に祭られている、そんな矛盾には国民の声が小さい。
でも考えて欲しい。一軒の農家から働き手の男を２人も軍隊に招集して農村が成り立つはずな

い。それでも国民の食料を作れという、軍国主義とはそんな思想なのだ。
ちなみに４７歳の老人兵として徴集されたのは、他には松本熊市さん、児高徳馬さんの２人がいた。

Ｎ君、彼は腕のいい溶接工、広島郊外の軍需工場で働いていた。幸い原爆の直接被害はうけなかったものの、直後の市内で死体処理に動員されて連日作業をした。実体験だけに身の毛もよだつ話を淡々と聞かせてくれた。私も８月９日に出張で立ち寄った可部駅で駅前広場にぎっしり並べられた被災者の死体を見た。まだ息のある人は日陰や貨車の中、目と口だけを残して包帯だらけの被災者が水、水と訴える微かな声、今も耳に残る、真夏のことで生きている人にも蛆が湧いて這い回る姿は正に地獄だった。
西岡君は街に倒れている死体をトラックに積んで街角に積み上げて重油をかけて焼く仕事をしたと、２人で手足を持って放り上げる、皮膚がズッルとむけてねと、私の体験の何百倍もの辛い話しは戦争を始めた指導者を憎む私の原動力だった。

Ｍさん、陸軍の下士官、陽気で明るい人で私の製材の師匠さん。
彼は南方に派遣された。そのニューギニア島での戦闘の話しは忘れられない。ニューギニア島は有名なラバウルの近くと言えば判って貰えるかな。オーストラリアの隣の島でね。
島とはいえ本当は日本の本州にまけない大きな島、オーストラリアの反対側に上陸して島を横断してポートモレスビーという港を占領して対岸のオーストラリアを攻撃するという、壮大な計画だったとか。密林の中に道を造り中央の大きな山脈を越えて対岸に達する、口で言うのはたやすいが、筆舌で表わせない現場の苦労は東京の参謀本部いる奴らに判らない、ただ命令するだけ、こんな事が山盛りの戦争だったのですよ。

ようやく山脈を乗り越えてオーストリヤ軍に接触して驚いた。上官の話と違って彼等の勇敢なこと。攻め込んだら、すぐに敗走すると聞かされていたのが、案に相違で猛然と反撃されて手も足も出ない。おまけに我が軍は明治３８年制定の３８（サンパチ）銃なる小銃、弾が５発しか出ない、それも一々操作をしてね。ところが豪州軍は自動小銃、連続して８０発も弾が出て戦争にならない。そこでオーストラリア軍に出会ったらひたすら密林の奥に逃げ込だと。彼らも地下足袋なる履物で足音も立てずに出現する日本兵は怖いから林の中までは追ってこなかったからなと。ところが大問題が起きたという。日本の軍隊は米の飯が食料、飯盒なる鍋で炊いて食事をする。ところがジャングルの中で焚き火をして煙が上がろうものなら戦闘機から爆撃機までが殺到して爆弾をおとし飯が炊けない。飯が食わないと戦争は出来ぬと、日本兵の士気は地に落ちたんだって。そこへ知恵者が現れて炭を使えば煙は出ないぞと発言、おまけに日中なら敵機の目にとまらない、当時は赤外線センサーなるものは前線になかったからな、その案は直ちに採用されて「誰か、炭焼きが出来るものはいないか」と募集されたとか。但し炭焼きといっても炭窯を築いて木炭にする全工程の技術屋でなくてはいけない。彼は動員前は炭焼きさん、早速、応募したとか。即、木炭の増産を命令されて監督に、敵機の来ない後方の密林で木炭生産が始まったんだとか、命令される兵隊から炭焼きの監督さんに昇進、近場のガダルカナル島では日本軍全滅の悲劇もあったのに、敗戦まで楽をさせてもらいましたと。

次は陸軍上等兵のＫさん、衛生兵である。陸軍で習ったことが全て正しいという軍国主義者、社会主義にかぶれた見浦を認めるなどもってのほか、敗戦後も２０年位は私の話を聞こうとはしなかった。しかし、全てが逆転した戦後の社会は彼を受け入れなかった。様々な試行錯誤の末、全てを失った彼は死に際に、「見浦が正しかった」と呟いたと息子さんから聞いたときは、

なにも言えなかった。

ＩＨさん、彼も陸軍上等兵。確か中国戦線だったと思うが、記憶が定かでない。機関銃の砲手と聞いていたが、戦争の話を聞く機会がなかった。ただ腕に小銃の貫通銃創があった。
ＩＭさん、Ｋの兄さん、大下に養子に入った。彼は中国戦線で２度目の召集で戦死した。私が中学の１年の折、奥さんが生まれたばかりの娘さんを背負って広島まで見送りに行くのに出会った。２人とも泣きながらオシロイ谷を下って行くのを見て戦争の悲劇の一端を感じた。兵隊になって戦死することは名誉だと教えられて、信じていた少年が、先生の言葉は本当かなと疑問を持った最初である。彼は中国戦線から白木の箱で帰った。

Ｎさん、私を弟のように可愛がってくれた好青年。彼は海軍に志願した。そして戦争の末期、戦死したと箱に入って帰ってきた。中には名前を書いた白紙が１枚、それで好青年が海に沈んだ。もう一度言う、あの戦争を始めた将軍は靖国神社にいる。

軍隊に行った人達は、他にも２-３人いる。現存している人も居るが、戦争の話は語られることがなかった。辛い、悲しい、矛盾が山積していた世界だったのは、私も動員で経験したことから推測できる。思い出したくないことが山積みだったのも。

最後に声を大きくして言う、私は戦争が嫌いだ、始めた奴はもっと嫌いだ。

2015.1.17 見浦哲弥

追記
私の同級生も２人死んでいる。一人は斎藤正司君、彼は高等科卒業後（いまの中学３年の年齢）海軍航空隊に志願して入隊した。敗戦前の日本には訓練する飛行機も機材もまったくなくて、毎日が手作業の飛行場作りだったとか。短い時間だったが過労で体を壊して帰宅後間もなく死んだと聞いた。アメリカの飛行場作りはブルドーザだったのにね。

もう一人は一級上の藤本さん、彼女は従軍看護婦を志願して帰ることはなかった。

豊かな時代になって爺ちゃんの時代に起き、体験したことを誰も話さなくなった。でも２度と起こさないためにも聞いておくべきだと思うのだが。

あーしわかった(2017/7/15)

８６歳も半ばを過ぎた。まだトラクターに乗り、２トンダンプの運転は出来るが、１日が終わると「あーしわかった（つらかった）」と溜息が出る。それなら働かなければいいではないかと、反論がありそうだが、古い機械でも動かなくなったら、即、スクラップ、人間である私はスクラップになって、ただひたすらに終焉を待つのは性分に合わない、動ける間は少しでも働いて不用品扱いにならないようにと自分に言い聞かせるのだ。

とは言え、寄る年波は確実に体力を落としてくる。おまけに記憶力も低下してトラクターのレバーの操作で一瞬迷うことが出始めた。友人だったＦ君は７０代で田圃の中で立ち往生、どう操作すれば動くかを忘れたのだ。どう考えても思い出せず、お隣にトラクターが故障したと訴えた。調べてみたら操作を失念しただけで笑い話になったが、本人はそれを機に痴呆が進行し始めたのだから笑い事ではない。

私は当時の彼より１０歳以上高齢、当然ボケ老人と言われても不思議はないが、２度とない人生であるから、１日も長く現役でいたいと努力している。

と独り言をつぶやきながら毎日を働いている。吾輩は人間だから失われてゆく能力を如何に補って補足して行くか、そのくらいの知恵はまだ健在だと自分に言い聞かせながら毎日を送っているのだ。従って毎日の仕事を１００％までとは言わないが７０％位はこなしていると自分に言い聞かせている。人はお世辞に「元気なのー」と言ってくれるが、これはあてにはならない。

が、自然は厳しくて無情である、そして確実に知力と体力を奪ってゆく。だから夕方には「しわかったのー」と自然の溜息が出る。そこで自分が普通の人間であることを再確認するんだ。

しかしながら意地っ張りで強情で自他共に認められてきた私である。足が痛くとも、疲れていても、対策を立てて頑張る、考えて見れば随分意地っ張りの生き様だった。その結果でもあるまいが見浦牛の評判は中々のもの、テレビで幻の見浦牛と評された、これは家族全員が長年頑張ってきたお陰、従って「疲れた」と言いながら最後まで頑張ることにしているのだ。

2017.7.15 見浦哲弥

お祭りと饅頭焼き(2017/5/24)

2012.10.28　今日はお宮の幟(のぼり)建て、例年村祭り（１１月２日）の前の日曜日が、お宮の掃除と幟建ての日である。去年は神楽団の長老が死亡したとて、神楽の奉納は中止だったが、今年は神楽があるとて、少しは明るい雰囲気だった。もっとも舞子は５人、いずれも広島在住、小板居住は６０歳あまりの人が１人という現状では、今年が最後か？例年見浦家が勤めていた饅頭焼きは、去年の神楽中止を機に、もう止めようと話し合っていたところに、神楽団からも正式に中止要請があった。８０歳になった晴さんにも、子育て最中の亮子くんにも無理、一つの時代が終わった。

饅頭焼きが始まって、もう２０年になるか。祭りにやってくる府中の孫たちを見て、晴さんが言い始めた。「昔は神楽の晩には夜店が出てたな」と。私も記憶がある、神殿の前の大杉の根元にテントをかけて、たった１軒、露天のおじさんがやってくる。三国のお祭りの露天には比べるべきはないが、子供達には胸躍る時間だった。それが日中戦争が激しくなった頃なくなった。

敗戦で戦場から復員してきた若者たちが結婚して、子供たちが生まれて小板に賑やかな時代がやってきた。お祭りには夜店がやってきて、地元の堀田商店も饅頭を焼き始めて、小さな鎮守の森も神楽の夜は賑やかだった。

ところが日本の繁栄に逆比例して若者が減り、住所を都会に移す家が出始めて子供たちが少なくなった。外来の夜店はとっくの昔に来なくなって、堀田商店の饅頭焼きも赤字続き、集落の子供は１０人ばかり、太鼓の音は昔と同じでも、寂しい村祭りが当たり前になった。

ところが我が家の晴さんは少々発想が違う、夜店がなくて寂しいのなら自分たちでやればいいではないか、子供たちに自分たちが味わった、神楽の晩の夜店の楽しさをプレゼントすればいい、プレゼントは商売でないのだから、利益が出なくても運営する方法があるのでは。

実は彼女が「考えたんだがのー」と話し始めたら大変で、先ず反論が出来ない、華やかではないがポイントを突いていて、なるほどと賛成させられるからだ。
何しろ、集落のことから、農協の理事、農業委員、PTA、まで、あらゆるところに口を出す、正論と感じると無視はできず、解決策を模索して奔走するのは私、長い時間の彼女との生活はこれで何度も泣かされた、饅頭焼きもその一つだった。

そこで条件を付けた、子供たちが負担にならない値段にする、専用の道具は買わないで家庭用の器具で間に合わす、利益はでなくても材料代だけは確保する、その条件を守るのなら最初の資金を見浦家で負担する事に賛成する、もちろん人件費は無償奉仕ということで。

もともと金儲けが目的の発想ではない、年に一度のお祭を楽しみの子供たちに神楽だけでなく、もう一つの思い出を作ってやろうが発想の原点、幼かった自分の思い出と重ねての提案だから、家内も私の提案を受け入れた。

世の中には発想は良くても現実が伴わないことが多い。晴さんの饅頭焼きもプラン倒れにならないかとを心配したのだが、もともと田尻一番の根性屋さん、言い出して走り出したら逃げ出すことが出来ない性質、問題が起きるたびに懸命に対策を考える、圏外の私としては、その熱

意を牧場に振り向けてと口まで出かかったが、反動が恐ろしい、ひたすら見守るだけ。が、子供たちが、孫が動き出した、小板の祭りに帰るのは饅頭を焼くためと目的まで変わって男どもを除く見浦婦人同盟のお祭り行事として定着した。おまけに味もいいと評判、儲けは出ないまでもお祭りの神楽と言えば見浦の饅頭焼き、子供たちも小遣いを固く握って神楽の晩をまつ。が、それなりの時間が経過して彼女も年老いて気力が無くなった。我が家の孫達が小板神楽を見ながら見浦饅頭を食べる、そんな時まで頑張るが、続かなくなった。そして遂に中止、翌年か翌々年には神楽を奉納しようにも舞子の動員が困難になった。そして１００年余り続いた小板神楽団も解散、お祭りの夜の太鼓も途絶えた。

時は農村の過疎を通り越して無住の集落が出現する時代、一時とはいえ彼女の努力は小板の河内神社の神楽の最後に花を贈った事になった。

あれから、もう１０年あまりも過ぎたか、秋の村祭りの日は数少ない住民が集まって境内や内陣の掃除をするだけ、落ち葉を焼きながら昔は賑やかだったがと思い出話に花が咲く、それが何時まで続くかは誰も知らない。
そして晴さんの饅頭焼きも思い出の彼方に消えてゆく。

2017.5.24 見浦哲弥

最高の季節(2016/9/1)

お盆が過ぎると小板最高の季節がやってくる。気温が 20 度をきり、爽やかな空気が、深入山の山頂から贈り物として下ってくる。まだ日中は夏を偲ばせる暑さなので、早朝の一時は小板の数少ない美点を再認識させるのだ。

お向かいのＳ君は大阪で大型トラックの運転手として働いた経験を持つ。その彼が生まれ故郷の小板に帰って３０年近く、子供さん達は大阪で暮らす。その彼が季節の変わり目ごとに小板が最高ともらす、「空気がようての、水が美味しゅうての、景色がいい、おまけに地震がのうての、水害がない、日本で一番ええとこでの」とのたまう。私の記憶では３８（さんぱち）の豪雪とルース台風という水害があったが、いずれも死者は出なかった。一度台風の通り道に当たって立木がなぎ倒されたことがあったが今考えると竜巻の通り道の様な被害だった。それ以外記憶に残るような災害が無いのだから、ま、住みやすいところなのだろう。

何回も繰り返すが私がこの地に帰ってきたのは昭和１６年（１９４０年)、従って７６年暮らさせて貰ったということになる。その間、見浦家にも、小板にも、戸河内町にも、いや日本国にも大変動があった。私の文章など、その表面をなでたに過ぎない。その軌跡をたどると辛かった事のほうが多くて思い出すのも苦しいが、平和な晩年を迎えているのだから幸せ、幸運と言えるのかも。

私は、人生は５０/５０の割合で幸運と不幸が与えられていると信じている。不幸だけの人も幸運だけの人も存在しないのだと。しかし、小板の自然、風景はＳ君の感慨と同じ最高だと思っている。そして私の人生も幸運の方が多かったと感じているから、トータルではいい人生だったと宣言が出来る。誰にとっても故郷は素晴らしい、そして素晴らしい思い出になるように努力をしなければならない、二度とない時間を過ごさせてもらったのだから。

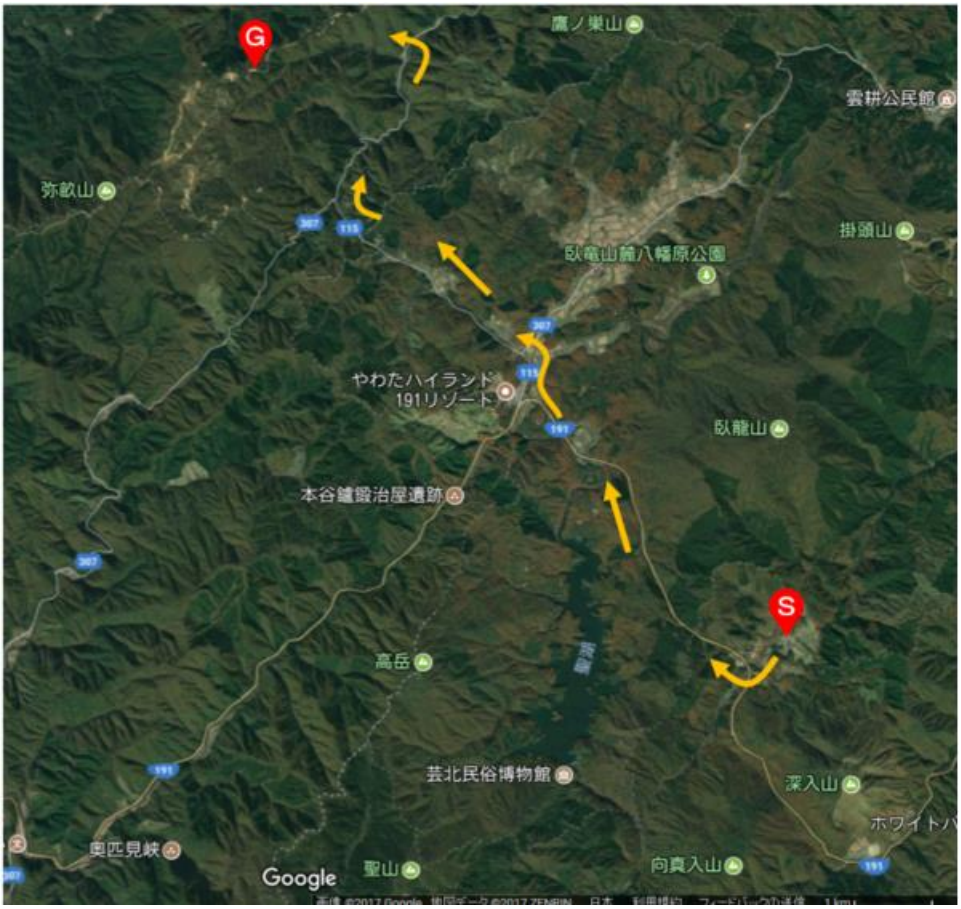
今日も深入山は綺麗だ、臥龍山も見事だ、そして私の時間もまだ続いている。

2016.9.1　見浦哲弥

弥畝山風力発電所(2016/9/20)

2015.11.2 裕子さんが律子のお店の応援にきている。その食後の話、お盆に深入山に登ったら風力発電の風車が見えた、あれはどこかとグーグルで検索して話題になった。そこで百聞は一見と見学に行った。

裕子さんと孫の淳弥君と、北広島町八幡まで国道１９１号線を北上、１９１スキー場の三叉路で右折、県道波佐匹見線を約１キロ弱、再び三叉路を左折、県道１１５号線に入る。２車線の道路は間もなく１車線に、平坦な道路を１キロも走ると集落が現れる、木束原集落である。整備された水田と数件の農家、彼方の低い山すそに２軒の別荘が時代の変化を告げるだけで、数十年前の八幡村の風景が現存する。私が３０歳代、飼料の稲藁を買い集めるために通った集落、懐かしさもひとしおの集落である。集落の中の平坦な道をたどること２キロ、殆ど登ることなく峠である。木束峠海抜７９８メートル、ここから比較的なだらかな坂道を約１キロ下ると島根県の波佐匹見線との三叉路に出る、右が周布川の源流である。その川に沿って深い谷をくだること２キロ、小さな集落の中の三叉路を左に曲り坂道を約３キロ登ると峠、左に行くと弥畝山であるが現在は私有地。



峠の手前に資材置き場があった。取り付け前の巨大な翼が３枚、運搬用の長大なトレーラーが翼を１枚積んで停車していた。長さが４０メートル以上もあろうかという翼は地上で真近で見ると、その巨大さを実感する。峠の交差点から左右に伸びる作業道があって、間隔を置いて風車のタワーがそびえる。低い潅木が繁って道路からは見えるのは数個のタワーだけだが列状に建設されていて壮観である。見学時は２基が建設中で１基はタワーと発電機が取り付けられていて、もう１基はプロペラの取り付け中、１００メートルに及ぶクレーンがそびえて羽根が１枚だけ装着されていた。作業を見学できたら感動するだろうとなと思ったんだ。

峠から日本海側は島根県弥栄町、比較的平らで小山が散在する。それが弥畝山で急にそびえ立って、峯が連なっている。地球の自転に伴う気象上の風を利用するには最高の地点かもしれない。この地形に目をつけた技術者は只者ではないと思ったが、冬季のすさまじい気象をしる地元民としては果たして強度的に耐えるものか少しばかり不安を覚える、他人事ではあるが。

もう一つ不安に感じたことがある。エネルギーを失った風がもたらす気象の変化である。実は小板集落の隣に出来たダム聖湖は冬季の積雪の変化をもたらした。深い谷間の集落にあった樽床集落が水没し、湖面の上昇で風の通路が４５メートルあまり上昇した。その上を吹き抜ける北風は勢いを増して我が小板は多雪地帯の八幡地区と同じ積雪量、もしくは多いくらいに変化した。同じような現象が風下になる八幡地区で積雪の記録を更新しないかと、老婆心ながら心が痛む。

弥畝山は標高９６１メートル、その稜線に１００メートルばかりの風車が立てば、八幡から見えなければおかしいと思っていたら、息子達から雄鹿原の診療所の帰りに八幡洞門を通ってすぐに５基の風車が見えたと報告があった。最近の変化なのと県境の向こうの出来事なので情報が遅れているのかもしれない。建設が完了した時は何基の風車が稜線から顔を出すのか、これも興味がある。この地方も携帯電話の中継塔が思いもかけないところにまで建設されて、たまのドライブにこんなところにと驚くのだが、今後は風力発電の風車で驚くことになるのかも知れない。

今まで利用されなかったエネルギーを電力に変えて活用する、素晴らしいことである。しかし、５０メートルに近い羽を回転させるメカニズムは近年の技術の進歩がなくては成立しなかった。特にプロペラの回転軸の取り付け部の荷重はとんでもない数字になるはずである。回転軸に密生している取付のボルト穴はその巨大な荷重を想像させる。久方ぶりに近代工業発展の成果の一端を見た。

ともあれ、こんな山の中まで開発が進んできた、道路の改良で都会が近くなった、ダム建設で山の中にも日本近代化の足跡が見えると思っていた矢先、今度は山の稜線越しに風力発電のプロペラが見える。時代の足音が近づく一方で、人口流出で山村が崩壊してゆく、この矛盾をどう解決してゆくのか、老い先短い老人の一人として、そのことを心配している。

2016.9.20 見浦哲弥

青年と話す(2012/10/25)

2012.4.5　家畜薬会社のセールスマンが訪ねてきました。担当の亮子君が（息子のお嫁さん）留守で誰もいない、やむ得ず相手をすることになりました。
少しばかりの世間話でお茶を濁すつもりが、彼が本気になったので、つい長話になってしまいました。今日はその報告です。

見浦牧場の事務所には、目下病後の子牛や母牛不具合などで離乳して乳牛のミルクで飼養している子牛が４頭同居しています。
それを見ながら、最近の和牛の品種改良の話から始まったのです。ご存知のとおり現在の和牛の世界はサシの追求一点張り、近親交配は当たり前、おかげで血が濃くなって、様々な弊害が出始めているのです。私達はサシはＡ３程度で、体力のある飼い易い牛をと、血の分散を考慮して交配、淘汰を続けてきたのです。長い年月が経って少しはそれらしい牛が出来るようにはなったのですが、種雄牛を作って独自の和牛を作るのには頭数が少なすぎます（母牛が８０頭前後では)。従って市場で供給されている精液を購入するしか方法がありません。
日本の和牛は近代育種が取り入れられるまでは、母牛選抜と言う方法で改良されてきました。いい母親が出ると、それに評判のいい雄牛を掛け合わすという、母親中心の改良選抜で出来あがった系列を蔓牛（ツルウシ）と称して大切にしました。その大先輩が兵庫県、有名な但馬牛はそれなりの長い歴史があるのです。
浅学をかえりみずにお話すれば、兵庫県に２系統、岡山県、広島県に１系統、ありました。その後、鳥取県、島根県に突然変異の優秀なオス牛が現れて和牛界の地図を書き換えましたが。しかし、時代は変わりました。人工授精という技術が開発されて、優秀な種雄牛の精液が手に入るようになりました。私が子供の頃は、小板にも松原にも種牛という県有牛がいましたが、見浦牧場を始めた頃は耕運機の普及に伴って廃止され、種付には隣の八幡村まで１０キロの道を牛を連れて行ったものです。
時はあたかも牛の人工授精が普及を始めた頃、私達も懸命に技術を習得しました。でも最初は凍結精液ではありませんでした。加計にあった家畜診療所の冷蔵庫に保管してあるストロー入りの生精液を発情の度に取りに行ったものです。
やがて精液の凍結技術が開発され普及して来ました。でもそのボンベが外国製で十数万円もする。まだ為替が３６０円前後の頃ですから、貧乏な私達には高価でね。でもなくては仕事にならない、飛び降りる気持ちで買いましたね。

そんな牧場を始めた頃の苦労話をしながら、何故ここまで生き残ったのだろうかと、私の思いを話したのです。

失敗続きの最初､授精に来られた神川獣医さんに聞かれました。「直腸に手を入れた事がありますか」「獣医ではないので入れたことはありません」、と何気なく応えると桧垣さんが烈火のように怒ったのです。最初は何故叱られたのか判りませんでした。呆然としていると怒りを抑えた先生が話し始めました。
「貴方は和牛飼育を仕事にすると言った。それはプロになるということ。初めから出来ないと諦めるのではプロの資格はない。挑戦して少しでも目標に近ずく努力をする、それがプロ。子宮の状態を知るのは直腸に手を入れて直接触れるのが最良なんだ。それを獣医師でないからと最初からあきらめる、それではプロになれない」、同じような仕事をしてもプロとアマチュアで

は心がけが違うと教えられたのです。
そして「４０日後に妊娠したかを診にくる、その時君の判断を聞く、それが君のプロテストだ」と言い残して帰られたのです。

久しぶりの心の底からの叱責は、まだ若かった私を懸命にさせました。牛には気の毒だがこれも勉強と毎日直腸に手を入れて子宮を触りました。そして微妙な変化を読み取ろうとしたのです。最初は何も伝えてこなかった指先が１０日もすると何かを教え始めました。日常的な変化と違う微妙な何かを。
４０日が経ちました。神川獣医さんが来場されました。例の牛を枠場に繋いで直腸検査が始まりました。先生の次に直腸に手を入れた私に聞かれました「どう判定するかね」、「左の子宮角が少し腫れています。妊娠、プラスです」、何にも言われずに私の顔を見つめられた先生は、それから態度を変えられました。農家と獣医さんの関係でなく、畜産の師と弟子の関係に、自分の持っている知識を、私に植え付けようとするように。何年かして定年で故郷の山口に帰られた先生は、「見浦はどうしているか」と、気にかけていただいたとか。

職業人であることは、アマチュアで満足することではない、常にプロの道を歩き続けること。
生きることの厳しさと、仕事に対する執着心とが必須であることを教えていただいた。
人生いたるところ、先生あり、そんな生き方が出来た幸せをかみ締めていますと。

そんな話をしたのです。熱心に聞いてくれた彼、私の気持ちが何処まで伝わったかな。今日は生き方の受け渡しをした報告です。

2012.10.25　見浦哲弥

心遣い～食肉加工場の建設～(2013/12/22)

３女の律子が我が家に帰ってきて、新しい風が吹き始めました。この人は２０年余り以前に犬山の斉藤精肉店で２年働いた経験がある。斉藤さんは私の生き方を朝日新聞の記事で読んで共感し、サラリーマンから転身して成功された人。訪ねてこられたこともある。特別に御願いして家族の中で働かせてもらった。それから２０年、姉、祐子さんの会社を手伝うことで、ミニ新聞社の経営、販売、営業、など様々な業種をこなしてきた。ふと気がつくと世の中は電子化で新聞事業は斜陽化、社業縮小で居場所がない。そこで手についている牛肉の加工技術と調理師の資格を生かさない手はないと、牧場の牛肉を売ってやるかということになった、と私は理解している。

時は農業も６次産業化が必要と騒がれている時代、見浦牛肉の味はテスト試食の段階でもファンは多い。何時直販をするのかと声がかかってから久しい。もとより人生終末の私が音頭を取るわけには行かないが協力は出来る。限られた乏しい資金の中でのやりくり、できるだけ、手作り、中古品でスタートしようと一決、加工場の建設が始まったのである。

さて、場所は見浦家が大規模林道に面した崖、役場との交渉や登記で時間がとられて、和弥がユンボを操作して崖を崩して敷地づくりが始まったのが５月､基礎､床のコン打ちと始まった。職人ではないから仕上げは見事というわけには行かないが、何でもこなす見浦牧場の面々、敷地が出来、図面も出来上がって、基礎コンも、型枠作りから生コンの流し込みまで家族でこなす。何とか出来上がって、今度は建築材木の手当て、久方ぶりに山に入ると荒れた山でも自然木の松や杉で一杯、牧場の周囲の山だけでも充分すぎるほどの立木、さてこれを伐採して製材にかけないと、と思案する。なにしろ小板の近辺から製材所が消えているのだ。経済大国になったとかで、国産の木材を使うよりは外国の加工済み木材を買うほうが合理的だそうで、中小製材所は仕事がない、従って倒産廃業と言うことになって、近辺には２０キロ離れた芸北の細見に１軒あるのみ。それも毎日は営業はしない。若い時に簡易製材所を動かしたこともある私は「機械がありゃー自分でやるがのー」と悔しがるばかり。

ところが工事場の前を芸北運送の社長が通り過ぎた。早速、電話がかかってきて、何を建てるのかと問い合わせ、斯く斯くしかじかで食肉の加工場を作ることになった、と返事すると「手持ちの製材品があるので使って欲しい」と。１０年余り前、倒木が多量に出たときに製材した桁やタルキ等々、倉庫の邪魔にもなるので無償でやるから取りに来いと。続いて郵便配達の山根さんが、先年、道路の立ち退きで家を解体したときのサッシが取ってあるので使って欲しいと。別荘の真田さんも不要の材料があるからと。同じく大野さんも使えないステンの業務用の流し他を無償でと。何時の間にか建物の半分以上は材料が揃って工事が始まったんだ。

勿論、屋根や壁は中古品というわけには行かないが、皆さんの好意で材料の大部分が揃ったのだから、人生は日頃の生き方が大切だ。

基礎つくりは手作り牛舎の経験でお手のもの。水平作りも、最初のころは長い樋に水を張ってなどと笑い話をしながら、簡易とはいえ測量器で簡単にだす。型枠を組み立てコンクリートを流し込む。大工さんは長年付き合いの斉藤さん、高齢で緻密加工とは行かないが施主の無理がきく、私たちのとんでもない要求にも対応して無理な加工もしてくれて、問題がおきると大工

さんと息子と私の３人で「エイヤ」と解決、それで２０年も３０年も持ちこたえる建物ができる、見浦牧場の最良の友。こうして低価格で使用可能（保険所の検査が通る）な加工場の建設が進んでいった。

とは言え、牧場の作業は、工事とは関係なく毎日進行する。そのやり繰りをしながらの建築は、なかなか思うに任せない。何とか建前を済ませて、屋根を葺いて、外装をして、内装にかかったのは１０月に入って。計画では１０月には完成、11 月には保険所の検査に合格して仕事を始めようかが、遅れに遅れて、ようやく内装に。大工さんもあちら、こちらの友人の大工さんに声をかけてくれるのだが、皆さん高齢、鬼籍に入った人もいて、仕事よりは年金生活と応援の人がいない。さればと１０月５日から家族の素人大工を総動員、律ちゃんと和くん（カックン）と３人で天井はりを始める。素人の悲しさ、最初の仕事と終わりでは仕上げに格段の差、プロのようには行かないが仕事は進む。それで、それから一ヶ月、雨降りは加工場の方へ全力投球をすることに決めた。

市場経済の議論をする気はないが、”投資は最小で最大の効果を”は原則である。建物は加工場であるかぎり食品衛生上の要件を満たせば豪華である必要がない。勿論、法律の範囲内に収まらなければ保険所は許可を出さないが、その限界が何処にあるかは、私達は素人であり、大工さんも始めての経験で知識がない。そこで堂々巡りの議論が始まる。特に内装工事が始まって喧々囂々、結論が出ない。そこで保険所に電話、１６日にアドバイスに来てくれることになった、一歩前進である。

ここまでに、今回の加工場の構造の説明はなかったので、概容を記すことにする。

加工場は６メートル×８メートルで４８平米、屋根はガルバニュームの波トタンぶき、外壁はカラートタンの乾式構造、屋内は倉庫、食肉加工場、食品調理場の３室、律ちゃんが働き易いようにと計画した。

ところが、骨組みの材木が貰い物で多少寸法が違う。大工さんが何とか組み上げたのだが、内張りの段階で修正の箇所が出て余計な手間がいる。壁は乾式構造なので、ラス板を張って断熱材を入れてボードを打ちつける。投資は最小にがモットーだから天井も壁も保健所の審査基準すれすれの材料、これが大工さん気にいらないと不満を並べる。それをなだめるやら、すかすやら気使いも大変である。

10.16　保健所に御願いして内検をしてもらう。広島から婦人の検査官が来場、親切な人で判らなかった問題が解決、仕事が軌道にのる。電気屋さんにも見積を御願いして、内張りも完了して床を仕上げ塗りしてもらって、器具の搬入を始める。やっと終わりが見え始めた。

ところが意外なところに問題が発生、電気工事を依頼した会社が、合理化と過疎化で広い芸北地区で作業員がいない。中電を定年退職した社員に臨時で依頼しているのだが、高齢化で現場に出られる人は二人とか。これで旧６ヶ町村をカバーしているというから大変、新規工事で作業中でも故障修理の依頼が入ると飛んでゆく、それが並みの距離ではない、中国山地の過疎化がこんなところまで影響しているとは。電気工事が完成したのは 12 月に入ってから。それからガス屋さんに依頼して工事が完成したのは 12 月の 19 日、外は 60 センチの積雪だった。あとはレンジフードの取り付けだけ、年内に保健所の許可を貰うことは不可能になった。

ともあれ加工場の話が持ち上がって１年が経過した。何もなかった処にチープな加工場が出来上がった。巷間、かしましい６次産業には程遠いが小さな牧場の小さな挑戦が始まる。見浦族のささやかな旗の下でね。我が先祖はどう評価するのか、もうすぐ聞けるかもしれない。

2013.12.22　見浦哲弥

猛暑(2015/8/26)

2015.8.1 梅雨があがったと言いながら続いた悪天候が晴れ上がって、遅れに遅れた草刈、ローリングが出来ると喜んだら今日は３８度を越す猛暑、テレビも有線も熱射病で倒れる人続出と報じる。とはいえ草刈はやめる訳に行かず一日中トラクター作業。ところが貧乏牧場、キャビンつきのトラクターは皆無、従って冷房なる近代設備とは無縁だから、炎天下、作業帽が日差しをさえぎるだけ。連日、３５度の高温がしては熱中症にならないよう老化した頭に鞭打って水を飲み塩分を取る。それでもこの高温はただ事でない。４０度に達したところもあるというからと、自分を慰めるのだが、何処まで続く猛暑かなである。

8.11　天気予報では午後から雨で午前中に刈り倒した草の取入れをとの計画が朝から小雨、予定は狂ったが猛暑の終焉である。もっとも、ここ 2-3 日は夜半から朝までは気温の低下で凌ぎやすくはなっていたのだが、久方ぶりの雨は秋到来を告げている。考えてみれば時間が飛ぶように消えてゆく。何処まで続くと思った猛暑も一瞬だった。

小板は海抜 780 メートル、高冷地である。真夏の一時を過ぎれば朝晩は都会人が羨望の空気と気温の世界である。勿論、それを狙って別荘が増える。自然が満載の小板では様々な生き物がいる。大はツキノワ熊から猪、狐、狸、いたち、てん、鹿にいたるまで、野生動物に付き合うのは日常である。ただし、豊富だった小板川の魚や水棲動物は住み着いたサギ君の活躍で全滅に近いが、自然と対話するのには事かかない。

8.14　お天気が回復するが、回復すれば仕事が追いかけてくる。朝からトラクターで草刈、牛の予防注射をして、刈おきの草のレーキング。朝晩は涼しくとも日中は 30 何度、朝夕は過ごしやすいのだが、その温度差の大きさで疲労が蓄積する。それでも真夏は過ぎた。これからは真冬に直行するのみ。そして「早よう暖くう（ぬくう）ならんかのー」と、ぼやく寒い日がやってくる。こうして”年々歳々時相似たり、歳々年々人同じからず”を繰り返す。

真夏の猛暑になると母が亡くなった広島の夏を思い出す。私の育った福井も三国も、まして小板では想像も出来ない暑さだった。おまけに広島名物の夕凪と来る。昭和 17 年の日本では冷房などはデパートくらい、あとは扇風機があればご馳走と言う世界、団扇と風鈴にひたすら頼るその中で、癌で倒れた母を見送る、私にとって残酷な暑さだった。

小板は深入山と臥竜山との間にある、小さな高原である。最盛期には 100 人足らずの住民と２０ヘクタールの水田があった。かの有名な３８豪雪では 4 メートル近い積雪があった。しかし、夏は爽やかな風が谷間を吹き抜けるし、真夏でも朝夕は季節を忘れる涼しさだった。
が、地球温暖化の影響か、小板にも猛暑がやってくる。今年のように 36 度も越えると、そして連日ともなると、熱中症も他人事でなくなる。しかも、この時期は牧草の収穫で炎天下のトラクター作業が続く。そのせいか、新型のトラクターは運転席はキャビンで、エアコン、ステレオつきだが、貧乏牧場の年代物のトラクターは屋根もない。3 時間も連続作業をしていると目が回ってくる。が、圃場の大きさや作業の都合では、そんなことも言っておれない、「えー、ままよ」と頑張る。勿論、水筒のお茶を飲みながらね。

とにかく小板も猛暑だった。が、幸いなことにお盆を過ぎると、又高冷地の気象が戻ってきた。

毎朝の爽やかな空気は小板ならではである。

8.26　猛暑が過ぎて爽やかな空気がやってきて「エー季節やねー」となる。途端に晴天が続かない。御蔭で草刈の予定が狂って作業がうまく行かない。世の中は　”エーこと”と都合の悪い事がセットでやってくる。

2015.8.26 見浦哲弥

蒸気機関車(2015/9/15)

私は蒸気機関車が好きだ。テレビで蒸気機関車が登場する番組は見逃す事が出来ない。
この遠因は私の生まれた福井の記憶にあるらしい。小板の大畠に戸河内の上殿から手伝いに来ていた佐々木さんという小母さんがいた。弟の信弥さんが生まれたとき、身内同然だった小母さんに手伝いに来てもらったんだ。後年、小母さん曰く、「哲弥さんには参ったよ。少しでも時間があったら汽車を見に行こうと駄々をこねて」と。

福井の住所は駅の裏側にあった。ほんの少し歩くだけで福井駅の操車場につく。昔は大きな駅には必ずあった広い操車場、鉄道の進化で見られなくなったが、その風景は脳裏に焼きついている。
操車場の古枕木の柵にすがって何時間も汽車を見ていたんだとか。動輪４個だけの豆機関車が長い貨物列車から貨車を１両ずつ切り離して引いてゆく。その先にある小さな盛り上がりに押し上げると”トン”と坂の下りの方に押し出す。そこで貨車は自力で走り出すんだ。貨車のブレーキところには赤と青の小旗を持った操車係が何時の間にか乗っていて、旗を振り振り坂道を下るんだ。下った先にレールの切り替えのポイントがあって、行き先の貨物列車の後尾めがけて走る。連結の瞬間は赤旗が振られて「ガシャン」と大きな音がして完了。
その作業が面白くて、今度の貨車はどっちへ行くのかと懸命に眺めたものなんだ。

福井は裏日本、鉄道は北陸線、表日本の東海道線、山陽線と違って２級鉄道だった。従って１級線で勤めを果たした機関車が勢揃いで、コブの数、形、動輪の数、大きさ、デフェンダーのあるなし、先導車輪は、ないのから２軸まで、炭水車がある、なしなど、様々だった。だから福井の操車場は私の好奇心を満足させる絶好の教室だったんだ。

福井の見浦では夏休みになると父の故郷の小板に帰るのが恒例だった。広島から小板までの小さなバスは嫌いだったが、広島までの汽車の旅は楽しかった。２級路線とはいえ北陸本線は幹線、牽引する機関車は骨董品ではない。おまけに福井から敦賀に出るまでに今庄という山越しがあった。現在は北陸トンネルが貫通していて１０分足らずで通過してゆくが、当時はスイッチバックで前進後退を繰り返しながら、その峠を越してゆく。あれから８０年足らずで、このスイッチバックは数少なくなって、貴重な、その一つが当県の備北にある、孫には見せたいものの一つである。

北陸線は琵琶湖の北端、米原で東海道線に接続する。ここからは東海道線、大阪からは山陽線で、日本の新鋭の機関車を見放題。楽しかったな。大きな機関車が長い客車を引く、力強いし頼もしいのだが煤煙も凄くて風向きによっては、煤や石炭の微粉が窓から飛び込でくる。車窓の景色に夢中になってしがみついていると鼻の穴が真っ黒になってね。福井から帰るのには広島で必ず一泊するのだが、まず風呂、昔の汽車旅行でお風呂が欠かせないのは、この煤煙のおかげ。

昔は現在のようなトンネル掘削の技術がなかったから、長いトンネルは少なかったが、それでも鉄道の特性でトンネルは多かった。トンネルに入る前に必ず汽笛がなる。急いで窓を閉めないと車内が煤煙で一杯になる。昔の汽車旅行には現在と違った世界があったんだ。

広島の手前に西条という盆地がある。その間の瀬野川駅と八本松駅の間に急な坂道が続く。山陽線の新型機関車でも、この坂道には苦闘した。八本松からの下りは快調に走るものの、瀬野川駅からの登りは応援の機関車が後ろにつく。そして汽笛を合図に西条に向かって、前ひき、後押しで登ってゆくんだ。もっとも、これは敗戦から立ち直りはじめてからのこと。敗戦直後は機関車が１両であえぎながら辛うじて登ったんだ。何の用事でその汽車に乗車したかは記憶にないが、満員で客車のトイレに入れないので、飛び降りて線路わきで用を済まして、走って再び飛び乗れるほどのスピードだったと言えば理解をしてもらえるだろうか。

瀬野川駅には、そのために沢山の機関車がいたね。福井の機関区とは違って最新の蒸気機関車がね。世が世なら、そんな私はいっぱしの鉄道マニアになっていたと思うのだが。

日本が高度成長期に突入すると、蒸気機関車は見る見る姿を消して、公園の片隅にひっそりと残骸をとどめるだけになった。そして世の中は、ディーゼル機関車、電気機関車、高速電車とめまぐるしく進化をとげたんだ、そして現在は新幹線と高速道路が主役、私の昔話を聞いてくれる人はいなくなった。

でも、私に頭の中には機関車の汽笛と蒸気の音が鮮明に記憶されている。

テレビの画面に機関車がでると目が釘付けになる、私は８５歳の鉄道マニアなんだ。

2015.9.15　見浦哲弥

寿命(2015/10/8)

2015.9.16　今日はお隣部落のＭ さんのお葬式である。彼女は６１歳、私の長女の同級生、孫達の幼稚園の先生だった。控えめで他人の世話をよくする評判の女性だった。耳長の私にも彼女への批判は聞いたことがなかった。ちなみに旦那さんは少々癖のある人で好悪評価はまちまちだった。お母さんは優しい人だったと記憶している。

人の寿命は予測できない。戦争中は若くして命を終えるのも特別のことは思わなかったが、平和になり寿命が延び始めて当然のように長生きの人が多くなった。が、平均寿命より２０年も３０年も短い死となれば、生きることの難しさを痛感する。

日本の現在の平均寿命は男性８０歳、女性８８歳であるが、平均寿命を越えて生きるのは大変なことなのだ。勿論、長寿は喜ばしいことなのだが、痴呆になったり、病に倒れて延命術での長生きは、長寿の範囲にはいれたくない。小板の現在の老人は、男性が私が８４歳、K 君が８２歳、S 君が８０歳、幸いなことに３人とも何とか働きながら余生を送っている。ちなみに小板でも女性の方が長寿で、現在９１歳と８９歳が１人暮らし、さすがに日常の身の回りの生活が精一杯である。

昨年、７０代の Ｉ さんが死亡して以来、小板では葬儀がない。壊滅寸前の集落にとっては最大の贈り物ではあるが寂しい限りである。従って集落の運営はまさに軽業、何とか集落の形を保ってはいるが、明日は神頼みしかない。一日も今のメンバーの寿命の長からんことを祈るばかりである。

しかし、寿命には波がある。小板でも６０歳代の死亡が続いたことがある。H さん、F さん、T さん、S さん、K さん、その後、G さん、これは先日の S 君との昔話、そんなこともあったねと。人間の寿命は理屈通りには行かない。８０を越して元気でいられたら、それだけで幸せなのである。

最近は老人といえども、お寺参りが趣味の人が少なくなった。それよりデイサービスなどと称して介護施設に通うのが当たり前になった。長い労働の人生の終わりに、食事をして入浴をして雑談をして、若い人のサービスを受ける、厳しい人生を歩んだ人には夢の楽園らしい。我が小板でも、お寺参りは事故で死んだ F さんが最後だった。時代の流れなのか、それとも宗教家の怠慢なのか、そして老人の目から輝きが消えたと思うのは私だけだろうか。

私の周りには動ける間は働こうという仲間がいる。年齢的には仕事から離れて悠々自適ができる老人たちだが、その中でも K さんはよく働く。御年は９１歳、さすがに耳は聞こえないが畑に出て野菜を作る。まだまだ元気で時間は残っているように見える。８０代でも家の中にこもりがちになられた人々は加齢の速度があがる。あれでは来年はと陰口が聞こえてくる。

ところで他人の噂話に興じている時ではない、自分のことである。会う人が口々に見浦さん元気ですね、とのたまう。私も人間、人並みに年は取っているのに理解をしてくれる人は少ない。最近は老化の本が気になって時々抜き読みをする。その中のテストに今日は何日ですかの問いがある。幸い孫達が学校へ行くので、土曜と日曜は間違えることはない、が、ウィークデイはなかなか難しい。何しろ受け持ちの肥育牛に餌をやったかどうかが記憶にないときは牛舎まで

行って餌の食べ具合をみて判断する。ま、現在は考え事が集中する時に起きるだけだから我慢が出来るが、これが常時起きるようになると恐ろしい。ボケが進行して家族に迷惑をかける長生きだけはしたくないものである。

小板の長命のご婦人お２人が､最近老化が目立つようになった｡懸命に散歩をし畑に出るなど、努力はされていたのだが、よる年波には勝てない。そんな現象を見ると自分の終焉も近いと感じるのだ。懸命に生きられた人生を見せていただいた私は、お二人の穏やかな終焉を願っている。

私の残り時間もあと僅かだが、さて人間見浦哲弥の最後はどんなドラマだろうか。さすがに、こればかりは予測が出来ない。

2015.10.8 見浦哲弥

詐欺台帳(2016/1/4)

過疎も進行すると様々な不思議が起きる。お年寄りや、寡婦の１人暮らし、多少、痴呆かと思われる家々に頻繁にセールスが訪れる。そして高価な商品やサービスを言葉巧みに売りつけてゆく。１人を断っても、日を置かず次の業者が現れる。根負けして、そのくらいの金額ならと妥協したら最後、とことんまで搾り取る。そんな商売が、この山奥の小板まで入り込んでいる。

ここでは某家と言うことにする。ある日仏壇の手入れなるセールスがやってきた。世間話の末に「仏壇を見せてくれ」と言い出した。ま、見せるだけならいいかと見せたら、延々と話が続きだしたんだと言う。気がついてみたら大金で仏壇の修復の契約をしていたとか。これはまだいい。修復された仏壇は見事に綺麗になったと言うから、まんざらの詐欺ではなかったようだ。金額は話してもらえなかったがね。

ところが、それから物売りのセールスが次々と訪れるようになったと言う。話を聞いていると何時の間にか買わされている。豊かでもない財布から虎の子が次々と消えて娘さんにも話せない買い物まである。さすがにご主人に先立たれて１人暮らしの奥さん、これは変だと気がついた。これは狙われている、あの連中は横の連絡があるなと。そこでテレビつきインターホンをつけ、在宅時は日中でも戸締りを厳重にした。ご当人、こんな田舎でも戸締りをしないと狙われるなんて、世の中どうかしてないかと、ぼやくこと。ところがあそこが駄目なら１人暮らしの老人宅はまだあると、他の家にセールスの訪問が多くなった。住民が減って世間話の相手がいない現在、口のうまいセールスにとって年寄りを騙すことなど赤子の手をひねるようなもの。今度は田舎に老人だけ置いている都会の子供達が神経を使っている。

幸いと言うと語弊があるが、現在の小板のご老人は、いずれも資産家でない。それでも危ないと、当座の生活費以上のお金は持たせないようにと、配慮する家庭が多くなった。若者は都会に生活の場を持つので、月の大部分は老人の１人暮らしなのだから止むを得ない措置であるが。

それでもセールスがやってくる。老人の家ばかり回る物騒な車がね。最近は詐欺師も近代的に進歩して手段も巧妙。ならばと、私達も見慣れぬ車が老人宅に長時間、停車すると車のナンバーを控えて対抗することにしている。デジカメやスマートホンの時代、イナカッペと馬鹿にするととんでもない仕返しが待っている。小板は老人ばかりだとあなどると痛い目にあうと予告しておく。身構えて対策を立てているのは一人ではない。

一時、無住宅の倉荒しがこの近辺を襲ったことがある。その頃は、この山の中まで泥棒がお出でになろうとは夢にも思わず安心していて見事にやられた。それまでは不審な車の長時間停車は関心を持たれなかったが、詐欺や泥棒の被害が出るに及んで、住民の目が厳しくなった。衰微したとは言え、長い間助け合った歴史は遺伝子の中には残っている。馬鹿は助けないが正直に暮らしている老人に手出しする奴等を、なんとか手痛い目に合わせようと、手ぐすね引いている人間が何人かいるのだ。小板を舐めないで欲しい。

そのせいで最近は詐欺師にやられたという話は聞かない。美味しい話が大好きという人達もいなくなって、年金暮らしの老人ばかりでは、労多くして・・・・という情報が出回ったのかもしれない。

それでも、見慣れない車が止まるとカメラを持った住民が物陰で注目する。
詐欺師諸君、小板は危険地帯に変身したんだ。

2016.1.4 見浦哲弥

貴方は知っているか、集落那須(2016/1/28)

2016.11.24 かねて依頼されていた堆肥 2 トンを那須の岡田君宅まで配送する。
那須は県道 296 号線を国道 191 号線の戸河内の明神橋（コンクリート製の白い逆アーチの橋）を渡って大田川の分流を吉和村に向かって走る、深い峡谷の中を走る 1 車線の道路は約 10 キロで那須に向かう分岐点に達する、左の坂道を登ること 1 キロ、突然眼前が開けて南面の緩斜面、それが那須である。

那須には歴史がある。言い伝えによれば源平の合戦にも遡るという人もいて、平家物語の那須の与一が先祖との説もあるが、長い日本の歴史の中で敗者が安住の地を求めて辿り着いた秘境、その一つが那須の部落なのかもしれない。この近辺にはそのような話の集落が数多く存在するのだそうだ。

先日、買い受けた 2 トントラックの代金支払いをかねて岡田君宅を訪れたのだ。彼が林業会社を経営していた時に使用した車が不要になったため買い受けたもの。私が那須を最初に訪れたのは 50 年前の町会議員選挙に立候補した時、当時は 20 数戸の立派な集落で、突然あらわれた別天地に感激したものだ。

吉和村から流れる大田川の支流沿いの打梨から分かれる谷川沿いの杉林は長い歳月を物語る巨木に変化していた。そして現れた那須も家並みは昔のままでも、人影もなくひっそりと死に絶えていた。ただ岡田君の家だけが息づいているだけ。小板と違って残骸を晒した家は見えないが、無住の家々は生きることをとめていた。

私が最初に訪れた那須には小学校の分校があった。本校は本流沿いの打梨小学校、子供の声の聞こえる校舎前で選挙演説をした覚えがある。しがらみが存在した住民は家の陰など姿を見せずに聞いてくれた。姿を現してきたのは子供達ばかりだったな。遠い遠い那須の一つの思い出だ。

同じ崩壊集落でも小板と那須では大きな違いがある。小板も崩壊集落であることに違いはないが、別荘を含めると 50 余戸の住居がある。この数は、停電で電力会社に問い合わせて始めて知った数で、住民は別荘の正確な数は知らなかった。従って常住する住民の数は那須と大差はないが、休日ともなると人間の息吹が濃く感じられるのだ。
中国山地の同じような条件の集落が片や消え去る運命を感じるのに、片や何年かすれば何とかなりそうと希望的観測が出来るのは交通の便の違いだと思っている。

那須は道路のドン詰まりに集落がある。私が知る限り、このドン詰まりを解消しようとする計画が 2 度あった。一つはトンネルで恐羅漢スキー場の横川集落に繋ごうとする計画、この話は地元の反対で駄目になり、それなら横川林道に連絡する道路の建設をと建設が始まったが、時遅くバブルの崩壊で建設は中断された。

そしてドン詰まりの那須が誕生したんだ。時代が移り変わって自動車が普及して、整備された道路が居住の条件になった。そしてドン詰まりの那須は無住の集落へ追い込まれたんだ。私は内部事情を詳しくは知らない。私が 20 代のはじめ、那須には優秀な指導者がいたと聞いていた。残念なことに交通事故で亡くなられた。その後に我こそは御山の大将との目立ちやさんが

指導者に据わって、時代を先駆ける先見性が持てなかった。友人の岡田君が懸命な努力はしたが彼が権力を得た時は再生のチャンスは過ぎ去っていた。

2016.1.1　中国新聞に連載”中国山地”が再び始まった。その第一号の記事が岡田君の那須の紹介だった。滅び行く集落の中で孤軍奮闘する岡田君夫妻の紹介と希望で記事が終わっていた。50 年前の”中国山地”も深く読め込めば滅びの記録だった。なぜこの流れが続くのだろうか。この時代は市場経済なる怪物で動かされている。このシステムは、巨大な資本を持つか、たとえ小さくても彼らの一歩先を歩く以外に勝ち残ることは出来ない。世の中には経済紙あり、評論家の解説ありで、様々の情報は溢れていて、誰もが我こそは人よりも先が見えると自負している。小板も例外なく俺の方が偉いと自負なさる方の山積だった。そんな社会の片隅で岡田君は懸命だった。働き口を作るとて山仕事の会社を作り集落の人に働き場を提供した。
彼とは農協の役員として、農業委員会の委員として、何年か共に働いた。そして何度かあった改革のときの信頼できる友人だった。残念なことに彼が那須の指導権を握った時は再生の時代は過ぎ去っていたんだ。

自分がなくて、約束をを守る、そんな彼は戸河内町でも数少ない人材だった。田舎のボスの通例の地方政治には乗り込まず、ひたすら那須の人々の仕事場を確保することで那須を守ろうとした。が、時代は厳しい。タイミングを失した那須は彼の努力にもかかわらず、少しずつ力を失って彼 1 人の集落になった。私と同年代の彼は何時の日かの那須の復活を夢見て今日も頑張っている。

私は、その彼の健闘にエールを送ってはいるが。

2016.1.28 見浦哲弥

補聴器(2017/1/4)

耳が聞こえなくなるのは高齢者の誰もが通る道だ。家内は私と一つ違いだが彼女の難聴は私より早く始まった。

幸い私はまだ聞こえるので不自由を感じないが、確実に難聴の道を歩んでいることは自覚している。音楽の高音が聞こえなくなってもう何年になるか、貧乏の中でたった一つの趣味だった音楽好きも、手作りの Hi-Hi がコンポにかわり、そして現在はラジオで満足している。高音が聞こえなくなり、音楽に艶がなくなったからだ。幸い、まだ人の声はほぼ？聞こえているので不自由は感じないが。

しかし、晴さん（家内）の難聴は深刻な段階に差し掛かった。最初は補聴器を購入すれば解決すると安易に考えていたらしいが、老人の難聴は生理現象だから受け入れなくてはと遠回しの意見をしても、頑固な彼女は（頑固だからここまでやってこれた）補聴器さえ買えば解決すると聞き入れない。実は私の友人のＹ君は９０を越す高齢者だが、彼も４―５年前から耳が聞こえなくなり始めた。話好きな奴で近くで作業をすると缶コーヒーを持ってやってくる、畑の畦に座って延々と世間話。友人だから付き合うのは苦にならないが、話が終わらなくて仕事が出来ない、これには参った。その彼が耳が遠くなり始めた。長い間、工場勤めをした彼は相応の年金を受け取る。早速、補聴器を購入、これで大丈夫と思ったとか、思わなかったとか。が、今度は物忘れも進行、補聴器が行方不明となった。探しあぐねて新品を購入、再び行方不明。メーカーは喜んだが、さすがに本人も疲れた。おまけに補聴器でも難聴が解決出来なくなるほど進行、ついに諦めて、昨年は近くに仕事に行っても手を挙げるだけ、話にこない。仕事の邪魔にはならないが寂しさもある、老いるということは厳しい現象である。

この経験があるから、晴さんも難聴を素直に受け入れなくてはと思うのだが、彼女中々納得しなくて、補聴器に解決を求める、これも老化の過程の一つかと静観することにした。

自然の掟として、人間は生き物、必ず老いる。私は他人の批判でなく、自分の老化を素直に受け入れなくてはと、自戒しているところである。

2017.1.4 見浦哲弥

老化(2017/2/15)

老人になりました。もうすぐ８５歳、当然のことですが一度きりの人生が限りなく終わりに近づく、随分寂しいものです。

歩行が困難になりました。走ることは、もはや出来ません。急坂は休み休みでないと登れません。時速６キロを誇った健脚も休みながらでは３キロにも及びません。特に左足が痛い。どのような状態か姿見で全身像を見ることにしました。ここ何十年の変化の具合を詳細に見る気になったのは、私には特筆することなのです。

さて、姿見と対面しました。長年、肉体労働を続けていただけあって、上半身は、この年齢としては合格の点数かと思われる身体でしたが、下半身がいけない、O脚なのです。特に左足が湾曲している、これでは痛いはず。そういえば歩行時にも左足を引きずる感がありました。ま、７０年間も酷使したのですから当然ですが、まさに老残の肉体、そこまではひどくはないか？

私は１５-２０頭の肥育牛の飼育が受け持ち、それと草刈、収穫、畜舎の掃除の計画と作業、それで毎日が消えてゆきます。幸い残り少ない人生だから温泉に行こうとか、物見遊山とかいう趣味はありません。仕事でも読書でも、少しでも新しい経験と知識を得られれば満足なのですから、世人とは少々変わった変人なのです。

ところが、ここ１０年ぐらいになりますか、高いところが苦手になりました。昔は建前や屋根葺きには、若役として動員されました。ハンドウ（大きなカメのこと、落ちると壊れる）と呼ばれた高所恐怖症のH君ほどではなかったのですが、高いところの作業は志願したいとは思いませんでした。でも、後へ引けない時は高所でも作業をしたものです。が、高いところは足がすくむようになりました。トラックの荷物の積み上げが苦痛になり始めたのです。昔と違って落ちたら頭から落ちると。

最近はウォーキングと称して歩かれる方が多くなりました。年、何回か開催される安芸大田町ウォーキング大会の一つに深入山一周というのがあります。国道沿いのグリーンシャワーをスタートして旧国道を登り水越峠を越して、小板集落に出る、山間の道が急に開けて一望１０ヘクタールばかりの緑の集落が開けます。田圃あり、畑あり、草地あり、まだ人の手が入っていて荒地にはなっていない、昔の山村が出現するのです。「わー、ええとこよのー」は大方の意見。ところが大規模林道との交差点を過ぎると荒廃した田畑や建物が現れる、山際に点在する別荘が異様に目立つのです。別荘の住人は高度成長時の日本で成功された人達、そして周りの荒廃した無人の館や荒地は変貌する社会に対応できなくて落伍、都会の底辺に沈んだ小板の人達、一概に即断することは出来ないでしょうが、私にはそう感じるのです。４００年の昔、４つの沼の辺に生活の居を定めた４軒の先人の思いは、もはや消えてしまったかの様です。昔は働いても働いても食えないと農作業に家事にと身体を酷使していた老人達も、今は年金制度で働かなくても手当てが頂ける、有り難い事でと病院通いを日課とする、そんな老人が増えてきました。もっと身体を使わないと薬漬けになって、ご愁傷様でしたということになりかねないと思うのですが。

今年も「見浦さん、また堆肥を」と現れた町内の御老人は、もう８０近い。畑に堆肥をと来られ

て、もう２０年近くにもなりますか。でも髪の毛が少し白くなっただけで、お元気。もっとも歩くのは辛くなったとか。息子さんの運転する軽トラでこられて、「これから白菜を植えますんで、畑はよーがんすのー」と。

人間は自然の中の一員、近代化のお陰で田舎の人まで野菜はスーパーで買うということになってしまった。自家菜園を推奨する我が家でも時々はスーパー産の野菜が登場する。自家産の味に親しんできた老人には形は立派でも無味無乾燥で野菜本来の味は感じられない。昔の白菜の漬物は今考えると表現できない至上の味だった。勿論、品種改良が見栄えと多収穫に進んだのだから当然ではあるものの、このあたりにも農民の生きる領域がある、そんな感じもしています。

そこで”畑に出よう、自然と友達でいよう、それが幸せな老後につながる”と提唱したのだが、これは少数意見。長い間懸命に働いてきた老後、働かなくても何とか食べるだけの年金と貯金があると、優雅な時間を過ごす老人が増えました。ところが人生の終末は休むことなく近づいてくる。そして怠惰に慣れた老人は急激に衰え病院と介護のお世話になる。そんな老人を見るにつけ、“畑に出よう、自然に会おう、そして適度な労働を”、の私の主張は間違いではないと自信を深めている。

又、愚痴を並べました。能力の低下をいつも確認して、事故に気をつけよう、コンピューターの時間も減らすようにしよう、しかし、仕事は山積している、細心の注意で今日も頑張ろう。

また駄文を読んで下さい。

2017.2.15　見浦哲弥

久方ぶり(2017/2/22)

2017.2.22　久方ぶりに若い人に私の生き方論を話すことになった。

畜産では家畜にも保険をかける。医療保険と死亡保険だ。１年毎の契約で、その打ち合わせにＩ獣医と共済組合（農業保険のクミアイ）の若い職員さんの二人が来場、折悪しく亮子君は子供を連れて病院へ、和弥は契約の木材工場からオガコのタンクが詰まったとの電話で戸河内へ、従ってお二人の時間つぶしの相手は私と言うこと相成った。

Ｉ獣医さんが先日差し上げた私の小冊子”見浦牧場の空から”の書評を始めて、事務所のボロストーブの傍らで時間つぶしが始まった。若い共済の職員君（Ｋ君としようか）には気の毒だが、引退した私には牧場の事務関係は説明できない。担当の亮子君の帰宅まで時間を潰すしか方法がなかった。

私の小冊子”見浦牧場の空から”には私の短文３４個が掲載されている。「面白かった」というＩ獣医さんに、どれが一番でしたかの問かけに、”こがーなお客さんがおるんじゃーけー”が良かったと言う。広島の”エディオン”という巨大な家電量販店が倒産から立ち直った先々代の重役氏との会話に出会った小さな物語、貴方もインターネットで読んでほしい。キーは”見浦牧場の空から”。何度も危機に遭遇した私の生き様に大きな影響を与えた出来事だったから。

あれから６０年以上も経つ。広島の小さなバラックのお店は日本の３大販売店エディオンに成長した。その再起の一瞬に触れた小さな文章は若者に訴える何かをもっていた。

それから諸々の雑談、見浦牧場のモットーの「自然は教師、動物は友、私は考え学ぶことで人間である」などと話は尽きなかった。

考えてみれば、私は貧乏だったかもしれないが、素晴らしい先人や先輩方に出会えた幸せな人生だった。話すことは山ほどあって尽きることがない。有り難いことである。

たった一度の人生である。与えられた環境は様々だが、生まれたことだけでも幸運、後は努力に応じて人生が開けると私は考える。たとえ子供であっても、この理は変わりはない。問題はそれを誰から学ぶかである。幸せな人は父母から教えられるかもしれないが、父母がだめなら学ぶ先は、自分が暮らす集団の中の先輩かも知れないし、友人かもしれない。大切なのは人間は集団で暮らす動物、生き残るための集団を見つけ、その中で学んで成長する、それが一度きりの人生を有意義に生きる方法だと信じている。

でも漫然と暮らしている人が多いね。今日が過ぎても明日がある、明後日もあると錯覚、若い時は人生には必ず終末があるなど考えない人ばかり。熱心に老人の昔話に聞き入ってくれた青年、彼等の人生が素晴らしいものになることを祈りながら話を終えたんだ。

2017.2.22 見浦哲弥

ブラウンルート(2016/4/28)

見浦牧場は中国山地の県境近くにある。ここはブラウンルート(注1)や民間航空ルートの真下だ。お天気によっては上空は大変な賑やかさ、しかも米軍の訓練空域でもあるブラウンルートは世界情勢のバロメータで、ニュースが伝えない緊張感も伝わってくる。
平常時は週に２―３日訓練に飛来する。かなりの高度を２機が前後して飛行する時は、大抵は新米くんの訓練飛行、前機の上昇や急回転に後機が懸命について行く。
それが日にちが経過するごとに高度化して近くのダムめがけての急降下や夜間のドッグファイトになると新米くんも一人前かと一人合点をする。
ただ時たま谷あいを超低空で高速で走り抜ける。実戦になれば必要な技術かも知れないが、その時の轟音は尋常でない。翼端から水蒸気の白煙を引きながら峠すれすれをかすめた時は、流石に頭を低くした。一瞬ではあるが怖かったね。
この状態が起きると近辺の国際情勢が緊迫しているんだ。最も新聞その他のニュースソースは遅れること数日、それも加工してあってね、あとは想像しかない。
ノーテンキな日本人は日本が敗戦したことを忘れて抗議の声を上げるが、国際情勢はそんな単純なものではない。原因を作った東条さんを神様と信じる国民には理解ができないかもしれないが。
それはともあれ、北朝鮮ではロケット発射や原爆実験で物騒な話が伝わってくる。ところが今回はブラウンルートが静かなのだ。何日か置きに高空で１―２度ドックファイトをするくらい、それも１―２度繰り返すと静かになるんだ。そこで素人が判断する、北朝鮮の行動はブラフだけだと見ぬいたのかなと空を見上げている。

ともあれ小板の空は賑やかだ。ブラウンルートには松江の海上自衛隊の４発機も時折やってくる。２機編隊で悠々と上空を通過して旋回して帰ってゆく。こちらは同じ軍用機でも緊張の程度が違う。
土日の休日に温井ダムの近くから超ミニライトプレーンもやってくる。深入山を一周して帰ってゆくが、シート一枚で何百メートルの下の地上を見ながらの飛行は私には考えるだけで怖い。
小板の上空は商業航空の航路でもある。気象条件のいい晴天に北東の大阪方面からジェット旅客機が白雲を引きながら駆け上ってくる。深入山の上あたりで突如消えて銀色の機体が点となって移動してゆくのだ。南西からも同じように飛行機雲が引かれて深入山で消える。
書物によれば飛行高度に登るためにエンジンをフルパワーにして上昇するために飛行機雲が生じるのだという。
敗戦直前の昭和１９年、大阪方面から九州に向けて戦闘機から練習機まで様々な軍用機が上空をとんでいった。赤とんぼと呼ばれていた練習機まで。敗戦前の最後のあがきの特攻機としての移動だったと。
どこにもある小板の空、でも、少し観察を深めれば物語がある。

2016.4.28　見浦哲弥

（注1）
ブラウンルート：米軍の低空飛行訓練ルートの１つ。見浦牧場の上空は、米軍の空中戦訓練空域「エリア 567」にも含まれている。

１８豪雪(2018/3/26)

３８豪雪と言うのがあった。私がまだ２０代だったと記憶しているがとんでもない豪雪で今でもこの地方の語り草である。何しろ茅葺屋根の家が一軒押し潰されて家人が箪笥に畳を差し掛けてその下で震えていたとか、配電線の電柱の下をくぐる時は気をつけないと３０００ボルトの高圧に触れるのでウンと頭を下げないと感電するとか、お宮の鳥居は雪に埋もれて跨いで通れたとか、確か長女の裕子さんが１歳のときだと記憶するから６５年も昔の事である。

しかし、最近は世界的に温暖化に向かっているとかで、そんな話をしても誰も真面目に聞いてくれない。降雪が少ないのは地球の気温の上昇とか都合のいい話をでっち上げていたら、今年はとんでもない豪雪と相成った。

何しろ初雪が１ヶ月早い。通年は最初の雪は完全に消えて根雪になるのは１２月の２０日頃、年によってはお正月に雪がなかったこともある。それが１１月に降った雪が根雪となったからたまらない。昔は田仕事がすんで茅刈が終わったら家の回りにその茅で雪囲いをするだけだったが、牧場を経営していると根雪になる前にするべき仕事は山積している。牛は雪が降ったとて冬眠をする事はないのだから、通常の冬でも２ヶ月間は雪のために出来ない仕事がある。畜舎のボロ出し（清掃）から始まって、雪囲い、機械の整備、等々である。それが全部未了、牧草地には積雪、おまけに厳冬が始まったのだから、牧草をはじめ濃厚飼料は多くいるわ、私は老化で能力が低下するわで、四面楚歌の状態に突入したんだ。

最近はお隣の八幡地区に降雪の自動計測機が設置されたらしくテレビでも北広島町八幡地区の積雪量として報道される。八幡地区は小板と稜線一つ隔てた隣村、積雪量は殆ど同一か多少小板が多いか、それが全国の積雪量トップと伝えられたのだからたまらない。いや降るとも降るとも、計測器は正確な降雪量を求めて風の影響を受けない所に設置する。ところが現実には無風でシンシンと雪が積もるなど、殆どありえない。風が吹く、吹雪になる、そして窪地に雪を吹き寄せる、テレビは積雪１．８メートルと報道しても現実には２－３メートルにも及ぶところがある、それが雪国の常識なのだ。都会人には理解出来ないだろうが、それが現実、生きのこるためには、それに耐えなければならない。今年も日本の雪国では死亡事故が発生しニュースとして報道された。小板でも何年か前、屋根からの落雪で死亡事故が発生した。中国山地では毎年のように雪による死亡事故が発生するのだ。

しかし根底に横たわる雪国の危険を報道するマスコミは少ない。

国が豊かになり除雪の機械も整備されて国道を初めとして主要道路、生活道路はほぼ完全に除雪されるが、天候までは管理されていないから、無謀な都会人の事故は絶えない。私が交通事故にあったのも対向車が橋の上の雪解け水の凍結で滑走して衝突されたのだ。雪国の常識は都会人の非常識で、事故が多発している。しかも、この地帯はスキー場のメッカ、都会から雪を求めて訪れる人達が凍結した道路を高速でとばす、その間を走る地元人の恐怖は少々ではない、それが１日も早い春を期待するのだ。

例年２月１０ 日を過ぎると冬の表情が衰えて春の匂いが漂ってくるものだが、今年はその兆しもなく、どこまで続く厳寒かという寒さが続いたんだ。やっとお天道様は春を覚えていたか思

える日和は３月になってから、桜前線の話が間近になってからだから、今年のお天気は意地が悪い。が、雪ではなくて雨が降るとは、さすがの大雪も少しばかり姿勢を変えた。そして溜まりに溜まった牧場の仕事が蟻の歩みではあるが進み始めた。しかし、残念なことに老齢で体力低下の私は気ばかりが焦る。春きたりなばも大変である。そして季節が見浦牧場にプラスの日和であることを祈るのである。

３月に入って溜まりに溜まった仕事の解決に追いまくられる。掃除が出来なかった畜舎は汚れ放題、朝から晩までショベルが２台とダンプが動いても解決に程遠い。おまけに孫たちの進学、進級で亮子君は仕事のやり繰りと子供の学校行事で目の回る忙しさだ。そして老人夫婦は痛い足を引きずっての作業で能力は激減、近来にない危機的な状態は続いている。幸い牛価が高値安定で何とか経営は維持してはいるのだが、今年も多難な１年が始まっている。

2018.3.26 見浦哲弥

佐田先生(2017/7/15)

中国新聞の記者だった島津さんから例年どおり年賀状がきた。その余白に佐田さんが亡くなったと記してあった。もう３、４０年にもなるか、彼もまた、見浦牧場に影響を及ぼした人の一人なんだ。今日はその思い出を辿ってみよう。

佐田先生は私より少し先輩、広島県畜産課の技術職員、私にとって、中島先生、榎野先生に次ぐ大切な指導者だった。当時広島県は日本和牛の３大産地の評価を守るために懸命だった。貴方も聞いたことがあるかもしれない。広島の神石牛は日本の３大名牛の一つだったのだ。比較的小柄ながら飼いやすくて力がある、しかも肉質が良いと、専門家でその名を知らない人はいなかった。しかし、時代は役牛の時代から肉専門の肉牛の時代に移り変わりの時、広島県の畜産関係の専門家はいかに対応するかと試行錯誤の時だったのだ。

増体とロースの大きさとサシが先行する神戸牛に追いつけ追い越せと走り始めた各地方の和牛作り、改良の基本は優秀な種雄牛の作出にあると懸命だった。

当時、広島にも名牛はいた。第４２深川号、柿乃木号、とか、各県にも知られていた種雄牛がいたが、肉用牛としては物足りない。県の畜産技術陣が総力を上げて新しい種牡の生産に全力を上げていた。一日増体量然り、枝肉重量然り、勿論、Ａ５と呼ばれたサシ（脂の入り方）しかり、その努力の結果、神石で”３１青滝号”、比婆で”乙社６号”、の種牡が生産されたんだ。

ところが見浦牧場が目指したのは放牧一貫経営、出来るだけ自然に従って、自然を利用しながら和牛を生産し、経済的に成り立つ経営を目指したのだから、地域と経営方式にマッチした牛群を作らなければならない。ところが見浦方式で耐えうる牛だけを選抜して残していったら、牛が小さくなったと指摘されたんだ、飼い方が間違ってはいないかと。

当時は自分たちの技術を補うために折があれば見学に出かけていた。大きな牧場から小さな農家まで、牛がいれば覗いてみる、人がいれば話してみる、どこかに私達の求めている考え方が眠っているのではないかと。

ある時、八幡（北広島町）の向こうの山頂に弥畝山放牧場があると聞いて訪ねてみた。島根県の県営放牧場、弥畝山の山頂を中心に、中国山地の山脈に沿う形で峰が走り、北に日本海が見え、南に県境の八幡の峰々を眺める、なだらかな山頂を中心に草原が広がって面積４００ヘクタール、素晴らしい景観だった。

しかし、それより驚いたのは放牧されていた島根の和牛だった。荒削りの感じはするものの胴伸びの良い大型の牛、斜面の草地を疾走する姿には自然を感じたんだ。これはと注目すると骨格が頑丈なんだ。広島の牛に比べると荒削りではあるが胴伸びが良くて足が太い、見浦の牛に不足していたのは、これだと思ったね。

そこで県外の種雄牛を探したんだ。そして鳥取の気高牛にたどり着いたんだ。そして入手可能な精液、気高号の子供の長尾号を交配したんだ。広島県の方針に反してね。当時は他県の種雄牛の利用はタブーとの暗黙の規則があって、担当の佐田先生が驚いた。県は青滝号と乙社号の優秀な種雄牛を奨励しているのに、浮気をするのは何事かとね。見浦牧場の生産する肉牛の肉

に問題が出て広島の種雄牛を見限ったかと屠場まで肉質を確かめに来た。そして問題はないと安心して帰られたのだが、私は県外の種雄牛の利用を止めなかった。そのため佐田先生との関係は急激に悪化したんだ。

再会したのは、それから何十年後、小板にある古民家喫茶で会合があって退職して自由人になった佐田さんが出席していた。たまたま近くでトラクター作業をしていて顔をあわせた。「話にきなさいや」と誘ったのだが「また今度」との返事、それが最後になった。熱心で優秀な技術者だった彼だが、未熟とはいえ経営者の私と長期の展望で差が出来たのを気にしていたのだと思う。あれからの長い時間、鳥取の気高号の遺伝子を導入して牛の改良をするのは、兵庫の神戸牛を除いて全国の常識になったのだから。
県の職員だった島津さんからの年賀状に佐田先生の訃報が記されていたのは、佐田先生が島津さんとの間で見浦牧場が話題になっていた証拠、腹を割って昔話をしたかったな。

同じ、榎野先生の門下生？として昔を偲ぶ時間が欲しかったが、今はただ佐田さんの冥福を祈るのみである。

2017.7.15　見浦哲弥

高齢者講習(2017/11/10)

高齢者講習なる制度がある。自動車の運転免許の更新に関する制度である。確か７５歳以上になると運転免許の更新は、この講習を受けた後でないと受けられない。時代は長寿時代、高齢者が激増して、老化が進行した運転手がハンドルを握る、おまけに高齢者に多いアルツハイマー病を始めとして記憶力の低下などの認知症を発症する割合がふえて、これに起因する交通事故が多発し始めた。前進と後進のレバーの位置を間違えてお店に突っ込んだり、ブレーキとアクセルのペダルの踏み違いで人身事故を起こしたりと、老人の痴呆絡みのニュースが多い。そこで高齢者の免許更新に新しい歯止めが設けられたと言う次第である。

私も年相応に物忘れが進行中、特に記憶する能力の低下が著しい。トラクターのレバー操作など昨日までは考えることなく出来たのに、一瞬、どうだったかと迷う。もっとも先輩の友人は田圃の中でレバー操作の記憶が消えてトラクターが立ち往生、隣家に故障したと駆け込んで笑い話になった。確かその時点の年齢は今の私より１０歳は下だった。そんな事もあって現在の私の悩みを本気で聞いてくれる人はいない。が、私も確実に人生の終わりに近づきつつある。

現在は３月から施行された、痴呆の選別検査なるものにパスしないと高齢者講習も受けられなくなった。そして、その講習を受けるために１１月１日に沼田自動車学校に出向いた。

久方ぶりの高速道路、単独運転は慣れるまで少々不安だったが、長い運転歴で通い慣れた道、思い出すにつれて快調に走る。もっとも制限速度を確実に守る運転は後続車の追い越しの連続、これのほうが怖かったね。指定時間の２時間前に到着、時間を持て余す。なにしろ当方は足が痛い、歩き回って時間を潰すの手段が取れないので閉口したね。

指定時間に教室に向かう。試験官の職員は顔なじみの人、彼も老人になっていた。受験者約２０人、全員が私より若いと思われる人達、くたびれかたも様々である。席が隣の男性「オジサンなんぼの」「８６よ」「俺より３つ上か」と。

テストは例によって１６通りのイラストが幾つ覚えられるかの試験、正確な現在の日付、曜日、時間、住所、氏名、電話番号、年齢、の記入、指示された時間を正確に時計の文字盤に書いて表現するの３点。ところが意地が悪いことに問題を見せた後に、別の話題を持ち出して関心をはぐらかしてから答案用紙に記入させると来る。記憶力の低下は個人ごとに異なるが、最初のイラストの試験が老人には一番つらい。示された時は確実に覚えたと思っていても、間に他のことが耳に入ると見事に記憶が消える。懸命に思い出そうとするが何のイラストだったか思い出せない。若い諸君には想像もできない老人の世界なのである。

それに比較すると他の２点は私には覚えやすい。もっとも電話番号は多少の不安があるが、時計の文字盤は時間から時間の毎日の仕事のつながりで、こればかりは自信がある。お隣の紳士君は「覚えたと思ったのにイラストは３しか書けなかった」と、そして「家の周りしか自動車に乗らないのに難しいことになって」と憤慨。「あが一言いいんさんな、お互いこの年まで、この元気は有り難いんで」と話すと「そがーいや、そうじゃな」と機嫌をなおして「次の講習は一緒ならええですのー」と。

そして１週間後だという公安委員会からの通知を待ったんだ。

先日、その通知が来た。成績は８０点、７５点以上は正常と判断されて、次の高齢者講習の費用は３０００円安い。摘要に「正常です、痴呆症ではありません」ときた。早速、次の高齢者講習を申込んだのは言うまでもない。これで後三年はトラックに乗れる。今日は、まだ元気だという話。

2017.11.10 見浦哲弥

ショベルが壊れた(2018/2/2)

2018.2.2　ミニショベルが壊れた。彼の名前は三菱ＷＳ２００、島根の店頭で売れないで８年店晒しされた機械である。勿論、８年も年式が古いとくればすでに旧型、時は４気筒エンジンの時代に変化していたが、これは２気筒、しかし貧乏な私達は型式や年式にクレームをつける身分ではない、仕事をこなしてくれれば文句は言わないと、大枚８０万円を支払って購入したんだ。購入して間もなくシリンダーにヒビが入ってクレーム、しかし、良心的なセールスが修理に奔走してくれて、それからは快調に見浦牧場を走り回ってくれた。導入時に８００時間ぐらいだったメータは数年もたたない内に３０００時間を越え、メーターケーブルが切れてから十数年、この機械だけは動かなかった日がなかったから、もう１万時間は遥かに越えたのでは。その機械が遂に黒煙を上げて終焉した、もっとも活躍を必要としている時期にね。

２０年余り過酷な使われ方をされた機械である。終焉があるのはやむを得ないが、時期が悪すぎる。新たに導入するには昨年末からの出費で見浦牧場は目下金欠状態でやり繰りを考えると頭痛がする、が、仕事は待ってくれない。老人の頭脳に命令をして考えるのだが、なかなか良案が生まれない。錆びついた頭脳がやっと出した結論は、予備の運搬用ミニショベルのバケツを修理してさしあたって代用する案だ。どう考えても他に良案は浮かばなかった。底の抜けたバケッツの修理は大改造の大仕事だが、いくら私が老人でも１週間あれば目鼻が付くと踏んだのだが・・・・・。

どこで迷い込んだのかは知らないが、８７歳になる老翁にまだ仕事が押し寄せてくる。幸せなのか、不幸せなのか、私は幸せだと信じることにしているが。

2018.2.2　見浦哲弥

マイストーブ(2018/1/9)

我が事務所に年末から登場した手作りストーブは、それまで活躍していたホンマの軽便ストーブと違って個性の強いストーブである。

我が小板は山の中、燃料の薪は至る所無尽蔵にある。昔は唯一の暖房が囲炉裏で見浦の前身大畠でも大きな囲炉裏に火が絶えたことがなかった。そして土間には天井まで届く薪の山、それが勤勉の証だった。ところが囲炉裏を心地よく燃やすためには乾いた薪が条件、それもマキダッポウとよばれるナラノキが最高、燃えて真っ赤になったオキ（オキ）の上でトロトロと燃える薪の灯りは懐かしい。

ところが我が大畠は素人百姓、雪が降るころに薪が山積みになっている、そんな光景は夢のまた夢。燃えるものならなんでも薪、松あり、杉あり、廃材あり、生木あり。訪ねてきた村人が「ゴッツイ木でがんすの」といったのは、今では理解できる、小さく割る技術がないと呆れていたんだ。ただし煙は人一倍、多量に発生する、茅屋根には都合が良かったとはやせ我慢の弁。

それが炭焼きを始めて副産物の粉炭が多量に発生、囲炉裏に投入され大コタツに変身、潜り込めば冬でも天国と変化した。やがて巨大なボロ家に雨漏りが大発生、修理もままならず小さな住居に建て替えた、それが６０何年前である。

暖房は掘りこたつと炊事場の竈（かまど）、それでも家に隙間風が入らないだけ温かったね。やがて時代は変遷して石油ストーブなる商品が出現、我が家でも導入、機器の進化に伴って様々な形の機器を導入し、気がつけば日本は石油ドップリの世界に移住していた。石油は水より安いといわれた時代を通り越して、石油代が家計にずっしりと響くようになった、原油価格の高騰である。勿論、便利が良いということは費用の増大を伴う、しかし人間は一度快適を知ると、後戻りには多大の努力が必要だ。友人に金がなくてとの愚痴ばかりの人間がいた、あまりの羅列に、つい皮肉が出た「まさか君の家は“お風呂が湧きました”とアナウンスするロボット風呂ではあるまいの」と聞いたんだ、彼返事して曰く「そうよ風呂はロボット風呂よ」、「それじゃー、お金が足らんのも仕方がないの」。都会の華やかさを追って収入に関係なく流行を追う、小板も例外ではありませんでした。

便利と言うものはただではやってこない、知恵を絞って如何により良い生活するか、貧乏な私達も他人事ではなかったのです。

小板にも別荘がやってきました。いずれも大小はあるものの都会での成功者、ログハウスあり、北欧風のロッジあり、貧乏な住民には無縁の建物が増え始めました。そして新来の都会人の共通点は住居の一角にストーブを据えつけること、それも何十万円もする北欧製の薪ストーブをね。窓外の雪景色と赤々と燃える薪ストーブの対称は都会人のステータス、この風景は貧乏人には異次元の世界でした。

ところがあるログハウスの住人が「このストーブでも温かい」と紹介されたのがホンマ製作所の簡易ストーブ、ブリキ細工のような薄い鉄板製ながらよく燃え、安いときた。５０００円でお釣りが来る、早速飛びついたね。乾いた薪でないとよく燃えない、煙突に煤が溜まりやすい、など欠点はあるものの我が家の事務所には欠かせない道具になったんだ。ところが２―３年で

錆びて穴が開く、錆びにくいステンレス製の同じストーブも売られていたが値段が倍額になる、踏み切れなかったね。

話は変わるが我が家は肉牛を販売する畜産農家である。雪の多い冬場は市場に出荷する肉牛が汚れやすい。対策として４０度位のお湯を沸かして洗うという方法を採用している。最初はドラム缶を半分に切った鍋にお湯を沸かしていたが、寒い冬では一大作業になる、それでも貧乏牧場は湯沸かし器を購入する資金はない、今でも思い出したくない仕事の一つだった。何年かして建材屋の友人が給湯器の故障品があるがと声をかけてくれた。新品だと何十万の機械が冬季の保守が悪くて凍結したのだとか、早速飛びついたのは言うまではない。自動運転の部分は手動で、バーナーは風呂用を利用して、幸いメーカー製でタンクの部分は大きな問題がなくて、このお陰でどんなに助かったことか。

何年かすぎて北広島町の建材屋にコンパネを買いにいったんだ。帰ろうとしたら軽トラが中古の風呂用ボイラーを積んでいる。「これをどうしんさるんか」と聞いたんだ。運転手曰く「ボイラーの調子が悪いと言うで、取り替えてきたんだ」「その古いのはどうするの」と聞くと「スクラップ屋へ持って行く」しめたと思いましたね、「儂に売ってってくれろ」「売ってもいいが足代くらいほしいね」「なんぼね」「１０００円」やったと思いましたね。もっともスクラップにと乱暴に取り外した機械、動くか、ゴミかの自信はありませんでしたが、持ち帰って経営主の和弥に見せると動くかもしれんのと取り組んで、「親父動いたで」と直してくれた時は嬉しかったね。以来、牛を洗う時のお湯の心配は見浦牧場からはなくなったんです。

さて今まで使っていた湯沸かしボイラーはお役目御免となりました。ところが古いとはいえ山口のボイラー専門工場の製品、頑丈な作りで何とか再利用できないか頭を絞ったのです。

昨年末、ストーブへの転用を思いつきました。取り掛かって分解したら外側の鉄板が頑丈、これを利用することにしました。燃焼室と 1/3 の予燃焼室を溶接で作り上げ、下部に煙突の取り付け口と反対側に焚き口と空気孔をつけて完了、天井は 2/3 は開口できる様にしたのです。早速、事務所に据え付けて試運転、火力も強く実用になりましたが、燃え方に癖があって慣れるまでが大変でした。薪は小さく割らなくても燃えるし、着火さえすれば乾いていなくても燃えてくれる、そんな個性の強いストーブでした。ただ少々大食い、薪を選ばない特徴は、雪が消えたら山の整理に力を入れろと教えています。

たかが廃品利用のマイストーブ、ところが着火の方法から薪の燃え方まで様々な対応を要求する、これからも新しい発見が出てくるかもしれない、老人の頭の体操には最高の仕事でしたね。

そして思ったことは、老人だと後ろ向きにならないで、可能と思われることには、挑戦してゆく大切な教えでした。

2018.1.9　見浦哲弥

意地に候(2018/3/9)

私は決して意志強固と誇れる人間ではない、それが５０年余りも見浦牧場を続けてこられたのは家内の協力は勿論だが、様々な人のお陰だと思っている。

当然のことだと思っていたのだが、先日の”食べる通信”の記事を読み返すと、我ながら、よくも頑張ったと呆れている。米作りといい、しいたけ栽培といい、牧場経営といい、目標を定めたらひたすらに追い求める、愚直に、熱心に。そんなときには恥とか体裁などは考えたことがなかった。当然のことだと信じて歩んだのだが、考えてみれば少々異常である。

若者は先輩に服従し、集落の掟を守って、集落のボスの決定には無条件で従う、悪しき伝統は敗戦という日本国はじまっての大転換が起きても山奥の小板では無縁の話だった。

その絶対の権威に公然と歯向かったのだから、昔ながらのボス様のご機嫌が良いわけがない、それが貧乏人の小倅なら一捻りで潰すところだが、落ちぶれたとはいえ見浦先生の子供、真正面から手が出せない、ボスの年寄りたちが切歯扼腕（せっしやくわん：歯ぎしり・腕握りして悔しがること）した気持ちは自分が年寄りの仲間入りをして理解できるようになった。

しかし、時代は民主主義の時代、どんなにあらがってもが逆には回らない。理解の外のボス連中が見浦のあり方を認めないで無視の方針を取ったのは止むを得なかったのか。一方少数ながらも私には支持者がいた。しかし、その大部分は力のない底辺の人達だったが「見浦さんが言うのだけー」の信頼は有り難く強い支えだった。お陰で集落の中でも、集落の外でも崩れることはなかった。

しかし、繰り返すが集団の中での完全無視は辛い環境である。地域外で有力な理解者を持って居ても、日常の生活の場での悪口雑言、もしくは無視は集団で暮らす習性の人間には思いの外むごい環境なのだ。その中で何とか自分を支えきったのだから、私達は案外意思が強いのか、もしくは無神経なのか？。ところが振り返れば何度も崩れそうになったし、諦めかけた時間が蘇る、支えたのは「意地で候」の侍魂だったのかもしれない。

長い年月を経て片手で数える人数に減った住民の中では見浦を無視しては集落が成立しなくなった。そして表面に出ることを極力嫌う生き方に絶大な？信頼が寄せられていると感じることもある。力の無くなった小板ではあるが、生き残りの可能性は周辺集落よりは高い。しかし、この人数では集落の発展は望むべくもないが、何時の日か蘇る日もあるかと、微かな希望を持って今日も生きているのだ。

2018.3.9 見浦哲弥

前に深入、後ろに苅尾(2018/1/22)

島津邦弘先生の著書”山里からの伝言に”見浦牧場”の一文がある。
西中国山地の一角、優美な山容を見せる臥龍山（苅尾山）と深入山の間に開けた、標高７００メートルの高原、見浦牧場がその舞台である，と紹介されている。その見浦牧場から見える深入山を住民は前深入と呼ぶ。主峰の深入の頂は見えないがとんがり帽子の主峰と東側の中腹のコブは絶妙なバランスで優しい深入山を演出してくれる。西側の稜線は主峰の深入山と重なってイデガ谷の荒々しさは隠れて一瞬火山であることを忘れることが出来る。しかし国道１９１号線の道戦峠から振り返ると山容が一変する。イデガ谷はまさしく溶岩の流れた跡であつた。

前深入山と深入山の間には半径が約５００メートルぐらいの丸い草地がある。火山と知ってから眺めると、これが火口跡だと理解できる。もっとも現在はイデガ谷の反対側に小さなキビレ（谷）があって火口の水は松原側に流出する。集落松原の好意で小板集落の簡易水道の水源として利用させてもらっている。

国道１９１号線を北上して益田市に向かう。安芸太田町を経て虫木峠のトンネルを抜け松原交差点を左折して約３キロ、樹間から草原の丸い深入山の山頂が見えてくる。草原は昔の放牧場の跡である。春なら草原の丸みの山容は安らぎを感じさせる。ふもとに建つ”いこいの村　広島”を過ぎて標高８２０メートルの深入峠に差し掛かる。あじさいロードとよばれる国道は、花盛りには都会人でなくとも自然の豊かさに感激する。これが地元の若者流出の一因だった事実を知る私は複雑な思いである。また、冬季はここ深入峠が、１９１号線では最高の積雪になる。４キロ益田寄りの道戦峠は標高８６０メートルと４０メートルも高いのに積雪はわずかだが少ない。従って深入峠を越えられたら道戦峠も県境の峠もなんとか通れる、地元民しか知らない知恵である。

閑話休題、国道が付け替えられた結果、旧国道と現国道で深入山を一周できるようになった。そして深入山ウォーキングと称して大会が開催される。三々五々カラフルな都会人の流れは一時、中国山地の過疎を忘れさせる。そして独立峰深入山は有名？になった。

苅尾山（臥龍山）は見浦牧場の北面に見える。深入山と違って褶曲運動で隆起した連山である。頂上は平で深入山より標高が低く見えるが、実際は深入山より高い。穏やかな山容で全山を覆った森林は心を癒やす穏やかな優しさを伝えてくる。小板側からは見えないが山頂近くまで自動車道が整備されて登山は易しい。ところが１０数年になるか益田の女子学生惨殺の舞台になって住民の間に優しい山容とともに忌まわしい記憶が付随するようになった。しかし、訪れる人には優しい小板のイメージを膨らませてくれる名山である。

褶曲で出来た苅尾山は多くの雨水を吸収して、いたるところに湧き水を供給する。溶岩で水不足だった小板の中で絶えることのなかった湧き水３箇所は深入山の溶岩が及んでいないところ、苅尾山の褶曲岩盤の端だった。

ともあれ友人のＳ君曰く、「小板はええーところで。深入と苅尾が見えて、季節を味わえてのー」と、同感である。

2018.1.22　見浦哲弥

足跡(2018/3/11)

雪国の朝は足跡から始まる。と言っても人間の足跡ではない、動物たちの足跡である。

新雪に刻まれた足跡は雪国の少年の空想をかき立てた。二つ爪の足跡は猪、２つ揃えて並べるのはうさぎ君、５つ爪痕を残すのは狐君と狸君と貂（てん）の皆さん、足跡の大きさで大体の種類がわかる。油断がならないのが５本爪の大きな足跡、熊君である。冬は冬眠しているはずだから滅多には出会うことのない足跡だが秋口の脂の蓄積が少なかった個体は雪があるのに出張してくる。これは空腹で気が立っているから危険この上もない。昨年の冬の終わりに猪の餌場を荒らしていた。その足跡は山里は平和ばかりではないぞと教えていた。

とはいえ厳寒の早朝の足跡は寒さの中での生物の生き様を伝えてくる。静かな凍りついた空気の中にも生き物の生存競争を伝えてくる。そのささやかな証の一つが足跡である。

しかし、住民が減るに従って足跡も少なくなった。住民の生活残渣も彼等の生き残りを助けていた証だったのかもしれない。ともあれ私の子供時代に乱舞していたウサギの足跡は少なくなった。代わって狸君が増えたようだ。栄養失調で倒れる子狸が例年３―５頭にのぼる。田圃が１/１０に減ってカエルや蛇などが激減しているせいで動物性タンパク質の不足が原因らしい。牛の餌は植物性のタンパク質のみだから、いくら盗み食いをしても体力は回復しない。そして死、生きるということは野生でも厳しい。昔は動物の死骸はキツネくんの貴重な餌で人目につくことはなかったのだが、最近はその掃除屋さんの減少で死体の処理は人間の仕事ということに相成った。住民の減少は動物の足跡にも影響を与えている。

2018.3.11 見浦哲弥

母の記憶(2018/3/24)

若くして(４４歳）世を去った母の記憶は５人の兄妹の中で私が一番多い。振り返ると私の人生は厳しかったが、引き換えに母の思い出も多い。それは私の幸せの一つだった。でも同じ血を分けた兄妹にその記憶を伝えることは私の義務の一つだと思いついて、この拙い文章を書くことにしたんだ。

昭和１６年､三国から小板に帰った日のことから始めよう｡あれは確か４月の１６日？だった。八幡まで通っていた小さなバスは、松原止まりになっていた。秋には太平洋戦争が始まる年だからガソリンの備蓄が始まっていたのか。

トーチャンがヒロ子さんをカーチャンが乳飲み子だったサチ子さん背負って、男の子もそれぞれに荷物を背負ってね。小春日和の温かい日だった。松原の停留所の奈良津商店の前から３キロほど歩いてオシロイ谷の近道の入り口の山桜が満開だったのを覚えている、しかし記憶はそこまで、急な近道は辛かったんだろうね。

大畠の家は茅葺き屋根の大な家でね。囲炉裏端の大部屋に１０ワットの裸電球が一つ、これには親父も驚いて臨時灯を何箇所かにつけたのだが、便所が大変だった。ダヤとよばれた畜舎が囲炉裏端の部屋と壁一つで隣り合う内ダヤとよばれる方式で、そのダヤを取り巻くように小便所と大便所が作られていてね。大きな木桶が埋められてその上に厚板が並べてある、その隙間に用をたす方式だから怖かったね。おまけに、そこには電灯がなかったから、行灯（あんどん）のロウソクに火をつけて恐る恐るゆく。落っこちる危険があったからね、とても一人で行ける代物ではなかった。カナダのサチ子さんも「あれは怖かった」と、恐怖だった。

そんな前時代な環境の中での生活が始まったんだ。水は横穴からでる溜まり水、大木を刻み込んだ水槽に時々ナメクジが来訪してね。煮炊きはガスでなくて囲炉裏の自在鉤に掛けられた鉄鍋と煙突のない竈（かまど）で煙が天井から屋根裏に這い上がる、これが茅葺屋根を長持ちさせている秘訣らしい（福井では都市ガスがあった)。壁１枚で牛馬と同居の劣悪な環境、おまけに蚤君とハエ君とは遠慮なく人間に襲いかかる、除虫菊の殺虫剤を物ともせずにね。おかげでノミ取りの名人にはなったが、その劣悪な環境は都会人のカーちゃんには厳しすぎたんだ。それでも目を閉じると重いダオケ（木造の餌桶）を引きずって牛に餌をやっていた姿が目に浮かぶ。辛かったろうと思えるようになったのは牧場を初めてからだ。子供だった私は懸命に働くカーちゃんの姿だけが記憶に残っている。

確か稲刈りが終わった頃、「首の所にグリグリが出来たのよ」と言ったのを覚えている。「痛くはないんだけど」と話していたっけ。秋口の天候が厳しくなった頃だったから「春になったら病院に行こう」と。

翌年、４月の温かい日に隣の雄鹿原病院に行くとて、お供を申し付けられた。カーちゃんがサチ子さんをおぶって、私がヒロ子ちゃんの手を引いて、一日がかりで雄鹿原病院に行った。１０キロ足らずの山道だったが峠が２つあってね、大変だった。

確か、ここでは病名の診断も治療もできない、もっと大きな病院に行ってほしいと言われたとか。帰り道で話した地元のおばあさんに「朝鮮から何時きなさった、日本語が旨い」と言われ

て憤慨していたっけ。この地方では福井の方言は珍く、私達も学校で言葉がおかしいとイジメられたから。

ようやく、田植えが済んで広島の県病院（だったと記憶しているが）へ行ったんだ。その頃は病気の進行が本人にも判って行く気になったんだと思う。

慣れない百姓で手の離せない親父さんは、私にお供を命じたんだ。勿論、松原までは歩き、バス、市内電車、乗り継いで行った病院の診断は「付添はきているのか」と聞かれて「息子が来てます」と言ったとか、「子供では話にならない、大人をよこしなさい」と言われたと。話を聞いた親父どんが飛んで行って病状を聞いて、もっと大きな病院でなくてはと、親戚の東京の山村病院に連れて行ったんだ。ところが診察をした院長が親父さんを叱ったという。こんなに病状が進行している人間を東京まで連れてくるとは非常識だとね。すぐ連れて帰れ、途中で倒れるかもしれないが一刻を争うとね。その予言どおり広島で動けなくなって、昔、お世話をした岡本さんの二部屋の小さな家を借りて寝付いたんだ。

私は覚えてないがヒロ子ちゃんとサチ子ちゃんは福井の野村に預けられた。叔母ちゃんが迎えに来たのだと思うけれどこの部分は記憶がない。男の子３人は学校があるからと、藤政の婆さまに飯炊きを頼んであって食事の心配はなかったが、オカズが毎日高菜の煮付けばかりで閉口した。高菜の葉っぱを下からもいで煮付けるだけ。でも兄弟３人だけの生活は心細かったね。何日かして戸河内の若本のタクシーが親父さんに頼まれたと迎えに来た。近道をするとてバスのルートとは違う道を走る車に不安で肝を冷やしたのを覚えている、おまけにスペアタイヤを落として探しにもどるハプニングまであってね。それでも広島でトーチャンとカーチャンの顔をみて安心したんだが。

衰弱したカーチャンに少しでも栄養になるものを思っても戦争で自由に物が買えない時代、岡本おばさんが「まだ広島駅で牛乳の立売がある」と言うので達ちゃんと買いに行ったんだ。勿論、数に制限があるから行列に並んでね。うまく行ったら一本づつでカーチャンに２本飲ませることができる。毎朝、にきっさんとよばれた広島東照宮の前の道を広島駅に通ったんだ。ある朝、怖いお兄さんが凄んできた、「お前らが並ぶけー、俺らーの取り分が減った、明日からくるな」とね。恐ろしかったけどカーチャンに飲ませる牛乳だ「はいわかりました」というわけにいゆかない。「おかーさんが死にかけているんだ、それに飲ませる牛乳だけー止めるわけにいかん」と大声で泣いてやった。達ちゃんも一緒に泣いてくれて、大人が子供二人を泣かせていると人が集まり始めて事なきを得たんだ。恐ろしかったが、それからも何日か広島駅に通ったんだ。

病気が進行して痛みに悲鳴を上げるカーチャンに親父どんが医者に「何とか痛みを止めてほしい」と願ったんだ。丁度、私が隣の部屋にいる時、医者が答えていわく、「モルヒネがあるが、それを初めたら１０日も持たない」と。

そしてモルヒネの注射が始まったんだ。痛みを感じなくなって何日目かの記憶はない。カーチャンの部屋にタッチャンと信弥さんが呼び込まれて、鮎の塩焼きを一口づつ食べさせてもらっていた。そして「仲良く暮らすのよ」と言い聞かせていた。隣の小部屋に居た手伝いの上殿のおばさんが声を殺して泣いていた。

そして私が呼ばれたんだ。小板のお爺さんが母に木彫りの仏さんを持ってゆくようにと頼まれ

たのを宗教が違うと断ったことを知っていて、「人の真心は宗教も人種も国籍も年齢も貧富も関係がないんだよ、なぜそれが判らない、情けない」と叱られた。そして人の真心がわかる人間になれと諭された。そして「兄弟仲良く」と。それが母と話した最後になった。確か夕方頃だった。翌朝、目を覚ましたらカーチャンは死んでいた。それからの記憶はない。最後に厚生館（そう覚えている）という大きな火葬場でカーチャンが大きな火炉の鉄の扉に消えた瞬間の絵が頭に残るだけ、小板であった葬式も記憶はない。

小板の葬式に来た律ちゃんおばさんが仏壇の遺骨に花を備えながら、「優しい姉だったのよ」と話してくれたのを覚えているだけ。

ヒロ子ちゃんもサチコちゃん福井から帰っていたが「カーチャンの所に帰る」と大変だったとか、「聞いてくれない」と風呂場で化粧品を壊されてねと。

それから半年後の冬に８２歳の弥三郎爺様が息を引き取った。その死に水は取ることが出来たが、それから親父さんの悪戦苦闘が始まって、大畠はどん底に走り込んだんだ。百姓素人の親父さんとカーチャンが居ないと半泣きの５人の子供達の泣き笑い人生がね、今日はここまで。

でも、県病院の帰りに道端の甘酒屋の前で「哲ちゃん、甘酒を飲もう」と言った母に、「甘酒は嫌い」と断った事が生涯、悔いとして私を苦しめた。何故一緒に甘酒を飲まなかったのだろうと、反省しきりだった。

でも兄妹５人、８０歳を越えて元気で生きている、有り難いことである。心を残して先立ったカーチャンの願いが私達を守ってくれた、そう信じている。兄妹の中で一番の不肖の兄貴だが、皆が「兄ーちゃん」と呼んでくれるのに甘えて迷惑ばかりかけて一生を終わることになった、「本当に有難う」。

2018.3.24　見浦哲弥

日々新たなり(2018/3/20)

最近は日々新たなりと痛感することが多い、とは言っても若者の時代とは違って老化の進行についてである。御年８７歳にもなると老化の進行も想像していた以上に早い、従ってこんなふうに進行するものだなと感心している。

脚力が衰えて歩行に努力が必要になり始めたのは、そう昔のことではない。その現象は慣れる時間も与えてくれないで、着実に進行してゆく。そこで「へー老人とはこんな風に終末に向かうのか」と納得しているのだ。昔のご老人はお寺さんの説教を聞いて信心さえすれば、安楽に終末が迎えられるとお寺参りだったが、無信心の私は老化とはこういうものだと日々新たに起こる現象に感心しているだけ、これが間もなく到来する終点まで止まることなく進行する。抗うすべもない老化だが、新しい体験を好奇心で受け止めてやろうと待ち構える、他人事のように。

一昨年まで何とか体力の維持にと懸命にウォーキングに励んでいた先輩の老人方を思い出す。その努力の甲斐もなく老化は進行、現在は植物人間とか、音信も聞かなくなった。そして無住となった茅葺屋根の住宅は雪の下でひっそりと朽ち始めた。今は往年の活気を偲ぶべくもない。同じ老人としての道をひたすらに歩いている私には、生きることを止めた建物の悲しみが伝わってくる。

この間まで子供であった孫たちが見る間に少年になり大人になってゆく。男の子は表情が輝き、女の子は爛漫の花が咲いたようで、遺伝子の一部が私と共通とは想像が出来ない。青春が人生最大の輝きということを、あの頃の私は理解していなかった。今考えると大変な無駄遣いをしていたのかも、というのは繰り言で、貧しかった私にもあの時代はあった、思い返すと心が痛くなることも、希望に輝いていたときも。

思い出に浸っても時は止まらない。人生を全力で走り続けた私は、温かい家族や、目をかけて頂いた素晴らしい先輩方を持てたことが最大の幸せだったと思い返しながら終末に向かっている。

歩行がだいぶ困難になりました。

2018.3.20 見浦哲弥

腕時計(2018/2/15)

牧場で作業をしていると腕時計は必須の道具である。私は日頃愛用しているカシオ腕時計が最高だと思っている。何しろ安い、軽くて長持ちがする、そのくせ時間が正確、誰でも身構えなくても買える。貧乏人にも正確な時間を贈り物としたクオーツ時計は日本人が世界に贈った最高の貢献だと思っている。
私が２０代の頃､行商のオッサンが衣料品を売り歩いてきた｡腕時計もその商品の一つだった。新品あり中古品ありだったが、その高いこと、私には高嶺の花だった。小板の青年のステータスは背広と腕時計とバイクだった。戦後間もない頃の話である。

このクオーツ時計は説明書には寿命は５年とあるが、ばらつきはあるものの７年も８年も動き続ける。寿命が尽きるのは樹脂性のバンドが先である。したがって私のデスクの中にはバンドが切れただけで時間は正確な腕時計が４個も転がっている。バンドだけを購入して取り替えればと思うのだがバンドの価格が新品の時計の６―７割もするのだから取り替える手間まで考えると、つい新品に手を出してしまう。結果、机の中で４個のバンドの切れた古時計が正確な時を刻んでいるという次第。

振り返ると世の中の進歩で様々な事柄が変わった。そして便利になり想像もつかなかったような恩恵を人間に与えた。飯炊きも、洗濯も、衣料品も、昔を偲ぶよすがもない。食品だって冷凍で腐らない、冷蔵庫には冷凍庫が付随しているから、これが当たり前だと思いこんで技術の進歩に感謝の一言もないのは如何かと思うのだが。

私の少年の頃は各家に振り子時計はあった。ネジでゼンマイを巻いて振り子の長さで速さを調節する。高級になるほど一回のねじ巻きで長い時間動き続ける。我が家の時計は三国から持ち帰った新式だった。それでも一週間しか動かなかった。ところが乾電池が動力のクオーツの電気時計になり一度の電池交換で１年以上動いた。素晴らしいと感心していたら電波時計なるものに変化して自動的に時間の遅れを調整してくれる。今や我が家の時計が”何時何分”と言ったら日本中の時計が同じ時間を示すのだ。それが当たり前だと開発した人々に感謝の思いを一片も持たないのは近代人のおごりなんだろうか？

ともあれ私の生きた短い時間の間でも、様々で素晴らしい進歩があった。６０年も７０年も年齢の違う孫達の人生ではどんな出来事が起きるのだろうかと夢を見る。しかしながら、老いた私の頭脳は未来の画像を描く想像力は､もはやない｡ただ幸せな未来であれと祈るのみである。

2018.2.15 見浦哲弥

私と秘境Ｙ部落(2016/2/6)

2008.10.3　突然アマチュア写真家が来訪、例によって牛の写真を撮らせてほしいと、老夫婦が訊ねてこられました。お二人とも高級なデジカメを持たれて。
見浦牧場に牛の写真をと来場されるプロやアマチュアの写真家は多いのですが、ご夫婦だけで写真を撮りにお出でになる方は珍しく、お聞きすると、隣部落のＹ出身で昭和３５年に集落を離れられた方とお聞きしました。
今でこそ大規模林道が開通して距離１５キロ、自動車で１５分足らずの距離ですが、従前は餅ノ木集落を過ぎ、大きな峠を越して田代集落（道上に斜面にへばりつくように６戸の農家がありました）を通りこして２０キロあまりの山道、健脚を誇る若者でも徒歩で５時間の遠い遠い集落でした。

小板は深入山の麓にある集落です。朝夕眺めるその山は子供の頃から裏庭のような身近な山、小学生の頃は何かというと深入山の登山、成人してからも深入山にあった放牧場の山焼きや牧柵の修理など何度登ったことやら、１１５３メートルの頂上から南を望めば恐羅漢山の麓から三段峡の名勝猿飛の上流にＹ部落の全景が真下に見えるのです。更に頭を右に回すと山かげに三段峡の中流から分岐して三つ滝を経て八幡川の上流、樽床と八幡の一部も見えました。

伝聞ですから正確ではありませんが、樽床もＹ集落も源平の戦いに敗れた、平家の落ち武者が隠れ住んだところとか。見浦の先祖は関が原の落ち武者と聞いていましたから関心がありました。小板と樽床は４キロしか離れていません。そんな近い集落なのに樽床から小板に移住してきたのは、家内の親元が５代前、約１５０年ほどの昔、それまでは周りの集落と交流が少なくて独特の文化を維持していました。それが特徴的だったのは言葉のアクセント、福井から帰ってきた私には小さな峠一つで大きく違う言葉は異様でした。この疑問をぶつけると父は落ち武者集落の言い伝えを話してくれました。
樽床集落の中央を流れる八幡川、それによって、二分された集落、そこにも成り立ちの影響があったのかも知れません。

Ｙ集落も平家の落人集落と聞きました、ところがＹ集落の人達には樽床のような言葉のアクセントの違いは感じられませんでした。現在は林道が通じていますが隣部落の那須にも、吉和にも大きな大きな峠がそびえていて、連絡路は急な小道と三段峡の峡谷の中の小道だけ、ここも樽床と同じ孤立集落だったのに、何故かと随分考えたものです。

そうは言っても微妙にアクセントの違いはありました。でも隣部落の樽床と違い、Ｙ集落は間に田代、餅ノ木の２部落があってＹ集落の人と接触が出来たのは成人になってから、落人部落と言うのは私の記憶違いかもしれません。

私がＹ集落に始めて足を踏み入れたのは昭和２９年、Ｙ集落が電化されて集落が喜びに沸きたっていた頃、煌々と電気がついて華やかでしたね。
それまでは交通も儘ならぬ山奥への配電線の建設に電力会社が二の足を踏んでランプ暮らしだったのです。小板、八幡、樽床は小水力発電の大佐川電気利用組合に加入、６０キロワットの小水力発電所を建設、一応の電化は出来ていましたから、未電化で満足な道路もないＹ部落は本当の秘境集落だったのです。

そこで、落差もあり水量もある横川川に発電所を作ることになったのです。ところが電気の智識のない住民が明かりほしさに闇雲に作った発電所、電力の消費のない夜中と昼間の電力はどうするかと問題が起きました。そこで夜中でも電灯を点けっぱなしにしろということに、真っ暗な山中に突如と現れる不夜城、異常な光景でした。その余剰電力を使った産業をおこす術を見つけられなくて、発電所の建設資金の返済に行きずまって町に肩代わりしてもらう羽目に、代償に広大な集落の共有林を町に引き渡した、そこからＹ部落の衰退が始まったのです。周辺の集落の崩壊より１０年以上早く始まったと記憶するのですが。

無責任の外部の人間として一言言わせて貰えば、集落から離れて行くのは資産家、インテリから、この人たちは本来は最後まで頑張るべき人たちからでした。それがまだ若かった私は異様に感じたのでした。外界の文明をより多く理解している階層から崩れたのは、老人になって理解が出来るようになりました。でも、その人たちは地域を大切にと説いたはず、そして団結することで生活を維持してきたはずの人たちから崩れたのは私には理解の外でした。

私の母方は越前の武士、娘ばかりだった長女の長男が私と言うことで幼い頃から侍の子として育てられました。辛いからと真っ先に逃げ出すなど教えのなかにはありませんでした。そんな環境で育った私だからＹ集落の崩壊は異様に見えたのかもしれません。

残った集落が３戸余りになった頃、広大な部落有林だった山林はスキー場となって登場しました。日本でも有数のパウダースノーのスキー場は有名になりましたが、旧住民は民宿やレストハウスの経営でお茶を濁す、または季節労働者として働いています。

もっとも、見浦牧場も完全に無関係ではない。餅ノ木集落とＹ集落の間の田代峠の道路残土は近辺が国定公園で捨て場がない、従って見浦牧場の谷を埋めて牧場整備に利用させてもらいました。何十年かして牧草地から三段峡の岩石が出て何故と頭をかしげる人が出ないともかぎりません。

ともあれ私の見るＹ集落は微妙に時代に乗り損ねた集落に見える。長い時の流れの中では取るに足らない出来事かもしれないが？

2016.2.6　見浦哲弥

熱中症で倒れる(2018/8/12)

2018.8.9 熱中症で倒れた。7 月 7 日の大豪雨の次は連続の猛暑がやってきた。1 ヶ月の間に 1 日だけ雨が降っただけ、それも少雨だったんだ。おかげで草刈りの方ははかどった。草は伸びないが、刈り取った草は何の苦労もなく干し草に仕上がる。気温は 35 度をこす毎日、テレビは最高 40 度を越したと報道する始末、そして熱中症対策に水分と塩分を補給するようにと連日訴えた。

もちろん、毎日のトラクター作業、ペットボトルに塩を添加した水を持ち歩いて補給はしたのだが、87 歳の年齢を忘れていた。前回と違って体が水分を受け付けない。意識して飲水するのだが食欲が減る。それでも好天では草刈り作業をやめるわけにはゆかない。2-3 時間もトラクターに乗り続けると頭がボーッとしてくる。それでもと頑張って前日に全草地の刈り取りと集草を終えてホッとしてみたら体調がおかしい、まともに歩けない。歩行が少しづつ困難になるのは老化のせいだと思い込んで気にしていなかっのだが、今日は急に酷くなったなと独り合点をしたのだが、これが熱中症の症状だとは気が付かなかった。そのうちにフラフラし始め気がついた。その様子を涼子くんも気がついた。体温を測られたら 39 度を越していて大騒ぎになる。もうその時は思考力はゼロ、ただ辛いだけ。車を猛スピードで飛ばす涼子くんの運転するトラックで病院へ。意識はあるのだが、ただ辛いだけ。幸い渡辺医師がまだ病院にいて、早速点滴が始まって 500 ミリグラムの 1/2 位が体内に
入った頃から意識が正常になり始めた。しかし点滴終了後も足のもつれと思考力が正常には回復しない。ただ楽になって、頭の中にあった厚い霞が少し消えた感じはしたが、体力は戻らなかった。

もちろん、翌日は休養、考えてみると今年になって丸々仕事を休んだのは初めてだった。
長年の労働にも耐えてきた自信が俺だけはとの過信があった。大いに反省している。
しかし、熱中症が最初に脳からダメージを与えてくるとは知らなかった。これでは一人暮らしの老人などは熱中症、即人生の終焉と言うことになる。症状が現れる前の対策がいかに大切かということを、もっと周知しなければ思ったんだ。
ともあれ、命にかかわる大切な知識の一つを理解した出来事だった。

2018.8.12 見浦哲弥

遠い道(2018/8/18)

長い遠い道でした。恩師中島先生との出会いから 60 年近くの時間が経ちました。30 前の世間知らずの青年が挑戦した和牛の新しい飼育経営、無謀とも思える伝統の飼育方式に挑戦して悪戦苦闘、それがようやく微かな光が見えてきました。

昨年の G7 の外相会議の晩餐会の牛肉が見浦牧場の牛肉と聞いて驚いたのが最初で、広島牛のブランド「元就牛」の一角が見浦牛と聞いて、よくもここまで歩けたものだと感心しています。

私はお金や出世には縁がなかったものの家族には恵まれました。長男が都市生活を選んで牧場経営から遠ざかったとき、一番年下の次男が進学を諦めて牧場に帰ってくれました。その彼に彼女の亮子君がついてきてくれて、孫の男の子が 3 人います。過疎で崩壊している中国山地で理想の形の家族構成、これは自然の中で懸命に生きた私達夫婦に天からのご褒美と感謝している毎日です。

若夫婦は、あれから 30 年あまり牧場の原動力として頑張ってくれました。私と彼等とは成長した時代と教育が違います。従って意見が必ずしも同じではありませんが、考え方の基本は同じです。即ち見浦牧場の基本”自然は教師、動物は友、私は考え学ぶことで人間である”を理解し実践している農業者です。激変する日本の山村で探し当てた日本農業の再生の後継者、彼等を得たことが私の最大の成果だったのです。

物差しが同じで目標が同じなら、たどる道筋が同じでなくても、たどり着く目的地は同じ、役割の終わった老人の口出すところではありません。当たり前のことです。ところが私が見た多くの先輩たちの中には目標だけでなく、過程までも親を見習えと強制して後継者を都会に追いやった。農村崩壊の原因の一つには老人たちの無理解が一因だったのかも。

とは言え農村の崩壊を自然の流れと認めるわけには行きません。都会は食料、原料を消費するところ、生産するところではないからです。輸入をすれば事足りると貴方は思っているのかもしれませんが、世界が混乱すればすべてを国外に依存することが、どんなに危険なことか、先の大戦でその恐ろしさを嫌というほど味わった私には恐怖すら覚えるのです。全部を自給せよとは言わないが 50-60%の自給率を維持することは最低ラインだと思うのです。

そのための農村崩壊を防ぐには知識だけを詰め込む学校教育だけでは完成しない。実地に農民と接し、自然の中で共に生活して、何が彼等を支えているのかを学ばせなくてはならないと私は考えています。自然の真理を伝える、理解をさせる、都会生活では得ることが出来ない理を体験してもらうことです。

実際の農村の中に生活し、作業を体験し、先達の農民と議論し、自分の考えを修正し発展させてゆく、それがこの狭い日本という国が生き残る基礎の一部だと思っています。都市が発展し、工業が先進国となり、教育が高度化しても、それは日本という国の基礎の全部ではないのです。国が発展すると言うことは建物の重量が増すということ、基礎の一部にでも脆弱な箇所があれば、そこから崩壊するのです。

我が家には小学校、中学校、高校と 3 人の孫がいて、その教科書が高度化して、教育内容も進

化が伺えます。しかし何か大切なことが欠けている、その一つが生産現場への知識だと思っています。

敗戦でゼロからの復興を日本の片隅からとはいえ見つめてきた老人のささやかな意見、貴方に届いてくれればと思っています。

2018.8.18 見浦哲弥

私の本(2017 年 1 月)

2017 年 1 月、 ”ひろしま食べる通信”が取材の協力の謝礼として私の文章を小冊子にしてくれた。読み返してみると少々立派過ぎる。私も普通の人間で、裏切られたり運が悪かったりは一度や二度ではない、小人の常として不運を嘆き、他人を恨んだこともあったのに、前向きの私の美点?だけを書き並べてあると面映い。さて何冊かある本を誰に贈ろうかと思い悩む。折角の”ひろしま食べる通信"の好意が店晒しになって無駄になるのもと心が痛む。

先日、芸北運送の娘さんに贈呈した。本の中の”素直すぎる貴方に”の中に前社長との出会いが記録したあるからだ。どのような反応を示されるかは判らないが、あの出会いが芸北運送の発展の要素の一つだと私は解釈しているから、心を残して世を去った前社長に私のささやかな贈り物として、娘さんがそれを理解して父君に胸を張って報告ができたらと 40 キロ離れた彼の空に思いを馳せる。

もう一冊は青原木材の専務に贈った。牛舎の敷料としていた製材カスのオガクズが木造建築の減少で入手が困難になった。勿論、製材所が減ったとはいえ全く無くなったわけではない。しかし、可動しているのは大規模な近代化製材所と木材港周辺の大工場のみ。おまけに牧場も何百頭、何千頭規模の大牧場の出現で、私達のような小牧場はお余りを頂くだけ。そして需要が供給を上回っているのだから配送業者は値段を釣り上げる一方。そこでチップ工場の青原木材に目をつけてダストなる木粉を買い取ることにしたのだ。その関係で彼と因縁が出来た。大人しくて真面目で、人の先に立ってよく働く、成功者の 3 代目とは思えない姿勢、この一族の成功はまだ暫くは続くのでは思える生き方で感心している。

私の周辺には、このような人が少数ではあるが何人もいる、その人達から見ると私の小冊子など小人のたわ言かもしれないが、少なくとも私の生き方の一片を表現している。

その中で一つでも参考になる考え、生き方を読み取ってもらえたらと、若い人たちにばらまいている。

2017 年 1 月　見浦哲弥

雨が降らない(2018/8/25)

2018 年 7 月 7 日の呉、広島の豪雨で雨はもう要らないと呟いたら、その反動が来た。あれから 2 ヶ月近く、この間 1 日だけ少しばかりの雨が降っただけ、その雨は小板川の水量を 2-3 日増やしただけで、また元のチョロチョロの流れに戻った。
幸い完全には干上がってはいないので川の住民がひっくり返って死ぬとまでは行かないが、牧草畑は伸びるどころか、赤くなって枯れ始めたところもある。例年なら刈っても刈っても追いつかない位伸びる草だが、今年は毎日の給与の粗飼料にも事欠始末。したがって購入の乾草の消費が増えて支出の大幅増に悲鳴を上げそうである。

そこに天から援軍と 2 つの台風がやってきた。19 号と 20 号、西日本目がけて 2-3 日のズレでね。これで今年の水不足は解消すると期待したのだが、台風が連チャンで到来となると被害は免れない。凡人の常で雨だけ持ってきて台風はそれてなどと欲の深いお祈りをしたら、台風はそれてくれたが、雨はほとんど降らなかった。天罰覿面(てんばつてきめん）である。

しかし、捨てる神あらば拾う神ありで、25 日の早朝一雨きた。本格的な雨ではないが、ないよりはまし。この天変地異は地球温暖化のせいだと論じる学者もいるが、貧乏な牧場には、日々が何とか過ぎてゆこことを、ただひたすらに祈るだけなのである。

が、例年なら無数の赤とんぼが天を舞うのに、今年はとんぼがいるねと確認するのみ。ツクツクボーシも一声二声、例年なら鎮まれと号令したくなるほど聞こえて来るはずなのに、今年は異常である。

2018.8.25 見浦哲弥

原爆の広島駅(2018 年 7 月)

2018 年 7 月 インターネットで原爆直後の広島駅の写真を見た。橋の近くから見た広島駅正面の遠景は初めてだ。私の想像していた惨状より遥かに凄まじい。70 何年前、原爆の 12 時間前にあの駅のドームの下にいた私が生き残れた可能性は限りなくゼロに近かったと恐怖が甦った。そして”正義の無賃乗車”の出来事はまさに間一髪の行動だったんだと再認識したんだ。14 歳の少年にしては出来すぎた判断、行動だったと自分ながら感心している。

あれから起きた様々な困難も、人生プラス・マイナスゼロの原則で良いことがあればその逆が必ずあるという法則が適用されただけ、そして私は生き残った。

私の人生は良いことが 51%と僅かに幸運が多かったと感謝しているが、あのとき切符をなくした向井くんを連れて帰ることで正論に背く行動をとったことが、間違いではなかったと来るから、人生の歩き方は難しい。

しかし、駅の大ドームの下にいた沢山の人たち、その内の幾人が生き残ったのだろうか、思い出しても心が痛む。70 年もの年月の彼方だが、あの人たちの声が聞こえるのは私の心の迷いだろうか。

2018 年 7 月　見浦哲弥

夢(2018/8/13)

2018.8.13　久方ぶりに本格的な夢を見た、それは思いもかけず本を買った夢だ。

それはどこだか判らないが、用事で街に出る度に立ち寄る小さな本屋、その店は私が関心を持っ本ばかりが並んでいた。月刊誌やサイエンスの小冊子から、専門誌。貧乏な私は立ち読みは出来ても安い本が買えれば御の字という夢の中のお店だった。

でも、3 冊セットの専門書、欲しくても貧乏で買えない、専門書の立ち読みで理解ができる頭ではないし、それが連続して夢の中で繰り返す、最後に勇気を絞り出して注文したんだが代金をどうやって支払おうかと思案して目が覚めた。それが真に迫っていてね、とても夢だとは思えなかったんだ。私の貧乏は人生の最後までつきまとうらしい。

目が覚めたら貧乏は貧乏でも夢の中と違って何とか暮らして行ける有り難い生活、少しばかり安心したんだ。

しかし、ここ何年か夢の中の旅をしたことはなかった。先日の熱中症で脳神経が少しばかり傷ついたのかな？ともあれ貧乏な本読みが現実のような夢を見たと云う報告。

2018.8.13 見浦哲弥

飛行機雲(2018/10/8)

小板はかの悪名高きブラウンルートの真下にある。敗戦から今日まで 70 年余り、米軍の戦闘訓練に付き合った。周辺の住民は騒音被害と声が高いが、これも悪名高き日米戦争の置き土産、東条さんを始めとした馬鹿将軍たちのおかげとあきらめている。もっとも陸軍にも宇垣一成将軍のような優秀な軍人もいて、昭和天皇も彼を首相にしたのだが、権力闘争で破れて敗戦国日本が出来上がってしまった。その結果、ブラウンルートなる米軍の訓練空域が小板の頭上にある。時折、最新鋭の戦闘機が訓練飛行にやってくる。単機で来るのは新米の習熟飛行、スピードは早くはないので爆音から機体を見つけるのは比較的たやすいが、2 機でおいでになっての戦闘訓練は猛スピードで、聞こえる爆音のはるか前方の機体を見つけるのには努力がいる。教官機を懸命に追う練習生、空の教室も命がかかってただ事ではない。小板集落の峰一つ向こうが樽床ダム、日頃は聖湖は平和な都会人の憩いの場、キャンプ場あり、ダムのすぐ近くに三ッ滝なる名瀑もあるが、半島の緊張が高まると爆撃訓練の対象になる。高空から一直線に急降下した戦闘機が稜線に消えたかと思うと急角度で上昇する、一つ間違えば地上に激突するのかと手に汗を握るのだ。

ところが、これが半島や大陸とアメリカの関係がギクシャクすると、途端に激しくなる。朝から暗夜の埜まで駆け巡るルートの下の町村が悲鳴を上げて政府に騒音被害と迫るのだが、敗戦国の悲しさ、善処しますの一言で終わりになる。無謀な戦いをし掛けた報いは 200 年は続くと私は思っているのだが、物忘れの国民は敗戦の歴史を忘れ、責任者の東条さんの罪も忘れて騒音被害と大声をあげる。無学のドン百姓の老人でも理解している歴史を、都合の悪い点は忘れて被害だけを並べても、世界が認めてくれるほど甘くはない。

時折、松江の自衛隊の哨戒機がやってくる。レシプロの 4 発機がブラウンルートの少し高い空をのんびりと飛行して小板の空を 1-2 回周回して帰ってゆく。同じレシプロ 4 発機でも前の大戦の B29 は 1 万メートルの高空を白煙を引きながら飛んできた。あまりの高空で爆音は聞こえなかったが、広島まで轟いた広の絨毯爆撃の爆弾の音は忘れることが出来ない。

平和の現在は、その高空を大きな旅客機が飛び回る、小板はその民間航空路の真下にある。北東から大阪方面からのジェット機が、反対に南西から九州方面からもやって来る。白煙を引きながらね。深入山の頂上あたりで上昇を止めるらしく、それまでの白煙が消えて銀色の機体がゴマ粒のように太陽の光を反射する、それも青空に消えて次の白煙があらわれる。白煙が見える気象条件の日には北から南から何本もの白線が大空に残る、もっともそんな天候は 1 年に 10 日もないか。同じ白煙でも B29 の白煙と違って平和の有り難さを痛感する。

この他に年に何回かトイプレーンがやってくる。加計の温井ダムの辺りのミニ飛行場から飛び立って深入山を一周してお帰りになる。一度飛行場にお邪魔して同好会の皆さんがお持ちの飛行機を拝見したがロッドの骨組みにカンバスを張った飛行機で空を飛ぶとは私には非常識の世界であった。こんなものに乗って 30 キロ近くも飛んで深入山までやってくる、私にとっては理解できない冒険の世界だ。それでもお天気のいい日にブーンと脳天気な爆音は平和の有り難さを教えてくれる。配線間近の昭和 20 年、米軍機の目をかすめるように同じ空を戦闘機から練習機まで低空を飛んでいった。戦後、特攻機とするためと聞いた空は今は平和である。

2018.10.8 見浦哲弥

S さん(2018/6/30)

S さんは私の同級生である､小板に移住した時から松原の高等科を卒業するまでのほぼ 4 年間、お隣の S さんはクラスメイトだった、おとなしい性格で国語と書き方が得意、悪筆の私など及びもつかない綺麗な文字が書ける秀才さんだった。そろそろ色気づき始めた少年には、まぶしい、眩しい美少女に見えた。勿論、食べるに事欠く没落地主の少年には遠い遠い存在だったのだが。

あれから長い長い年月が過ぎて彼女が痴呆症を発症し施設に入ったと聞いてから 10 年以上も過ぎた気がする。先日、八幡の晴さんの姉から晴さんに S さんの容態が良くないから、別れにゆかないかとの誘いに翌日に連れ立って見舞いに行った。帰ってからの報告では、口も下も管で繋がれていてね、生きていると言うだけだったとの話、華やかだった美人の彼女を知るだけに無残で、天の神様は時たま酷いことをなさると思った。

私にとって異性を感じた女性は彼女が 2 番め、子供から少年に、そして成人にと時々に心に残る異性は、人生が終ってみると苦楽をともにした晴さんしかいないが、私にもほのかな好意を持った異性は存在したんだ.

福井市旭小学校の 2 年生のとき、い組の級長に選ばれて授業開始の「気おつけ、礼」の号令をかけるのが級長の仕事の一つだった。終了時の号令は副級長の K さんが受け持って、嬉しかったね。級長は黄色の肩章、副級長は緑の肩章、先生との連絡で教員室に出入りが許されてね、副級長と連れ立って行ったものだ。K さんは目の大きい明るい顔立ちの女の子だった。80 年たっても名前を覚えているから私にとって大切な異性の 1 人だったかも。

次に異性として女性を見たのは S さんである。6 年生の時だから私が早熟だったのか。しかし時は私の多難な人生が始まった時期、男子の友達と違った感情を持っても恋とは違ってほのかな関心だけだったがね。そして彼女は高校に、私は毎朝わらぞうりで草刈りに、この差が屈辱感になり勉強にのめり込んだ原動力の一つだったことは否定しない、若かったからね。

最初に検定に合格したのは 20 歳だったか。工業高校の電気科卒業の資格、これでは小板を脱出して都会で食べてゆくには力不足、次の高等工業卒業の検定に合格したら彼女のことを考えて、などと妄想したが世の中はそんな甘いものではなかったんだ。結果として最良の伴侶と結婚することになった人生は波乱万丈としか言いようがない。

彼女が隣村にお嫁に行った日、発熱して昏睡状態におちた。日本脳炎の発症である。そして半月生死の境をさまよった。幸い父の教え子の久賀医師が雄鹿原病院の院長で彼のおかげで命を救われた。3 日間不眠不休で治療にあたられたとか、失恋？はしたが、久賀先生という生涯の師を得た。今振り返ると私の歩く道はこの道しかなかった気がする。

それからの長い年月、義姉として彼女と会うことは度々あった。お互いに歳を重ねて茶飲み話で「あんたが初恋だったんで」と話してみたいと夢見た事もあったが、その前に痴呆になって私の思い出の中だけの S さんになってしまった。

でも、私の大切な女性の 1 人だったことだけは変わりがない。

もうすぐ私の人生も終わる。私の人生は晴さんなしでは考えられぬ、大切な人だ。ただ、心の片隅に二人の異性がいた事は否定はしない。そしてSさんが淡い初恋だった人だった記憶も心に残っている。
「さようならSさん」

2018.6.30 見浦哲弥

岡本豆腐の復活(2018/8/27)

2018.2.6 三段峡豆腐の岡本さんが来訪した。壮年の男の人二人を連れて。先日、岡本さんが営業を再開するとの噂が流れてきて、家族で喜んでいた矢先だったので嬉しかったね。

彼との付き合いが始まってもう 30 年近くにもなるだろうか､長い長い時間が経ってしまった。副産物のオカラの引取を依頼にこられてからの付き合いで、何十年にもなる。

その彼が私の話の何に感銘したかは知らないが｢それなら俺は大豆から取る豆腐の数を決めて、それでお客さんの心をつかむ｣と宣言したのです。律儀な彼は原料の大豆の値段が上がっても初心を守り抜きました。大豆は国際商品ですから経済の変動で高騰する時もある、それを愚痴を言いながら頑張る、そんな彼は私達家族の心の友に変化して行きました。そして 30 年近くのお付き合いが続いたのです。

人の心理は不思議なもので、彼の豆腐への姿勢は少しずつファンを増やし始めた。そして 30 年、冷蔵庫に岡本豆腐がないと寂しくてと言うお客さんが出始めたのです。品質にこだわる岡本豆腐は決して安くはありません。しかも絹ごし豆腐とは違った田舎豆腐、でも口にすると｢あー、これは岡本豆腐｣と一瞬で訴えてくる、その味はどこの豆腐も及ばない味の田舎豆腐に変化していたのです。

田舎豆腐は個性が強い豆腐です。スーパーに並べられた豆腐は見た目と一瞬の味にこだわる、大量生産と万人向けの味と、そしてコスト削減と、市場経済の中での生き残りゲームの世界です。 同じ視点では後発の商売に勝機はありません。私が学んだ経済は大資本で価格競争をするか、一 歩先んじて新しい価値を創造するかしか競争で生き残る手段はありませんでした。

まして新人がゼロから参入するのは困難の極みです。当然敗退者が続出する世界なのです。しかし、悪貨は良貨を駆逐すると言い切れる世界でもありません。時間はかかりますが、いい物はいい、悪いものは悪いと評価してくれる世界でもあるのです。ただ時間がかかる、そんな時"手を抜いたら儲かるよ"の声がかかる、そんな一面がある世の中なのです。多くの人がその誘惑に打ち勝つことが出来ない､それは利益追求が第一と理解している経営者が多いからなのです。勿論、資本主義の世の中ですから赤字の垂れ流しでは破滅が当然ですが、その狭間を消費者に自分たちの思いが理解してもらえるまでの時間を懸命にくぐり抜ける、そんな戦いなのです。しかし、私達の時間は有限です。その焦りから消費者に思いが届くまで耐えることが出来ないで失敗者が続出する、そんな世界を見続けてきました。

夢を持って挑戦する新人に｢頑張って｣とエールを送ることは簡単ですが、困難に打ち勝ってと簡単に激励するのは私には出来ません。ただ成功を祈るだけなのです。

岡本豆腐はそんな戦いを生き抜きました、私の素晴らしい友人なのです。

2018.8.27 見浦哲弥

私の自動車遍歴(2018/11/15)

私が住む小板は広島市から約 100 キロ、昔風にいうと 25 里、中国山地の分水嶺近くにある、瀬戸内海より日本海に近くて益田市まで70キロ(これは最近の話)私の少年の頃は無舗装の一車線がいくつもの峠を越えてやっと海にたどり着いた、それでも瀬戸内海よりは近かったね。

そんな中でT家にイギリス製のマチレスなるオートバイが入った。荷物を積んで走る車ではないが、人一人を後ろに乗せて走る。積載量はわずかでもスピードが桁違い、 50 キロや 60 キロの荷物を簡単に運ぶのを羨望の目で眺めたものだ。暫くして自転車につける補助エンジンが発売された。外国製ではないので努力すれば庶民でも何とか買える値段、我が小板にも 2 台が入った。 1 台はホンダのカブ号、まだ幼稚なエンジンでなかなか始動しない、エンジンが動くと「かかった」と大喜びをしたものだ。
都会の復興が始まると中国山地の林産物の需要が増えて、小板にもT家が 500 キロ積みのダイハツの 3 輪車トラックを、S家がマツダの 1 トン積 3 輪トラックを購入して山仕事に利用し始めた。小板のモータリゼーションの始まりである。

親父さんから 90 アールの田圃を任されて独立はしたものの私達は貧乏のどん底、自前の足をもつ余裕はない。でも時代はモータリゼーションの夜明け、他家の自前の交通手段に羨望は増すばかり、その折、友人が広島の取引先で軽三輪トラックの中古の出物があると伝えてきた。値段は 13 万円、新車が 20 何万円だと記憶しているが、その話に飛びついた。そして我が家にも自前の交通手段がやってきた。これが見浦家のモータリゼーションの始まりである。でもとんでないボロでね、マツダが競争相手のダイハツのミゼットに対抗するために作った、性能より外観という、良心を疑われるような車だった。
丸ワッパの 2 人乗り、300 キロ積みの荷台があって、故障がなければ夢のような便利な車だったが、今なら犯罪になりそうな品質だったね。360cc のV型 2 気筒空冷エンジンで小さな冷却用のファンがあってね、公称 13 馬力、非力でね、虫木峠を登れない。休んでは情カをつけて一寸ずりでよじ登る、スバルの R360 は乗用車ではあるが 4 人乗って道路を走るのに何ら問題はないというのに。性能の差に呆れて、マツダのセールスマンに聞いたことがある、同じ 360CC なのにどうして力が違うのかとね、その答えが「私達もその理由がわからない」と。それからは マツダにファミリアが登場するまでは自動車会社としては敬遠したね。

親父さんが癌で広大病院に入院した時に、看病と大畠（オオバタケ：見浦家の屋号）の農業と二つの仕事をこなす羽目になった。そしてボロ車ではあっても軽三輪は広島で看病をして夜中に小板にトンボ帰りの足となったんだが、これが故障の連続でね。パンクはするわ、バッテリーは上がるわ、エンジンは掛からないわ、 大変な騒ぎ。この事はジャッキが別売りで懐具合の都合で購入してなかったから、民家に借りに行くと、返してくれる保証をしろ、など、夜中に泣きべそをかきながらの広島通い。さすがに何とかしないと思い立って我が人生で 1 度の新車を購入したんだ。トヨタのパプリカ、41 万円だったかな、家中の小銭までかき集めて手に入れた車は評判は悪かったがトヨタの歴史に残る名車、安くても走りは本物の自動車だった。水平対向空冷 2 気筒 700cc、27 馬力、定員 4 人を載せて坂道も快調に走ったが、冷房がなくて、冬は寒くて、もう一つの欠点は簡単なハンモックシート、それらを我慢すれば 50 キロ―60 キロの連続走行は問題はなかった。ただ 2 気筒のポトポトと乗用車らしからぬ排気音は頂けなかったが、室内には聞こえてこないし気にすることはなかった。オヤジの退院後はドライブを楽し

ませてもらったものだ。お巡りさんに「お百姓が乗用車を乗りまわす時代になったか」と変な感心をされたり、最高の車だったね。

しかし、新車に乗ったのはそれが最後、以来、私の自動車人生は中古車のオンパレード、しかも廃車寸前の車ばかりだった。乗用車もトラックも、軽自動車も、そして国産の自動車メーカーの全てに付き合ったんだ。
だがボロ車とはいえ、近代文明の利器である。荷物も運んだし、親父の看病で広島へも通えた、近隣ではあるが見聞を広げることも出来た、研究会に欠かさず出席できて知識を吸収できた。見浦牧場の自動車はボロ車だったが、大きな実益をもたらしてくれた。たとえ人がどんな批判をしようともである。

そして世の中は自動車の世の中、ウォーキングと称して歩きを楽しむ人たちが異質に見える、そして休日ともなれば軽自動車からスポーツカーまで人影が薄くなった小板を走りすぎる、これが時代の進歩と言うものかと老人は納得している。
現在、見浦牧場はトラック 3 台に乗用車 1 台、ミートセンターの律子君の車まで入れると 5 台の車が乏しい家計から税金を収めて日本国に奉仕している。

2018.11.15 見浦哲弥

励まし(2019/2/7)

2018.1.1 旧国道 191 号線が深入峠を目指してひたすら登る途中に小さな別荘がある。その昔、小板に移住してきた青年が建てたログハウスの小さな小屋、青年が新国道沿線に別棟 を新築して移住して行って売却した小さな別荘、これを広島郊外のご夫婦が買い取って週末を楽しんでいた。見浦牧場のスキー場跡の牧草地に作業に行くときに時々お会いする、 一言二言ご挨拶をするささやかな関係だった。

その牧草地がある場所は深入山の頂上に続く稜線と稜線の間の谷がひたすら峰を目指す、その途中に山葡萄の自生地があってブドウ谷と古人は呼んでいた。そのヤブの下が格好の熊くんの居住地で牧場は彼らの餌場の一部、草刈りに行くと熊くんの通り道がくっきりと浮かんで、所々に新鮮な排泄物の山がある始末、家の背戸の牧場で牛が被害にあっている当事者としては他人事ではない。立ち話のついでに熊君の情勢を知らせて夜間はあまり出歩かないでと要請したもんだ。

人伝に、その人が亡くなったと風の便り、 2-3 度話をしただけのお付き合い、私より少しばかりお若いお二人に、何歳だったかなと思っただけで忙しさの中に忘れていた。突然、そのご主人がお出でになった。午後の作業に出かける準備をしているときだった。

最初はどなたか理解が出来なかった。亡くなったのはご主人だと思い込んでいたからだ。「別荘の〇〇です、親切にしてもらった家内が亡くなって」と挨拶されても、一瞬理解が出来なかったが、話しているうちに、亡くなられたのは奥様、少し太めの優しい人、通りすがりの牧場の人間の余計な一言を熱心に聞いていただいたと思い出したんだ。

お話を聞くと今は巨大な太田川放水路になった祇園の下流の土地持ち農民だったらしい。土地整理組合で苦労した話をされていたっけ。勿論、広島市の膨張で農地は市街地に一変、環境の激変で散々苦労をされたとか。今はビルを持つ地主さんに変身したが、その間の奥様の苦労は尋常ではなかったとか。彼女がいなかったら私の現在はなかったと、そして彼女が先立っとは想像もしなかったと、そのショックからまだ立ち直れないと心の内を明かされる。

平凡な都会人の気まぐれと思った別荘人にも人知れぬ苦しい人生があった。お話を聞いて先輩面をして、「人間の寿命は自然が、天が決めて、人の力の及ばないところ、悔やんで後ろ向きにならないで前向きに、前向きに生きて頂くことを奥様も望んでおられると思います。“貴方の思い出の中に奥様は何時までも何時までも生きている”、そう信じて残った人生を精一杯、生きましょうや」と申しあげたんだ。名もない田舎の老人の話を聞いて、少しは明るい顔になって「そうですの」と帰られた。

私自身が老境の最後の段階、人に意見を述べる状態ではないのだが、成り行きで、でも元気を出してほしいと思うのは本心である。

2019.2.7 見浦哲弥

島津和弘様(2013/2/15)

思いもかけず、お便りを頂き感激しています。たしか安佐農協でお会いして以来かと思いますので１０年にもなりますか。息子の和称からご活躍をお聞きしてはいましたが、退任されて、お百姓さん専業とは思いませんでした。お元気な近況をお知らせ頂いて感謝しています。
今回の記事、農協の取材は、お受けしたくはなかったのですが、色々とお世話になっている関係で止む得ずお引き受けしたのです。あんな写真になって困ったなと苦笑しているところです。私達は何も立派なことをしたわけではありませんし、中山牧場のように大成功したわけでもありません。ただあの当時の中島先生、榎野先生や県農業改良課の皆さんの夢を農民の側から追っかけてみただけなのです。30 初めの青二才にしては課題が大きすぎ、投げ出すには根が深すぎた。気付いたときは一部の人に注目されるようになっていましたが。

そのきっかけは中島先生との出会い、孫に読ますために書いた文章がありますのでお送りします。田舎親父の想い出話で、つれづれにお読みください。それからが榎木先生、そして佐田さんを初めとする皆さんがた、どなたにもお世話になりました。あれから、安全で、美味しくて、リーズナブルな値段の和牛肉の生産牧場を 50 年、追い続けました。牧場の初期に太田市の国立農業試験場中国支場を見学したことがあります。そして和牛の放牧飼育について教示を仰ぎました。先日、その時の資料が出てきました。その余白に放牧用の和牛は何処で購入すれば良いのだろうかと、私が書入れをしていました。芸北の牧野組合の牛が雪中で凍死した事件から、寒中はマイナス 15 度にも 20 度にもなる小板では寒さに耐える牛をベースにしないと成り立たない、その牛は自分で作らなくては何処にもいないと知ったのです。和牛の選抜改良は兵庫の神戸牛で長い歴史があり、数多くの牛飼いの努力の結晶、結果であることは理解していました。それを個人で挑戦する、無謀としかいいようがありません。でも若かった。放牧一貫経営の油木方式の解決のキーはこれだと信じ込んだのですから。兵庫の例から見て既存の資源をフル利用しても 10 年や 20 年の話ではない、 70 年いや 100 年単位の仕事、有限の命の人間にとって成果を見ることは不可能だなと理解したのです。さすれば和牛と言う畜産業を、和牛と言う家畜を、和牛飼育と言う産業の社会への役割を、次世代により多く伝えて私が願った目標を追ってもらいたい、勿論、我が子とはいえ別個な人格、こうであれと強制はできない、理解しやすい生き方をしてみせ、理解される牛との付き合い方を見せて、次世代として育てるしかない、それが成功したら彼にも次の世代への努力をしてもらってと、考えたのです。

長男は九大の農学部を卒業したのですが、都会に去りました。末っ子の和称がガールフレンドを連れて帰ってあとを継いでくれました。井口高校の電算部の仲間だった二人は小板の自然の中で和牛という命を見つめ、それを日本の産業の中で生き続けさせることに興味を持ってくれています。私は結果をつかむことは出来ませんでしたが、次世代に繋ぐことは出来たのではないかと満足しています。そして、あの写真の視線の先に新中国山地の農業が出現することを願っているのです。

お送りした文章は孫に読ませるために書き綴ったものです、お暇があったら読みください。
お葉書、本当に有難うございました。くれぐれも、お体大切に願いあげます。又、ご教示いただくことを楽しみにしております。奥様によろしく。

2013.2.15 見浦哲弥

註

見浦牧場のもう１人の恩師を紹介します。よき指導者でアドバイザーでした。"岡部先生"、何十年も見守ってくださいました。

農業教育に一言。"代用教員"で中学生を教えたことがあります。サラリーマン教員だけでなく現役の実践家も農業教育に利用すべきではないか? 素人の戯言です。

小便物語(2018/12/30)

老齢になると小便が飛ばない。特に男性はそれが如実に現れる。若かりし頃、いや 50 歳頃だったか、会合で「ションベンが飛ばなくなって」、と先輩が話すのを笑い話と聞いたものだが、それが現実として我が身に現れると真剣に考えざるを得ない。老化とは筋肉の衰えだから、小便が飛ばなくなるのは当然のことだが、こんな形で警告してくるとは造化の妙と感心している場合ではない。

就寝時に排尿のためのトイレ回数が増え始めた。87 歳の現在、3 時間おきだが、少しずつ短くなる。先輩は尿瓶を愛用するようになったとのたまったが、むべなるかなと納得している。

おまけに尿意を感じたとき我慢ができる時間が短くなった。注意しないと下着に漏らす可能性すらある。先人は老人になると何時の間にかズボンが袴に変わっていた、それも知恵の一つだったんだ。最近はホームセンターで子供のオシメと並んで大人のオシメが堂々と商品棚を占領している。尿もれパンツと称しているが老人のオシメである。赤ちゃん返りまで行くと老人にも必需品になるのか、愛用者が多いらしい。私もお世話になるのも近いのかもしれない。老人になるのも 大変である。

少年の頃、小便の飛ばしっこをやったっけ。遠くに飛ぶのが当たり前と思ったが、あの頃は体が成人に向かって日に日に成長していたんだ、現在の孫たちのようにね、小便もよく飛んだと遠い昔を偲んでいる。

振り返ると、この集落では最年長者?になったが、そんな繰り言も老人の戯言と耳を傾ける人はいない。若かった過ぎさりし日の私のように他人事なのである。誰も自分がその老人になって悲哀を感じるまでは自分は例外なんだ。人が必ずたどる道なのだが、私がそうであったように我が身に起きるまでは他人事なのである。

小便物語は人生の中の小さな出来事、でも誰もがたどる道、この小文を読まれた人は、どこかに記憶としてとどめて、若さに感謝して時間を大切に生きてほしいと、在りし日の自分を振りかえりながら願っている。

2018.12.30 見浦哲弥

今年も燕がやってきて(2019/6/18)

2019. 5. 16　今年も燕がやってきて、ここが私の定席とばかりガレージの天井に営巣、それを我が家の猫くんが乗用車の屋根から良き鴨と狙うという恒例の活劇が始まった。勿論、数が減ったツバメ君、猫やカラスの餌食にしてたまるかとネットを張って対策をしたのは言うまでもない。

昔はといっても茅屋根の時代だが小板にも燕が沢山やってきた。春先まだ残雪が残っているのに燕が春が来たかと偵察にやってくる。「燕がきた」は、まだ春遠しと思っていた住民に春は其処まで来ていると告げに来てくれた。害虫退治のツバメ君に好意を持つ農家は早速木の枝と藁で営巣の台を作って高い囲炉裏の天井から吊り下げる。当時多かった青大将君が卵を狙ってやってくるから燕と人間は共闘するのだ。燕も営巣するため安全には知恵を使うんだ。そして春先から秋の訪れの匂いがするその日まで小板の空で燕が昆虫を追い回す。彼らの餌の中には農業の害虫も少なくない。従っていたずら専門のカラスと違って燕は農民の友達で人間の住居の近くに営巣する。そして子育てのドラマを演出してみせる。泥土と藁や枯れ草の巣作りは小さな体の燕夫婦が懸命に働いた成果、そして人間と燕が協力して夏を演出、南の国へ旅立つ日まで小板の空の燕は風物詩の一つなんだ、懐かしい遠い思い出も蘇る風物詩なんだ。

その貴重な燕君、巣作りをして、抱卵をして、子燕の黄色いくちばしが覗いて、黒い頭が親が運ぶ餌の取り合いをする頃にやっと何羽孵ったとわかる。今年は 4 羽だった、5 羽だったとね。育ち盛りの子供の餌のために親鳥夫婦は早朝から夕暮れまで休む暇がない。懸命な姿は自分たちの子育てを思い出す。「我ながらよく働いたな」と、それが生き物の宿命なんだなーと。

6.16 5 羽の子燕が巣立った。猫にもカラスにも襲われずに無事にね。昨年は片親が死んで 1 羽で懸命の子育てだったが、いかんせん力不足、栄養が足りなくて巣立ちに落下して飛び立つ力が足りず、無残にも何者かの餌食になった。そんなこんなで電線に 5 羽の子燕が止まって、親燕の餌を待つ光景は心があたたまる。餌を運んできた親ツバメが口移しをしないで「ここまでおいで」と空を飛ぶ訓練をする。まるで人間の家族を見るようだ。子燕が自分で餌が採れるようになると親ツバメは次の子育てに入る。秋の大旅行の前にもう一度の子育て、急がないと南へ海を渡る体力の 2 番子は育たない。生き延びるということは大変なことなんだ。

毎年繰り返される小さな小劇場、でも素晴らしいドラマ、今回は大成功だった。次も成功裏に終わるよう今から祈っているんだ。

2019. 6. 18 見浦哲弥

夢(2018/11/17)

人には様々な夢がある。現実には厳しい生活があって、夢は夢でしかないが、夢を見ることは楽しいことには違いはない。子供の頃の夢は空想の世界、現実とは程遠い。それが大人に近づくにつれて夢も現実に近づいて変化してゆく。その夢の変わり目は何時だったのか、気づいてみれば私は中国山地の小さな牧場の老爺に変身していた。

でも、時折の夢の幾つかは記憶に残っている、そして関わった人達は夢の中では年を取らないで現れる。いい思い出は懐かしく、関わった人達は笑顔で微笑みかけてくれる。しかし、悪い思い出も蘇る、忘れたい顔も消え去ることは無い。

忘れたい出来事もある、思い出したくない失敗も少なくない。そんなときは、あの時はああすればよかったと、遠い昔を後悔するのだ。

少年や青年の頃の夢は希望に輝いていた。そして生きるという厳しい現実に無謀な挑戦をするのだが、夢は簡単に実現することはない。夢のまた夢、血の涙を流しながら何度も何度も挑戦して乗り越えても、容易に成功の道にはつながらない。それでも乗り越えなければ明日はないと教えられていなかったら、凡人の私はとっくに投げ出していたであろう困難、そして辛うじて終点の老境に達した。しかし、後続の若者たちに「1 度きりの人生だ、 我に続け」などと声を掛ける勇気はない。それは辛い辛い道なのだ。それでも人生の終わりに「ああすれば良かった」と後悔をするのなら、厳しい道を選ぶのを止めはしない。たった 1 度の貴方の人生、歩くのは貴方なのだから。
でも老境になってから反省しても何も生まれてこない、反省しても過ぎた時間は蘇らない、その厳しさを学ぶべきだ。道を間違えれば悲しい人生に直結かも知れないのだから。

夢ははかないが、しばしの安らぎは得ることができる。しかし、現実と夢の隔たりの大きなことよ、でもささやかな憩いにはなる、辛かったがいい人生だったと、「良くやった」と自分を褒めてやろう、夢の中で。

2018.11.17　見浦　哲弥

稲刈り(2018/10/26)

秋、今年も稲刈りの季節がやってきた。お向かいのS家では3連休を利用しての稲刈イベントのために、兄弟、子供、孫たち一族が集まった。住居横の広場に6-7台の自動車が整列するのは壮観である。しかし、今年は期待の連休が雨で始まった。従って折角の一族の集合が時間つぶしで過ごして3日め、ようやく到来した晴天に、10アールばかりの田圃に機械と10人ばかりの大人が殺到し、あっと云う間に終了、夕方には自動車の一群は姿を消した。例年はノンビリと時間をかけて楽しむ行事が都会のあわだだしさで追われて、収穫を祝うこともなく終了とは傍観者にも寂さが伝わってきた。

わが小板には盛期 20 ヘクタールの水田があった。小さな盆地とはいえ黄金の稲穂が山の麓まで続いて、水があるところは全て水田だった。早春の緑、10月初めの黄金色は大切な我が故郷の風景のひとつだったのだ。 あれから80年近く年月は過ぎた。旧国道を松原側から走って小板集落に出ると一望の山村が出現する。牧草地あり、稲穂の揺れる水田あり、深入山と苅尾山とに挟まれたミニ盆地小板の、”ほっと”する風景である。その風景もさらに 500 メートルも走ると無残にも朽ち果てた農家や荒れた水田が目に付き始めるが、今日はそこまでは目をやらないことにしよう。
中国山地の集落が無住となって人影の消えた家々が山林に帰り始めてずいぶんになる。往年の姿を知る私達も気づかずに通り過ぎる杉林の中にも目を凝らすと田圃の石垣が見える。せめてもの故郷のしるしにと整備された墓所もある。そんな寂しい風景が、そこここに見える中国山地だが、ここ小板の入り口の風景は中国山地はまだ生きていると訴えているんだ。

閑話休題、稲刈りの話だ。作付けは10アールと50アールの2軒、最近は稲作りも近代化と様々な機械が登場、田植えが機械なら、除草は農薬、稲刈りは刈り取りと同時に脱穀を機械がやる。稲を乾燥するイナハゼは遠い遠い昔となって老人の私には異次元の世界になった。それでも今の稲作を伝えたいとS家でもO家でも子供や親類を集めて春の田植えから秋の稲刈りまでの実演イベントを開催する。S 家の小さな田圃の作業は人と機械でアッと言う間に終了。一方のO家では田起こしと堆肥撒き、畦草刈りは、都会住まいの当主が子供や孫を引き連れての農作業だが、田植えと稲刈りは耕作会社に委託して大型機械がやってくる。従って、これも一瞬で終了。眺めていると何日も腰を屈めて泥田を這い回ったのは夢だったかと思うのである。

しかし、一方の荒れ果てた田圃を見ると華やかだった子供の頃の小板を思い出す。ちいさな集落にも大勢の人がいたな、いたずら仲間の子供たちも十分な数でね。80年近くの年月で何もかも変わって、少しばかりの稲刈りでもを見ることが出来るのは幸せの一つなのだと。

ともあれ小板の稲刈りは終わった。出来ることならば来年も再来年も、この風景が続くことを願っている。それが長い年月を小板で暮らした老人のささやかな願いでもある。

2018.10.26 見浦哲弥

文章が書けなくなりました(2016/10/1)

８４歳と言うのは本人が考えていたより大変なことでした。貴方がご存知のように身の回りのことを雑文に書き流すようになってから、もう２０年あまりにもなりますか。最初は小学生の作文のような拙い表現だったのが、おぼろげながら私の思いが伝わる（思い過ごし？）様になって、踏み越えてきた人生の記憶を短文として残してきたのですが、それが辛くなり始めました。意識の集中が続かなくなったのです。

振り返ると長い人生でした。大方を広島の最奥の山間で過ごした人生でした。様々な人との出会い、変動の日本の中で私なりに激変を体験しました。周囲の友人達が信じることが出来ないような出来事にも出会いました。ただ残念なことに多くの場合信じてもらえない、小板の中だけに住んでいて、そんなに広い経験が出来るわけがない、見浦は夢想家だと非難されました。でも私の考えが何時か理解される時がくると、拙い文章を書き続けてきたのですが？。

しかし、記憶を文章にすると言うことは、ただ文字を並べることではありません。拙いながら読み続けてもらう、読者の興味を繋ぎとめなければ意義がありません。頭の中には書きたいことが浮かぶのに、それが文章にならない、やりきれない気がします。従前は拙いながら文字が浮かんで繋がり文章になりました。読み返すと幼稚ながら思いが伝える形になったのに、今はまとまらない､何を言いたいのかと自分に問い返す始末､これが老いるという事なのでしょう。

先人の老化を見てきて、自分だけはああはならないぞと心に誓ったのに例外はありませんでした。今になって思います。一度きりの人生、人が読む読まないに関わらず、心に浮かんだことは記録すべきです。人の役に立つ立たないは別として、自分が生きた証なのですから。

そして、読まれた方が心に留めて、少しばかりでも私の思いが伝わったら、ものすごく素晴らしいことだと思うのです。

2016.10.1 見浦 哲弥

転倒(2019/6/22)

御年 88 才が 4 ヶ月過ぎた。まだ頭脳は何とか働いているらしいが、転倒を意識に置かなければいけないようだ。最初はショベルからの降車の際にステップを踏み外して転倒、起立しようとしても足に力が入らない。初めての経験でどうすれば起きられるかの試行錯誤、泥の中を這い回ってようやくショベルのステップに掴まることができ、体を持ち上げて起き上がったが、私は残念ながら左手がある角度以上では力が入らない。そこで、姿勢でも一苦労、感覚的には 1 時間近くもかかった気がしたが、実際は 30 分位か、なるべく泥だらけにならないようにと努めたが、それでは起き上がれないと気づくまでに時間が要ったね。

あれから半年にもなるか、左足の衰弱が原因だと気づいて注意はするようになって転倒は遠のいたと思ったら、つまずくことが多くなった。勿輪、注意は怠っていないが、老化による様々な現象にすべて対処するのには頭脳の衰えもある現在、完全の対応ができないことはよく理解しているが、優先順位を守って生き抜くのは大変な努力が必要とするのである。

最近は老人による自動車事故が多発して人身事故が多い。犠牲になる人も増えてニュースになる。他人事ではないが、理解ができないことも多い。確かに老化による能力の低下は自分でも感じている。それで運転をする時は注意点を繰り返し繰り返し思い返すことにしている。昨日も牛舎の敷料を取りに新庄の工場まで 2 トンダンプを運転して和弥のダンプと 2 台で行った。制限速度の 50 キロの遵守は当然だが、後続車への譲りもうまく出来たと思う。だが若干疲れた。最も 2 トンの積載で 10%の勾配の大谷登坂は 2 速、これは辛い、25 万キロ走行の我が愛車をなだめすかして何とか登った。私はまだ大丈夫か。勿論、交差点の信号など確実に見えるところで止まる、あたり前のことだが。

ただ乗車の時に注意が必要になった。運転台が高くなったとね。これは乗車姿勢を変えることで対応している。あと何年か何日か予見は出来ないが、最後の日まで全力で生き抜いてやる。これは私の命の実験である。

2019.6.22 見浦哲弥